

県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
第3冊

池内古田遺跡・池内御所原遺跡

2023. 2

香川県教育委員会

序 文

香川県埋蔵文化財センターでは、平成13年度より県道円座香南線建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を順次実施してまいりました。また、平成15年度からは整理作業を開始し、調査報告書の刊行を行っており、本書で第3冊となります。

本書で報告します池内古田遺跡と池内御所原遺跡は、香川県高松市香南町池内に所在する集落遺跡で、中世～近世の灌漑用水路や掘立柱建物等の遺構を確認しました。本遺跡は、高松平野南西奥部の香南台地と呼ばれる更新世中位段丘面上に所在します。本地域では、これまで本格的な発掘調査が実施されたことが乏しく、今回の調査により、段丘面上の土地利用の具体像や変遷について貴重な資料を得ることができました。今後の研究により、台地前面に所在する低位段丘面や沖積扇状地での遺跡群の調査資料と比較することにより、台地面の開発時期やその過程について、その地域色が明らかになるものと期待されます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として、広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、高松土木事務所ならびに関係機関・地元関係者各位には多大なご協力とご指導をいただきましたことに、深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願いいたします。

令和5年2月28日

香川県埋蔵文化財センター

所長 高原 康

例　言

1 本報告書は、県道円座香南線建設工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市香南町池内に所在する池内古田遺跡（いけのうちこでんいせき）と池内御所原遺跡（いけのうちごしょはらいせき）の報告である。

2 発掘調査は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3 発掘調査時及び整理作業時の調査担当機関における組織構成は、次のとおりである。

（発掘調査）

池内古田遺跡・池内御所原遺跡

期間 令和元年 10月 1日～令和2年 3月 31日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 原田 智 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 課長補佐（兼務）片桐孝浩 主任文化財専門員 松本和彦

文化財専門員 真鍋貴匡

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 西岡達哉 次長 石野高雄

調査課 課長 古野徳久 （調査担当）文化財専門員 森下友子・山元素子・宮崎哲治
(整理作業)

期間 令和3年 12月 1日～令和4年 3月 31日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 小柳和代 副課長 佐藤竜馬

文化財グループ 主任文化財専門員 森下英治 文化財専門員 宮崎哲治

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 高原 康 次長 北山健一郎

資料普及課 課長 信里芳紀 （整理担当）主任文化財専門員 蔡本晋司

4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

日下正剛、香川県高松土木事務所道路課、高松市教育委員会、地元自治会、地元水利組合

（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔡本晋司が担当した。

6 本報告書で用いる座標系は国土座標第IV系（世界測地系）で、方位の北は国土座標第IV系による。

また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SB 堀立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝 SE 井戸 SR 旧河道
SX 性格不明遺構

8 遺構断面図中の注記の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32版』を参照した。

9 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32版』を、玉類観察表の色調は長崎盛輝 2006『新版 日本の伝統色－その色名と色調－』、株式会社青幻舎をそれぞれ参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

10 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

須恵器： 田辺昭三 1981『須恵器大成』、角川書店

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし－大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40－』

佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」「関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢」

中世土器：佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV」、香川県埋蔵文化財調査センター

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査・整理作業の経過	2

第2章 立地と環境

第1節 地理・歴史的環境	4
--------------	---

第3章 予備調査の成果

第1節 調査の方法と成果	11
--------------	----

第4章 池内古田遺跡の調査

第1節 調査の方法	28
第2節 基本層序	28
第3節 遺構・遺物	43

第5章 池内御所原遺跡の調査

第1節 調査の方法	111
第2節 基本層序	111
第3節 遺構・遺物	119

第6章 自然科学的分析の成果

第1節 池内古田遺跡に係る樹種同定分析	132
第2節 香川県池内古田遺跡出土木製品の樹種調査結果	135
第3節 池内古田遺跡等出土サヌカイト製品の産地、遺物群推定	138
第4節 埋蔵文化財整理業務（池内古田遺跡・池内御所原遺跡）に係る金属学的分析業務	164
第5節 池内古田遺跡出土土器の胎土分析	175

第7章 まとめ

第1節 遺構の変遷	186
第2節 古田3号塚の調査	194
第3節 地形環境と土地利用の変遷	198
第4節 池内古田遺跡出土ベンガラ製造容器について	206
第5節 香川県内出土サヌカイト製火打石について	209

挿図目次

第1図	道路位置図	1	第56図	SE01 出土遺物実測図4	77
第2図	路線図と調査道路	3	第57図	SD10・SD11 平・断面図	78
第3図	道路位置図2	5	第58図	SD15・SD17・SD19 平・断面図	79
第4図	道路側辺地形分類図	7	第59図	SD21 平・断面・出土遺物実測図1	81
第5図	周辺道路分布図	8	第60図	SD21 出土遺物実測図2	82
第6図	予備調査トレンチ配置図	13	第61図	SD22 平・断面・出土遺物実測図1	83
第7図	トレンチ平・断面図1	14	第62図	SD22 出土遺物実測図2	84
第8図	トレンチ平・断面図2	15	第63図	SD22 出土遺物実測図3	85
第9図	トレンチ平・断面図3	16	第64図	SD23 平・断面図	86
第10図	トレンチ平・断面図4	17	第65図	SD24 平・断面・出土遺物実測図1	87
第11図	トレンチ平・断面図5	18	第66図	SD24 出土遺物実測図2	89
第12図	トレンチ平・断面図6	19	第67図	SD25・SD26 平・断面図	90
第13図	トレンチ平・断面図7	20	第68図	SD28 平・断面・出土遺物実測図	91
第14図	トレンチ平・断面図8	21	第69図	SD29 平・断面・出土遺物実測図	92
第15図	トレンチ平・断面図9	22	第70図	SD31・SD33・SD35 平・断面・出土遺物実測図	93
第16図	トレンチ平・断面図10	23	第71図	SD36・SD40 平・断面図	94
第17図	予備調査出土遺物実測図1	25	第72図	SD37・SD38 平・断面・出土遺物実測図	95
第18図	予備調査出土遺物実測図2	27	第73図	SD39 平・断面・出土遺物実測図	96
第19図	池内古田道路調査区割図	29	第74図	SD41・SD42 平・断面・出土遺物実測図	97
第20図	1 区北壁・東壁上層断面図	31	第75図	SD43 平・断面図	98
第21図	1 区西壁・2 区北壁上層断面図	32	第76図	SD44・SD45 平・断面・出土遺物実測図	99
第22図	2 区東壁・西壁上層断面図	33	第77図	SD47～SD50 平・断面・出土遺物実測図	100
第23図	2 区南壁・3 区東壁上層断面図	34	第78図	SX05 平・断面図	101
第24図	3 区西壁・南壁上層断面図	35	第79図	SX07 平・断面・出土遺物実測図	103
第25図	4 区北壁・東壁上層断面図	36	第80図	SK01・SK04・SK09・SK11・SK13・SK14 平・断面図	105
第26図	4 区西壁・南壁上層断面図	37	第81図	SD01・SD04・SD05・SD12 平・断面図	106
第27図	5 区東壁上層断面図	38	第82図	SD18・SD32・SD46 平・断面図	107
第28図	5 区西壁・南壁上層断面図	39	第83図	SX02・SX04・SX06 平・断面図	108
第29図	調査区東壁新断面図	40	第84図	包含層等出土遺物実測図	109
第30図	池内古田道路構造配置図	41～42	第85図	池内御所原跡調査区割図	112
第31図	SK02 平・断面図	43	第86図	I 区平面図	113
第32図	SD02 平・断面・出土遺物実測図	44	第87図	I 区北壁上層断面図	114
第33図	SD03・SD07・SD13・SD14 平・断面・出土遺物実測図	45～46	第88図	I 区西・南壁土層断面図	115
第34図	SD06・SD08 平・断面図	47	第89図	II 区平面図	116
第35図	SD09 平・断面・出土遺物実測図	49～50	第90図	II 区・北・東壁上層断面図	117
第36図	SD16 平・断面・出土遺物実測図	51	第91図	II 区西・南壁土層断面図	118
第37図	SD20 平・断面・出土遺物実測図	52	第92図	SD03・SD05 平面図	119
第38図	SD30 平・断面・出土遺物実測図	53	第93図	SD03・SD05 断面・出土遺物実測図	120
第39図	SD34 平・断面・出土遺物実測図	55	第94図	SD19 平・断面・出土遺物実測図	121
第40図	SX03 平・断面・出土遺物実測図	57	第95図	SD01・SD18 平・断面図	123
第41図	SB01・SD27 平・断面・出土遺物実測図	58	第96図	SD20 平・断面図	124
第42図	SB02 平・断面図	59	第97図	I 区動植物・断面・出土遺物実測図	125
第43図	SB03 平・断面図	60	第98図	SX01 平・断面・出土遺物実測図	126
第44図	SB04 平・断面・出土遺物実測図	61	第99図	SK01～SK06 平・断面図	127
第45図	SB05 平・断面図	62	第100図	SK07～SK11 平・断面図	128
第46図	SB06 平・断面図	63	第101図	SK12 平・断面図	129
第47図	SB07 平・断面・出土遺物実測図	64	第102図	包含層等出土遺物実測図	131
第48図	SB08 平・断面図	65	第103図	サヌカイトおよびサヌカイト様岩石の原産地	141
第49図	SB09 平・断面・出土遺物実測図	66	第104図	金山・五色台地域サヌカイト。	
第50図	柱穴出土遺物実測図	67		黒曜石様ガラス質安山岩の原産地	143
第51図	SK03・SK05・SK06・SK07 平・断面・出土遺物実測図	69	第105図	金山産地	144
第52図	SK08・SK10・SK12 平・断面図	71	第106図	駄土中の破屑物の鉱物。	
第53図	SE01 平・断面・出土遺物実測図1	73		岩石出現頻度と粒径組成(1)	178
第54図	SE01 出土遺物実測図2	74	第107図	駄土中の破屑物の鉱物。	
第55図	SE01 出土遺物実測図3	75		岩石出現頻度と粒径組成(2)	179
			第108図	破屑物・基質・孔隙の割合	179

第 109 図	造構変遷図 1 ······	187
第 110 図	造構変遷図 2 ······	188
第 111 図	造構変遷図 3 ······	189
第 112 図	造構変遷図 4 ······	190
第 113 図	造構変遷図 5 ······	191
第 114 図	古田 3 号塚周辺地形測量図 ······	193
第 115 図	古田 3 号塚造構平面図 ······	194
第 116 図	古田 3 号塚土層断面図 ······	195
第 117 図	古田 3 号塚平・断面図 ······	196
第 118 図	古田 3 号塚出土遺物実測図 ······	197
第 119 図	小田池・音谷池採集遺物実測図 ······	199
第 120 図	井原莊の莊地と開道遺跡 ······	201
第 121 図	香南台地周辺の地形分類と断面図 ······	203
第 122 図	香川・徳島県下の堀堤と 池内古田遺跡出土のベンガラ製造容器 ······	207
第 123 図	香川県内サヌカイト製火打石出土遺跡分布図 ······	211

表 目 次

表 1	周辺遺跡一覧 ······	9
表 2	予備調査成果一覧 1 ······	11
表 3	予備調査成果一覧 2 ······	12
表 4	樹種同定結果一覧 ······	132
表 5	池内古田遺跡出土木製品同定表 ······	136
表 6-1	安山岩石材資源地 ······	145 ~ 147
表 6-2	安山岩石材遺物群 ······	147 ~ 154
表 7	淡路島產出サヌカイト原石の分類結果 ······	155
表 8	和泉・岸和田產出サヌカイト原石の分類結果 ······	155
表 9	梅原產出サヌカイト原石の分類結果 ······	155
表 10-1	池内古田遺跡出土サヌカイト製品の 非破壊分析の元素比分析結果 ······	156
表 10-2	池内古田遺跡出土サヌカイト製品の 風化層除去後の元素比分析結果 ······	156
表 11	池内古田遺跡出土サヌカイト製品の 非破壊分析の元素比分析結果 ······	156
	風化層除去後の产地、遺物群推定結果 ······	157 ~ 163
表 12	供試材の履歴と調査項目 ······	169
表 13	供試材の化学組成 ······	169
表 14	胎土分析試料一覧 ······	175
表 15	胎土中破削物の計数結果（1） ······	176
表 16	胎土中破削物の計数結果（2） ······	177
表 17	胎土の基質・孔隙の記載 ······	177
表 18	小田池・音谷池採集遺物観察表 ······	199
表 19	分析結果一覧 ······	209
表 20	香川県内出土サヌカイト製火打石 ······	210
表 21	池内工区予備調査出土土器観察表 1 ······	213
表 22	池内工区予備調査出土土器観察表 2 ······	214
表 23	池内工区予備調査出土土器観察表 3 ······	214
表 24	池内工区予備調査出土土器観察表 4 ······	214
表 25	池内古田遺跡出土土器観察表 1 ······	215
表 26	池内古田遺跡出土土器観察表 2 ······	216
表 27	池内古田遺跡出土土器観察表 3 ······	217
表 28	池内古田遺跡出土土器観察表 4 ······	218
表 29	池内古田遺跡出土土器観察表 5 ······	219
表 30	池内古田遺跡出土土器観察表 6 ······	220
表 31	池内古田遺跡出土土器・石製品観察表 ······	221
表 32	池内古田遺跡出土金属器観察表 ······	221
表 33	池内古田遺跡出土木製品観察表 ······	221
表 34	池内古田遺跡出土軒丸瓦観察表 ······	222
表 35	池内古田遺跡出土平瓦観察表 ······	222
表 36	池内御所原遺跡出土土器観察表 ······	222
表 37	池内御所原遺跡出土石器・石製品観察表 ······	222
表 38	池内御所原遺跡出土鉄錠観察表 ······	222
表 39	古田 3 号塚出土土器観察表 ······	223
表 40	古田 3 号塚出土石器観察表 ······	221
表 41	古田 3 号塚出土金属器観察表 ······	221

写 真 目 次

図版 1	樹種同定顕微鏡写真 ······	134	
図版 2	樹種同定顕微鏡写真 ······	137	
図版 3	楕形鍛治溝の顕微鏡組織・EPMA 調査 ······	170	
図版 4	土製容器の顕微鏡組織・EPMA 調査 ······	171	
図版 5	楕形鍛治溝の顕微鏡組織・EPMA 調査 ······	172	
図版 6	楕形鍛治溝の顕微鏡組織・EPMA 調査 ······	173	
図版 7	楕形鍛治溝の顕微鏡組織・EPMA 調査 ······	174	
図版 8	土器片断面 ······	182	
図版 9	胎土薄片（1） ······	183	
図版 10	胎土薄片（2） ······	184	
図版 11	胎土薄片（3） ······	185	
図版 12	ベンガラ製造容器 ······	225	
図版 13	航空写真（池内古田遺跡・池内御所原遺跡） ······	226	
図版 14	香南工区予備調査造構写真 1 ······	227	
1-1	トレンチ全景（北より）	2-1	トレンチ西壁土層（東より）
1-1	トレンチ東壁土層（西より）	3	トレンチ全景（西より）
1-2	トレンチ全景（西より）	3	トレンチ南壁土層（北より）
1-2	トレンチ南壁土層（北より）	4	トレンチ南壁土層（東より）
2-1	トレンチ全景（北より）	4-1	トレンチ全景（南より）
		4-1	トレンチ東壁土層（西より）
		4-2	トレンチ全景（東より）
		4-2	トレンチ SD01（北東より）
		5-1	トレンチ全景（南より）
		5-1	トレンチ北壁土層（南より）
		5-2	トレンチ全景（南より）
		5-2	トレンチ東壁土層（西より）
		5-3	トレンチ全景（西より）
		5-3	トレンチ北壁土層（南より）
		6	トレンチ全景（北より）
		6	トレンチ SD03 検出状況（西より）
		7-1	トレンチ全景（北より）
		7-1	トレンチ東壁土層（西より）

7-2 レンチ全景（東より）	1区第2遺構面全景（北より）
7-2 レンチ SD04 検出状況（南より）	1区第2遺構面全景（東より）
国版 17 香南工区予備調査遺構写真 4 230	国版 25 池内古田遺跡遺構写真 3 238
12-1 レンチ全景（東より）	1区東壁土層（北西より）
12-1 レンチ西壁土層（東より）	1区西壁土層（北東より）
12-2 レンチ全景（北より）	2区北壁土層（南より）
12-2 レンチ SP91 検出状況（東より）	1区 SD03 遺物出土状況（南より）
13 レンチ全景（北より）	1区 SD03 遺物（10）出土状況（南より）
13 レンチ SD83 検出状況（南東より）	1区 SD03 遺物出土状況（南より）
14-1 レンチ全景（北より）	1区 SD03 遺物（4）出土状況（東より）
14-1 レンチ SP98 検出状況（西より）	2区 SD09 遺物出土状況細部（西より）
国版 18 香南工区予備調査遺構写真 5 231	国版 26 池内古田遺跡遺構写真 4 239
14-2 レンチ全景（東より）	2区 SD09 遺物出土状況（北より）
14-2 レンチ北壁土層（南より）	2区 SD09 遺物出土状況（南より）
15-1 レンチ全景（北より）	1区 SD02・SX01・SD03 土層（北より）
15-1 レンチ SD105 検出状況（南より）	1区 SD04 土層（南より）
15-2 レンチ全景（東より）	2区 SD02 土層（北より）
15-2 レンチ SP106 検出状況（西より）	2区 SD03 土層（北より）
17-1 レンチ全景（南より）	2区 SD08・SD12 土層（北より）
17-2 レンチ南壁土層（北より）	2区 SD10・SD11 土層（東より）
国版 19 香南工区予備調査遺構写真 6 232	国版 27 池内古田遺跡遺構写真 5 240
18-1 レンチ全景（南より）	3区全景（北より）
18-3 レンチ北壁土層（南より）	3区全景（南より）
19 レンチ全景（西より）	池内古田遺跡遺構写真 6 241
19 レンチ北壁土層（南より）	3区南壁土層（北西より）
22 レンチ全景（北より）	3区東壁土層（南西より）
22 レンチ SD119 検出状況（西より）	3区 SP3028 桧石出土状況（南より）
23-1 レンチ全景（南より）	3区 SP3042 桧石出土状況（東より）
23-1 レンチ西壁土層（東より）	3区 SP3014 桧材出土状況（西より）
国版 20 香南工区予備調査遺構写真 7 233	3区 SP3022 遺物出土状況（西より）
24-1 レンチ全景（西より）	3区 SE01 上位遺物出土状況（南より）
24-1 レンチ SD132 検出状況（北より）	3区 SE01 上位土層（南より）
24-3 レンチ全景（南より）	国版 28 池内古田遺跡遺構写真 7 242
24-3 レンチ遺構検出状況（南より）	3区 SE01 上位掘り下げ状況（西より）
25 レンチ全景（南より）	3区 SE01 下位深掘り土層（東より）
25 レンチ東壁土層（西より）	3区 SD03 遺物（5）出土状況（西より）
27-1 レンチ全景（南より）	3区 SD03 遺物出土状況（南より）
27-1 レンチ西壁土層（東より）	3区 SD03 遺物出土状況（西より）
国版 21 香南工区予備調査遺構写真 8 234	3区 SD03 遺物（9）出土状況（北より）
28-1 レンチ全景（北より）	3区 SD03・SD07・SD15 土層（北より）
28-1 レンチ SD122 検出状況（南より）	3区 SD03 土層（東より）
28-1 レンチ SP124 検出状況（北より）	国版 29 池内古田遺跡遺構写真 8 243
28-1 レンチ東壁土層（西より）	3区 SD09 遺物（32）出土状況（北より）
29-2 レンチ全景（東より）	3区 SD09・SD16・SD17 土層（北西より）
29-3 レンチ東壁土層（西より）	3区 SD09・SD16・SD17 土層（北西より）
30-1 レンチ全景（北より）	3区 SD16 土層（北西より）
30-1 レンチ SK127 検出状況（南より）	3区 SD20 土層（北より）
国版 22 香南工区予備調査遺構写真 9 235	3区 SD21 土層（西より）
30-1 レンチ SX128 検出状況（南より）	3区 SD22 土層（北より）
30-2 レンチ南壁土層（北より）	3区 SD24 土層（東より）
31 レンチ全景（西より）	国版 30 池内古田遺跡遺構写真 9 244
31 レンチ南壁土層（北より）	4区全景（南より）
34-1 レンチ全景（東より）	4区全景（西より）
34-1 レンチ南壁土層（北より）	国版 31 池内古田遺跡遺構写真 10 245
35-1 レンチ全景（北より）	4区北壁土層（南東より）
35-1 レンチ東壁土層（西より）	4区東壁土層（南西より）
国版 23 池内古田遺跡遺構写真 1 236	4区西壁土層（北東より）
1・2区第1遺構面全景（南より）	4区 SK10 全景（北より）
1・2区第1遺構面全景（北より）	4区 SP4128 遺物出土状況（東より）
国版 24 池内古田遺跡遺構写真 2 237	4区 SP4012 桧石出土状況（北より）

4区SP4147	根石出土状況（北より）	5区SD46	土層（南東より）
4区SP4031	結石出土状況（北より）	5区SD47	土層（東より）
国版 33	池内古田道路遺構写真 11-----	5区SD48	土層（東より）
	246	5区SD47・SD48・SD50	全景（東より）
	4区SK02 土層（東より）	5区SD50	土層（西より）
	4区SK04 土層（北より）	5区SD50	全景（東より）
	4区SK05 土層（東より）	5区SD49	土層（東より）
	4区SK06 土層（南より）	5区SD49	全景（東より）
	4区SK07 全景（北より）	5区SX07	全景（北より）
	4区SK07 土層（東より）	5区SX07	風景
	4区SK07・SD31 土層（北より）	5区SX05	土層（東より）
	4区SK08 全景（南より）	5区SX07	土層（南より）
国版 34	池内古田遺跡遺構写真 12-----	5区SX07	全景（北より）
	247	5区SX07	遠跡より北方向遠景
	4区SK08 土層（東より）	5区SX07	遠跡より東方向遠景
	4区SK08 土層（南より）	5区SX07	遠跡より南方向遠景
	4区SK09 土層（西より）	5区SX07	遠跡より西方向遠景
	4区SK10 全景（北より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	4区SK11 土層（南より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	4区SK12 土層（東より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	4区SD28・SX03 土層（南より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	4区SD29 土層（南より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
国版 35	池内古田道路遺構写真 13-----	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	248	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	4区SD30・SD31 土層（北より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	4区SD34 遺物出土状況（東より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	4区SD34 土層（南より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	4区SD36 土層（東より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	4区SD36・SD40 土層（北より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	4区SD37 土層（東より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	4区SD38 土層（東より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	4区SD40 土層（北より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
国版 36	池内古田遺跡遺構写真 14-----	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	249	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	5区全景（北より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	5区全景（南より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
国版 37	池内古田道路遺構写真 15-----	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	250	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	5区南壁土層（北西より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	5区西壁土層（南東より）	5区SX07	遠跡より南北向遠景
	5区東壁土層（北西より）	5区SX07	遠跡より東西向遠景
	5区SF5007 根石出土状況（南より）	5区SK01	土層（北より）
	5区SP5030 結石出土状況（南より）	1区SK01	SK02・SD01 全景（南西より）
	5区SF5031 根石出土状況（南より）	1区SK02	土層（南より）
	5区SP5035 根石出土状況（北より）	1区SK03	土層（南より）
	5区SP5052 根石出土状況（東より）	1区SK03	全景（西より）
国版 38	池内古田道路遺構写真 16-----	5区SK03	所原道路遺構写真 3-----
	251	5区SK04	土層（南西より）
	5区SP5062 遺物出土状況（北より）	1区SK05	土層（南東より）
	5区SP5068 根石出土状況（南より）	1区SK05	全景（北東より）
	5区SP5075 結石出土状況（北より）	1区SK06	土層（南東より）
	5区SP5079 土層（北西より）	1区SK07	土層（南より）
	5区SP5114 根石出土状況（南より）	1区SK08	土層（南東より）
	5区SP5124 土層（南西より）	1区SK09	土層（南東より）
	5区SP5129 土層（北より）	1区SK09	全景（南東より）
	5区SP5164 土層（北より）	5区SK10	土層（東より）
国版 39	池内古田道路遺構写真 17-----	5区SK11	土層（南西より）
	252	5区SD01	土層（北西より）
	5区SP5167 結石出土状況（北より）	1区SD01	土層（南東より）
	5区SP5201 桂材・結石出土状況（南より）	1区SD01	全景（南東より）
	5区SP5205 遺物出土状況（南より）	1区SD02	土層（南西より）
	5区SD34 土層（南より）	1区SD03	土層（南より）
	5区SD43 土層（南より）	1区SD03	（左）・SD05（右）土層（南西より）
	5区SD44・SD45 土層（南より）	1区SD03	全景（北より）
	5区SD44 土層（東より）	1区SD04	土層（東より）
	5区SD44・SD45 全景（東より）	1区SD05	土層（南西より）
国版 40	池内古田道路遺構写真 18-----	1区SD05	全景（南西より）
	253	1区SD05	全景（南西より）

1区 SD05 全景	(北東より)
1区 SX01 土層	(北西より)
図版 53 池内御所原道路遺構写真 6 266
2区全景	(北より)
2区全景	(南より)
図版 54 池内御所原道路遺構写真 7 267
2区北壁土層	(南東より)
2区東壁土層	(南西より)
2区西壁土層	(南東より)
2区南壁土層	(北東より)
2区SP204 土層	(西より)
2区SP205 土層	(南東より)
2区SK12 土層	(西より)
2区SK12 全景	(東より)
図版 55 池内御所原道路遺構写真 8 268
2区SD19 土層	(北より)
2区SD19 土層	(南より)
2区SD19 遺物 (5)	出土状況 (西より)
2区SD19 遺物 (6)	出土状況 (西より)
2区SD19 全景	(北より)
2区SD20 土層	(南より)
2区SD20 全景	(北より)
2区調査風景	
図版 56 池内御所原道路遺物写真 269
図版 57 古田3号塚遺物写真 270
図版 58 井原莊周辺現況 271
香南台地段丘崖と延縁神社参道石段	(南東より)
冠縁神社周辺より井原莊北部遠景	(南西より)
香南台地遠景	(北より)

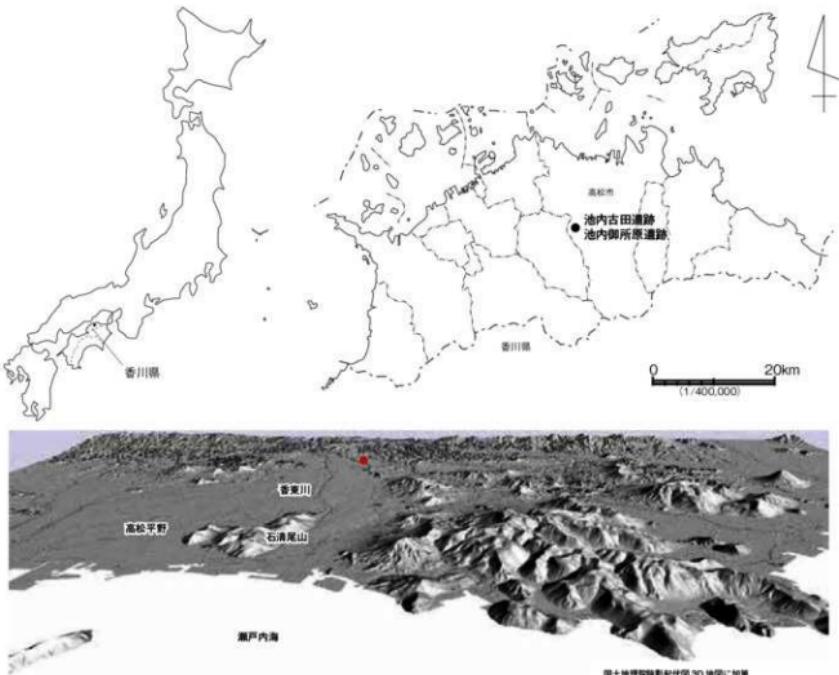
第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯

香川県では、交通渋滞の緩和や交通事故、頻発する自然災害による交通規制、物流の増加による公共交通拠点へのアクセス性の向上等、諸課題に対応するため、平成15年7月に「県土軸ネットワーク計画」を作成し、平成22年12月にその改訂を行った。

そのうちの幹線道路の整備については、地域高規格道路高松環状道路のうち、高松市寿町から檀紙町までの区間は、令和2年度から「計画段階評価を進めるための調査」箇所に指定された。これにより、JR高松駅や高松港のあるサンポート高松エリアと高松西ICが直結することとなり、さらに地域高規格道路高松空港連絡道路（県道円座香南線）を経由して、高松空港が結ばれ、複数の公共交通拠点へのアクセス性が向上し、高松市中心部の交通渋滞の緩和にも一定の効果が期待されている（香川県土木部道路課『香川県新広域道路交通ビジョン』）。

さて、県道円座香南線の用地内の埋蔵文化財の保護については、高松土木事務所と県教育委員会文化



第1図 遺跡位置図1

行政課(現、生涯学習・文化財課)との間で協議が進められてきた。工事は路線の概ね北側の中間工区(延長約3km)から進められ、川岡地区については、平成13年度に予備調査と本発掘調査が実施され、中間地区と円座地区については、平成14年度の予備調査を経て、平成14年度下半期から平成18年度において本発掘調査が実施された。なお、平成13～15年度の調査は県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当として実施し、平成16年度以降は、組織改編に伴い、県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当として実施している。中間工区については、既に調査を終了し、報告書も刊行されている。

南側の香南工区(延長約6km)については、平成28年度より県教育委員会が用地取得を終えた地点より試掘調査を実施し、調査結果を受けて香川県埋蔵文化財センターでは、平成28年度末から平成29年度上半期にかけて、横井南原遺跡の本発掘調査を実施した。その後、平成30年度に残る池内地区の延長約1.2kmの工事計画が決定し、令和元年度に香川県埋蔵文化財センターが上半期より予備調査を実施し、計4,687m²の本発掘調査が必要な範囲が確定した。令和2年度には上道池東遺跡の本発掘調査を実施し、同年度中に香南工区の調査を終了している。今回刊行する報告は、平成30年度に本発掘調査を実施した池内地区における発掘調査成果である。

第2節 調査・整理作業の経過

令和元年度の予備調査終了後の10月1日より、池内古田遺跡の本発掘調査を実施した。継続して、令和2年2月1日より池内御所原遺跡の本発掘調査を実施し、年度内に両遺跡の調査を終了した。

発掘調査は直営方式で、調査準備の整った10月11日より開始した。11月30日には、県内の小中学生を対象とした発掘体験学習を実施した。また、池内古田遺跡の調査終盤の1月25日には現地説明会を実施し、40名の参加があった。

整理作業は、令和3年12月1日から翌令和4年3月31日に埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と、遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、池内古田遺跡が28%入りコンテナ16箱、池内御所原遺跡が1箱である。遺構については、両遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告することとし、現場において作成した図面等については、ほぼ全てを掲載した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映すると考えられるものを最優先し、混入遺物や遺構外出土遺物については、特に必要と認めるもののみ掲載した。

文献

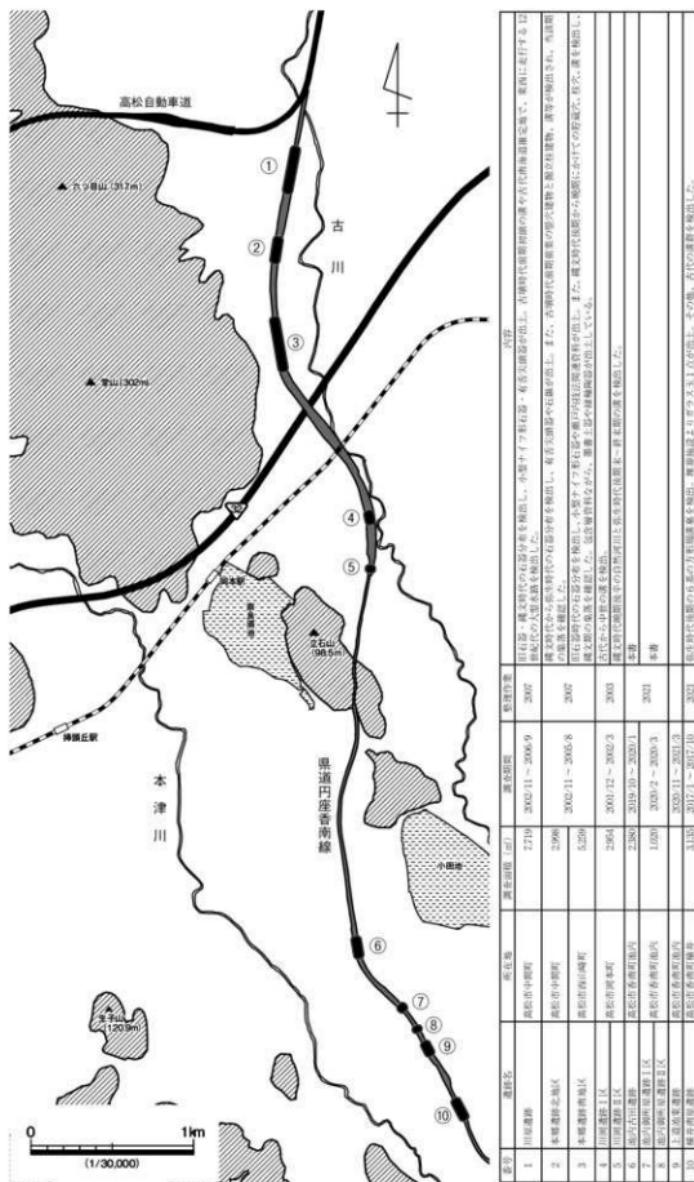
香川県教育委員会 2018a 「埋蔵文化財試掘調査報告書XⅩ 平成27、28年度 香川県内遺跡発掘調査」

香川県教育委員会 2018b 「埋蔵文化財試掘調査報告書30 平成29年度 香川県内遺跡発掘調査」

香川県埋蔵文化財センター 2018a 「香川県埋蔵文化財センター年報 平成28年度」

香川県埋蔵文化財センター 2018b 「香川県埋蔵文化財センター年報 平成29年度」

香川県埋蔵文化財センター 2021 「香川県埋蔵文化財センター年報 令和元年度」



第2図 路線図と調査跡

第2章 立地と環境

第1節 地理・歴史的環境

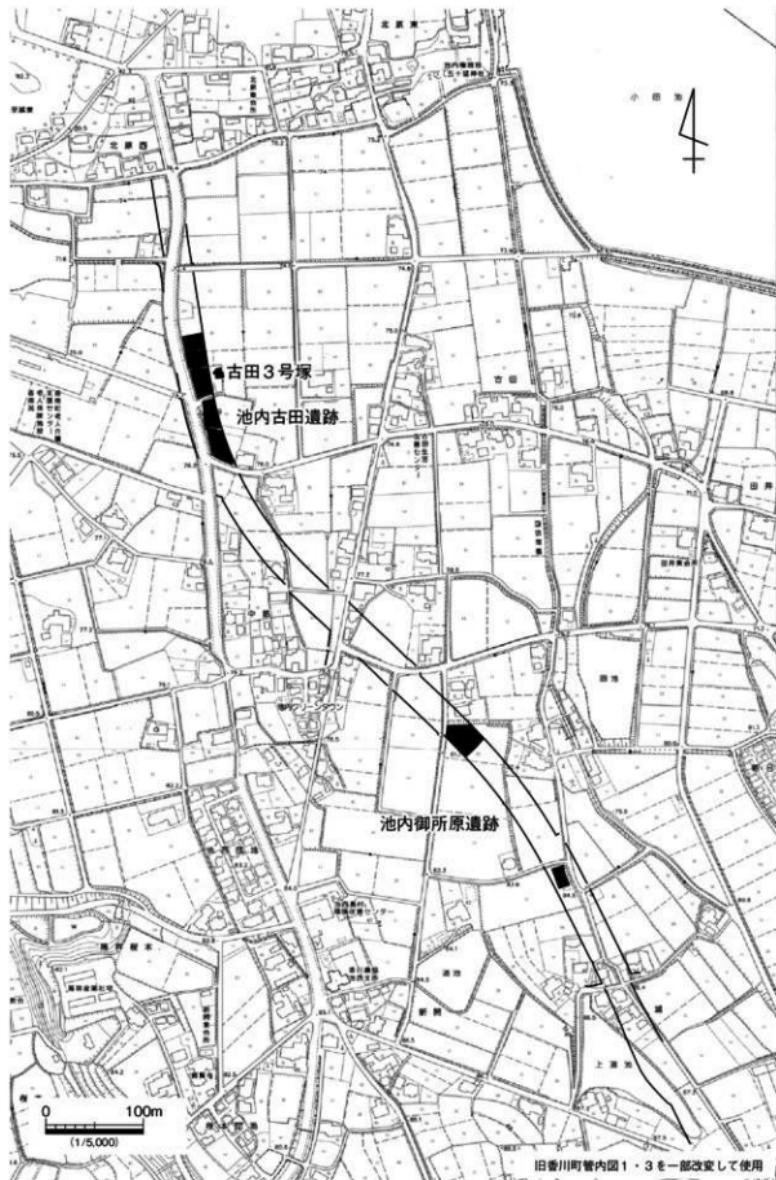
池内古田遺跡は、高松市香南町池内 692 番地 1 他に、池内御所原遺跡は同 425 番地他にそれぞれ所在する。両遺跡は直線距離で約 380 m 離れている。調査前の地目は、池内古田遺跡 1 ~ 4 区は田、5 区は雑種地として、池内御所原遺跡 I 区は田、II 区は宅地としてそれぞれ使用されていた。現地表面の標高は、池内古田遺跡で 73.2 ~ 75.2 m、池内御所原遺跡 I 区で 82 m、同 II 区で 83.9 m であった。

遺跡は、後述するように大局的には東を低位段丘面、西を本津川の開析谷に挟まれた、北西方向に帶状に延びる中位段丘面上に位置する。また、北方から北西には堂山（標高 302 m）や立石山（標高 98.5 m）といった山丘が屹立し、南には後述するように讃岐山脈が東西走り、遺跡からの眺望は東西方向が優位となる。

上述したように、讃岐平野の南縁は、標高 600 ~ 1,000 m の定高性の良い讃岐山脈が東西走り、徳島県との県境をなす。讃岐山脈は、中生代白亜紀後期に主に海底に堆積した礫岩や砂岩、泥岩等の和泉層群により構成される。そのうち砂岩は、水源を本層群中に有する香東川等の河床の転石を採取して、繩文時代以降に砥石等として多く利用されている。

讃岐山脈北側の前山部分は、讃岐平野の基盤を構成する中生代後期白亜紀カンパニアン紀～マーストリヒチアン紀のいわゆる領家花崗岩類の丘陵性の山地となっており、標高 600 m を最高に北へ緩やかに落ちていき、瀬戸内海沿岸部では 100 m 前後で海に接する。領家花崗岩類のうち良質のものは、中世末期以降城郭の石垣材として頻繁に切り出され、また、近世以降には、城郭石垣材以外に墓標や神社の鳥居、建築資材等として利用された。なお、台地部や扇状地面には、浸食を免れた花崗岩層が独立丘陵や山塊として分布（例えば堂山や石清尾山、屋島等）し、しばしばその上位には、中新世中期の約 1,600 万年前から 1,000 万年前の間に生じた火山活動により堆積した、讃岐岩をはじめとする瀬戸内火山岩類に属する各種溶岩及び火山碎屑岩が分布する。これらのうち、高松市から坂出市に所在する五色台や金山に分布するサヌカイトは、旧石器時代以降各種石器の素材として活用され、中世以降には火打石としても利用された（蔵本 2019）。また、火山碎屑岩の一部の凝灰岩類は、高松市鷺ノ山やさぬき市火山産のものが古墳時代の剣拔式石棺に利用され、火山産等の石材は古代には寺院の基壇石材として畿内地域にも搬出されていることが確認されており、中世以降には高松市五色台や善通寺市等の天霧山等に産出する角螺旋凝灰岩が五輪塔を中心とした墓標や石臼、近世以降にはさらに各種建築資材等として頻繁に採掘活用された。以上のように、県下で産出する様々な石材は、その時代の要請により、様々なに活用され、現在に続いている。

さて、両遺跡が所在する香南町池内地区は、地形分類図（国土地理院ウェブサイト（数値地図 25000（土地条件））や地質図（国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センターウェブサイト（地質図 Navi (gsj.jp)）では、いわゆる更新世段丘のうち、香南台地を称される中位段丘面（標高 75 ~ 120 m 前後）に分類される。その表層には、新生代第四紀後期更新世前期の砂礫層や黄色粘土層が堆積する。その南の標高 120 ~ 220 m 前後は、前山丘陵を構成する千疋丘陵が分布し、一部は淘汰の悪い粒径 5 ~ 30cm の砂岩の亜円～円礫からなる、新生代第四紀更新世ジェラシアン期～前期チバニアン期に形成された焼尾岬礫層によって上面が覆われる。また池内・横井地区周辺の中位段丘面東方の香南町吉光や由佐



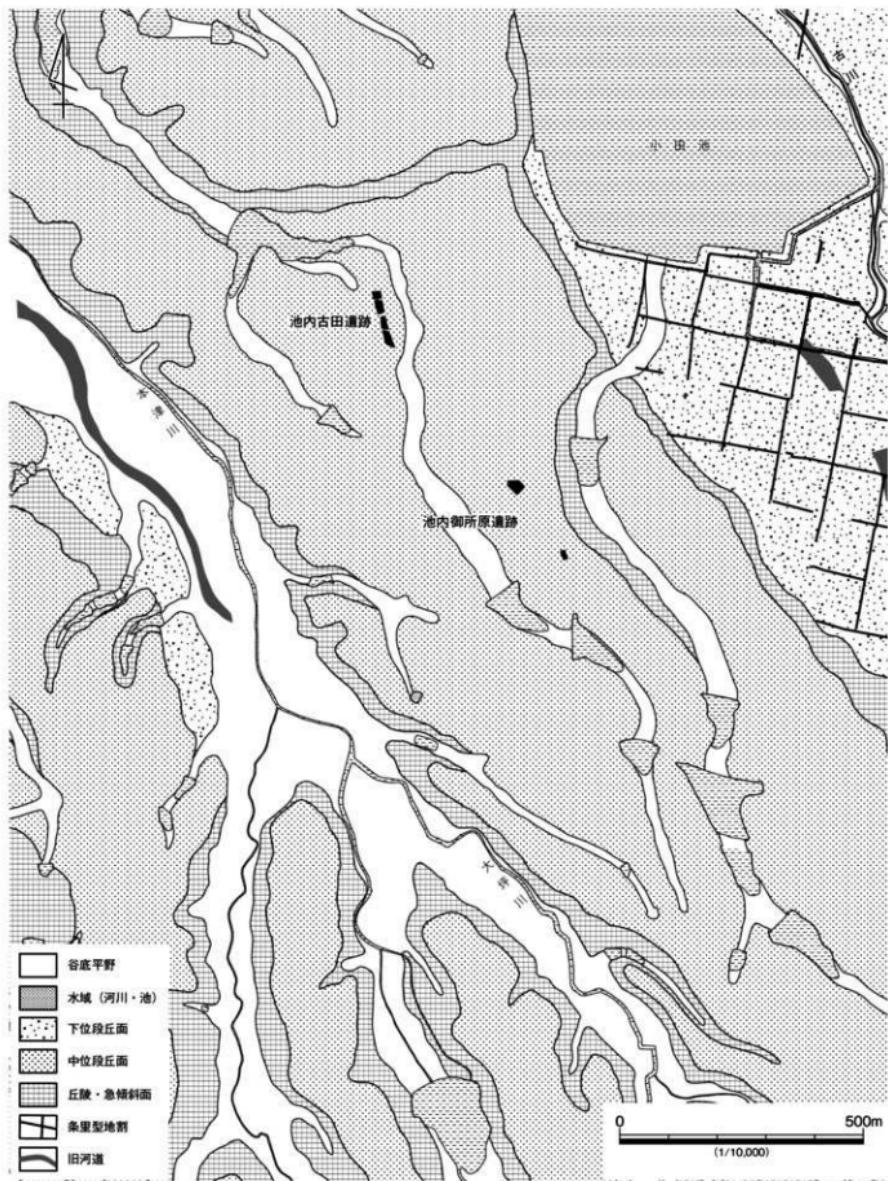
第3図 遺跡位置図2

周辺には、新生代第四紀後期更新世中期～後期更新世後期の下位段丘面（標高67～75m前後）が広がる。上述した中位段丘面とは、比高10～15mの崖面によって接する。これら段丘面は、概ね北西方向へ下る緩やかな緩斜面状を呈する。また、中位段丘面を中心に、本津川や本津川の支流の大坪川等の中小の河川による浸食により、狹小な開析谷が樹枝状に段丘面を刻み、そうした地形を利用して谷部の各所には灌漑用の谷池が数多く築造され、沖積平野や低位段丘面に築池された皿池とともに、年間を通じて降雨量の乏しい本県独特の景観を生み出している。

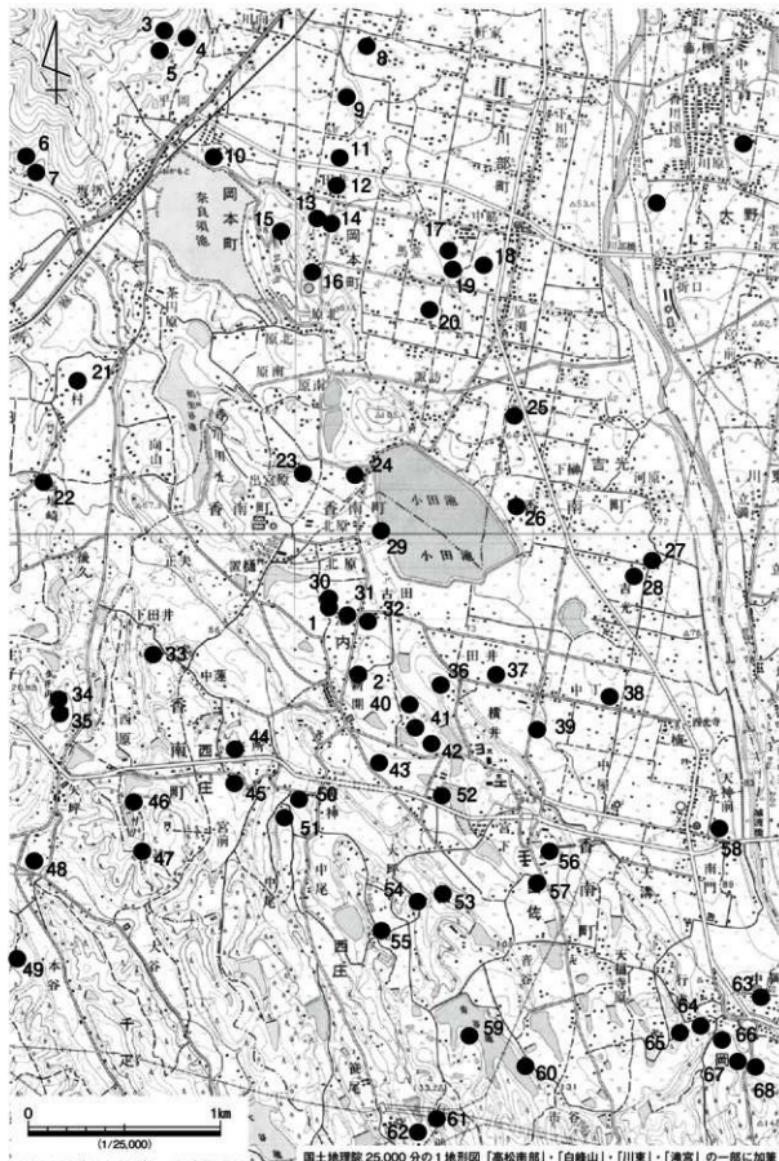
本地域周辺、高松平野南端に位置する更新世段丘面上の考古学上の発掘調査例は乏しい。今回の調査は、本地域の中位段丘面上における開発行為の変遷を考察する上で、貴重な資料となるものと思われる。

下位段丘面では、本郷遺跡や川原遺跡（森下・藏本2008）で、小型ナイフ形石器を含む旧石器時代から有尖頭器等の縄文時代草創期の石器ブロックを検出したものが、最も古い時期の資料である。そのほか、本郷遺跡で縄文時代後期～晩期の貯蔵穴や柱穴、溝等を検出し、川岡遺跡（山元2004）では、古川の旧河道域より縄文時代晩期中～後葉の資料が出土している。本郷遺跡では、香川県下では数少ない縄文時代の集落の一端が明らかとなつたほか、川岡遺跡では、直接集落に関する遺構は検出されていないが、遺物の出土量から、近接地に当該時期の集落が所在する可能性が高いと考えられる。同じ川岡遺跡では、弥生時代後期後半期の溝も検出されている。また、古墳時代には、若宮神社古墳と佐賀神社古墳が築造される。若宮神社古墳は現状で径10～12m、高さ約1.5mの円墳で、墳丘高より竪穴系の埋葬施設の可能性が考えられる。出土遺物は知られていないが、形状から中期～後期前葉の古墳と考えられる。佐賀神社古墳は、横穴式石室を埋葬施設とする。そのほか、横井の塚や中下の塚等、実態不明の塚の一部は古墳である可能性も考えられる。当該期の集落遺跡は、現状で検出されていない。また、下位段丘面には、東へ11.5°前後偏した約109m四方の方格地割が広範に分布する。いわゆる条里型地割だが、川岡遺跡では流路方向が地割の方向と合致する溝が検出され、8～9世紀代の遺物が出土している。遺物量が乏しいため断定は困難だが、その施行時期については、場所により古代に遡る可能性も否定はできないだろう。なお、後述する中位段丘面には、圃場整備前の空中写真等を参照しても、下位段丘面より連続する条里型地割の痕跡は認められない。おそらくは両段丘面間での開発時期の相違、中位段丘面の面的な耕地化が下位段丘面より遅れて実施された可能性を示唆するものと考えられる。中世には川岡遺跡で12世紀後半を中心とした時期の溝や柱穴が各1基検出されている。近接して屋敷地が所在するものと思われる。また、円座、中田井、吉光、横井、由佐、岡館跡の中世城館跡が分布する（香川県教育委員会2003）。いずれも香東川の流路に沿って南北に列状に築城されており、香東川の舟運や讃岐山脈をまたいだ阿波への交通路との関係が想像される。

中位段丘面では、横井南原遺跡（香川県埋蔵文化財センター2018a）で、弥生時代後期の方形周溝墓6基と溝が検出されている。本地域では、当該期に平野部で円形周溝墓が、丘陵部で方形墳丘墓が主に築造される傾向にある。横井南原遺跡墓は、丘陵上の墳墓の系統に属するものと考えられる。また、池内古田遺跡でも遺構は確認されていないが、弥生時代に位置付けられる土器や石器が出土しており、そのほか、小田池西遺跡や冠岬神社遺跡でも、詳細は不明ながら弥生時代の遺物の出土が知られており、当該期には各所で集落や墳墓が営まれていたと考えられる。古墳時代の遺跡は、下田井古墳や赤松古墳等があり、そのほか城1・2号塚等の塚も古墳である可能性が考えられるが、やや古墳の築造は本地形面では低調である。当該期の集落遺跡も実態は不明である。その傾向は、古代にも継続し、横井南原遺跡で溝が検出されているのみである。池内古田遺跡や池内御所原遺跡では、当該期の須恵器片等は出土



第4図 遺跡周辺地形分類図



第5図 周辺遺跡分布図

表1 周辺遺跡一覧

番号	種別	遺跡名	時代	調査	調査主体	内容	文献
1	集落跡	池内古田遺跡	中・近世	令和元年度発掘調査	香川県教育委員会	瀧汲水路・掘立柱建物・土坑	本書掲載
2	生痕跡	池内山古原遺跡	中・近世	令和元年度発掘調査	香川県教育委員会	瀧汲水路・土坑	本書掲載
3	古墳	本龜寺北2号墳	古墳			円墳	
4	古墳	本龜寺北1号墳	古墳			円墳・横穴式石室、土製物	
5	古墳	本龜寺古墳	古墳			横穴式石室	
6	古墳	石ヶ墓3号墳	古墳			横穴式石室	
7	古墳	石ヶ墓2号墳	古墳			横穴式石室	
8	塙						
9	生痕跡	川岡遺跡Ⅱ区	縄文・弥生	平成13年度発掘調査	香川県教育委員会	自然河川・土坑	山元 2004
10	古墳	余良田古墳	古墳				
11	生痕跡	川岡遺跡1区	中世	平成13年度発掘調査	香川県教育委員会	瀧汲水路	山元 2004
12	冠含地	岡本田古道跡					
13	冠含地	金尾瀬古道跡	弥生・古墳				
14	冠含地	立石遺跡					
15	古墳	立石神社古墳	古墳			古墳	
16	強含地	岡本木津北古道跡					
17	塙						
18	佐久間荒神塚						
19	城館	中田井城跡	中世				香川県教育委員会 2003
20	塙						
21	本村塚						
22	馬場塚跡						
23	墳墓	上新開塚	古代	平成9年度発掘調査	香川県教育委員会	火葬墓	香川県教育委員会 1999
24	長曾我塚						
25	古墳	若宮神社古墳	古墳			円墳	
26	中下の塚						
27	古墳	佐賀神社古墳	古墳			横穴式石室	
28	城館	青光城跡	中世				香川県教育委員会 2003
29	冠含地	小田曲内道跡	旧石器・弥生				
30	集落跡	古田1号塚	中世	昭和60年度発掘調査	旧香南町教育委員会	不明遺構	本書掲載
31	古墳	古田2号塚		昭和59年度発掘調査	旧香南町教育委員会	小田・渡邊・西澤・中村 2008	
32	古墳	古田1号塚		昭和60年度発掘調査	旧香南町教育委員会	小田・渡邊・西澤・中村 2008	
33	古墳	下田井古墳	古墳			古墳	
34	古墳	牛子山2号墳	古墳			古墳	
35	古墳	牛子山1号墳	古墳			古墳	
36	尾崎塚						
37	「三三三の塚」						
38	横井の塚						
39	城館	横井城跡	中世				香川県教育委員会 2003
40	城1号塚						
41	生痕跡	上池古道跡	古代・近世	令和2年度発掘調査	香川県教育委員会		
42	城2号塚						
43	城館	池内城跡	中世				香川県教育委員会 2003
44	城館	西庄城跡	中世				香川県教育委員会 2003
45	古墳	赤松古墳	古墳				
46	生痕跡	新池窪跡	古代			頃忠影響	
47	経塙	西庄山経塙	中世				
48	西坪馬塚						
49	経の山古石塔						
50	墳墓	大神園1号塚	中世	平成3年度発掘調査	旧香南町教育委員会	小田・渡邊・西澤・中村 2008	
51	墳墓	大神園2号塚	中世	平成2年度発掘調査	香川県教育委員会		
52	墳墓	横井南古道跡	弥生・古墳	平成29・30年度発掘調査	香川県教育委員会	方形周溝墓・演	
53	生痕跡	茶園窪跡	古代	平成3年度試掘調査	香川県教育委員会	頃忠影響	
54	生痕跡	大坪窪跡	古代			頃忠影響	
55	古墳	大坪古墳	古墳			古墳	
56	冠含地	冠原1号道路	弥生				
57	冠愛神社の塚						
58	城館	山佐城跡	中世	平成各年度発掘調査	旧香南町教育委員会		香川県教育委員会 2003
59	冠含地	音谷池西岸遺跡		平成4・5年度試掘調査	香川県教育委員会		
60	生痕跡	音谷池東岸遺跡	古代			頃忠影響	
61	生痕跡	池谷窪跡	古代	昭和60年度確認調査	旧香南町教育委員会	頃忠影響	小田・渡邊・西澤・中村 2008
62	墳墓	池谷1号塚	中世	昭和61年度発掘調査	旧香南町教育委員会	小田・渡邊・西澤・中村 2008	
63	城館	岡前城跡	中世				香川県教育委員会 2003
64	高野神社西の塚						
65	石塔	七人塚の五輪塔	中世				
66	古墳	高野神社古墳	古墳			古墳	
67	冠含地	奥谷遺跡					
68	寺跡	奥谷の寺跡					

しているものの、明確な構造に恵まれていない。近世以降の地下げや近年の圃場整備等の広域的な開発行為により、削奪された可能性も考えられる。なお、上新聞塚（香川県教育委員会 1999）では、古代の火葬墓が検出されている。律令期香川郡の郡領層の墳墓と考えられる。中位段丘面奥部の開析谷斜面部には、須恵器窯跡が点在する。分布調査により、須恵器窯は現在5箇所（新池・大坪・茶園・音谷池東岸・池谷）で確認されている（松本・岩橋 1985、小川・渡邊・西澤・中村 2008）。これらは香南窯跡群と呼称され、出土した須恵器片より概ね7世紀後葉～8世紀代の継起的な操業が想定されている。また、上道池東遺跡では、包含層中より「他個体が融着した個体」や、「焼成不良品の存在が目立つ」状況が確認され、調査地点の地形をも考慮して、遺跡周辺での須恵器窯の存在が想定されている（香川県埋蔵文化財センター 2022）。中世では、池内古田遺跡や池内御所原遺跡で14～15世紀の灌漑水路が確認されているほか、西庄城跡がある。

中位段丘面では、弥生時代に集落や墳墓地として利用がなされたのを嚆矢として、古代には段丘面や丘陵部の豊富な林産資源と、開析谷の谷底平野に堆積した良質の水成粘土を背景に、段丘斜面部を利用して須恵器窯が築かれ、近接する段丘面上には工人の作業場や生活空間となった集落が営まれていたことが想像される。また、墳墓地としての利用は古代にも継続していた。古代までは、こうした「点」としての開発に終始し、段丘面上の耕地化といった「面」としての開発は、なお遅れていた可能性が高いと考えられる。

丘陵部では、標高100m以下の丘陵斜面部や低丘陵の山頂部に、数多くの古墳が築造されている。このうち堂山南東麓の本庵寺北1号墳では、円筒形土製棺が出土（大久保 1996）しており、前期後葉を中心とした時期に位置付けられる。そのほか、堂山南西麓の石ケ鼻古墳群（大久保・中島 2009）は横穴式石室を埋葬施設とする後期の円墳で、奈良須池古墳や立石神社古墳、生子山1・2号墳も当該期の古墳である可能性が高いと考える。

引用・参考文献

- 大久保徹也 1996 「土製棺」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡I』、香川県教育委員会
大久保徹也・中島美佳 2009 「石ケ鼻古墳・御殿天神社古墳」、高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科
小川賢・渡邊誠・西澤昌平・中村茂平 2008 「横岡山古墳・城所山古墳群」、高松市教育委員会
香川県 1974 「阿波山地開発地域土地分類基本調査 高松南部」
香川県教育委員会 1999 「上新聞塚」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度』
香川県教育委員会 2003 「香川県中世城館跡詳細分布調査報告」
香川県埋蔵文化財センター 2018 「横井南原遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成29年度』
香川県埋蔵文化財センター 2022 「上道池東遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報 令和2年度』
萩本哲司 2019 「香川県周辺地域における火花式発火法の導入と展開」『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 上林遺跡』、香川県教育委員会
松本敏三・岩橋孝 1985 「香川県古代窯業道路分布調査報告II (旧多度郡・旧那珂郡以東)」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第2号、瀬戸内海歴史民俗資料館
森下英治・萩本哲司 2008 「県道内堀香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 本郷遺跡・川原遺跡」、香川県教育委員会
山元泰子 2004 「県道内堀香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 川岡遺跡」、香川県教育委員会

第3章 予備調査の成果

第1節 調査の方法と成果

県道円座香南線については、既述したように、北半部の中間工区の路線内に所在する遺跡の本発掘調査及び報告書の刊行は既に終えており、今回、南半部の香南工区の工事開始が決定された。香南工区の調査対象地は、延長約1.2km、面積約25,000m²と広大なため、事前に本発掘調査範囲の確定を目的とした予備調査を実施することとなった。

予備調査は、平成31年4月1日～令和元年6月30日までの3ヶ月間を要し、計72トレンチ、実掘面積1,475.5m²の調査を実施した。また、期間内に水田耕作等により調査が実施できなかった32・33トレンチ（実掘111m²）については、池内古田遺跡本調査中の令和元年11月に追加して調査を実施した。調査は、対象地の地割の形状や面積により、1筆に1～数本のトレンチを設定し、基本的に重機により基盤層まで掘削し、平・断面の観察により、遺跡の有無を確認した。調査の結果、遺構・遺物がまとまつて確認された、7トレンチ南半から11トレンチの2,381.37m²については「池内古田遺跡」として、21・26トレンチ周辺の1,019.56m²については「池内御所原遺跡」として、33トレンチの1,278m²については「上道池東遺跡」として、それぞれ本発掘調査が必要と判断した。

以下では、予備調査の成果について報告を行う。調査を行ったトレンチのうち、本発掘調査の対象となつたトレンチについては、本発掘調査の成果と重複することもあり、挿図・写真の掲載は省略する。各トレンチの所見については、調査担当者が一覧表にまとめたものを転載する。

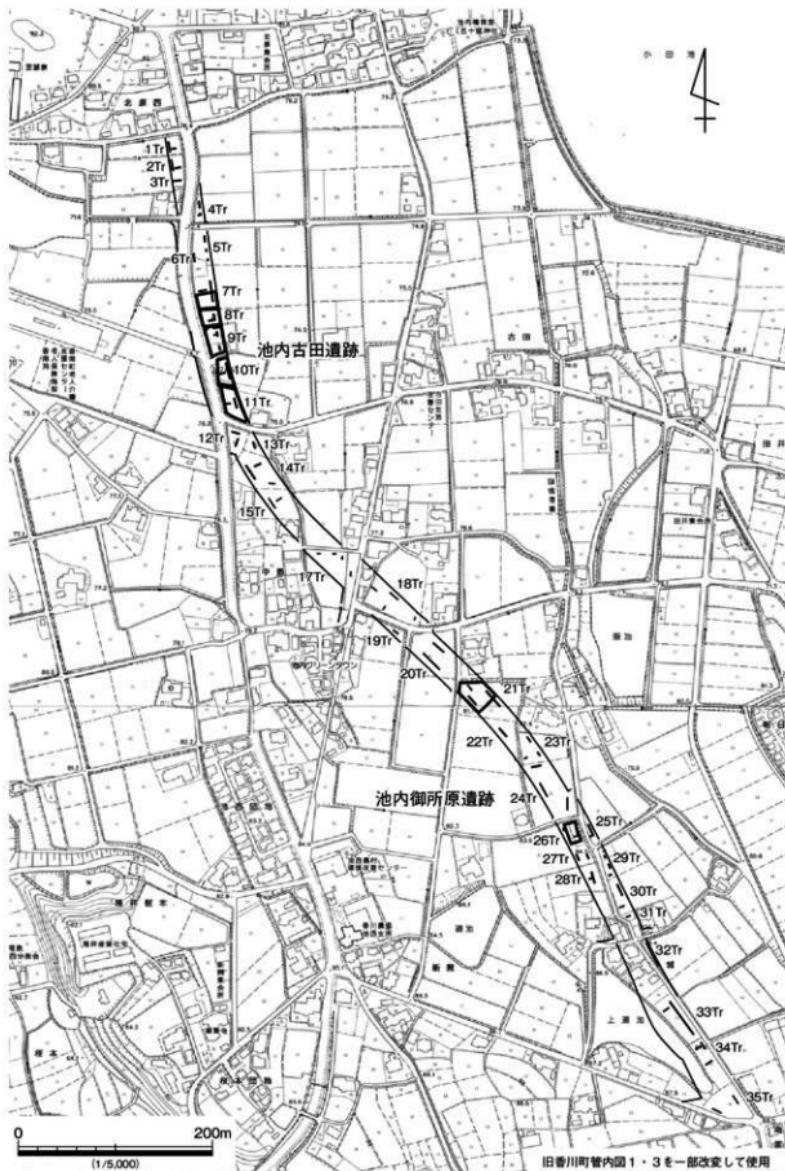
また、調査により出土した遺物は第17・18図に掲載した。1は、6トレンチの東壁4層（第9図）より出土した土師質土器皿である。堆積層は、おそらく近世以降の旧耕作土層と考えられ、混入資料であろう。3は、9.1トレンチSD146出土の土師質土器皿である。SD146は、池内古田遺跡5区SD45に相当するとみられ、本資料は後述する溝の時期より古く、混入の可能性が高い。47は、同トレンチ包含層出土とされるサヌカイト製の石鏡である。上下端を折損する。14は、12.2トレンチSD89出土の土師質土器鉢である。内面に3条／單位のスリメを施す。15世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。37・38は、11.2トレンチSK59出土の土師質土器焼烙である。38は、ほぼ完形に復元され、37も1/2個体程度が残存する。いずれも胎土中に角閃石粒を含むことから、高松市御腰周辺で焼成された可能性が高い。なお、37は内外面及び破断面に煤が付着し、破損後火中にあったと考えられる。

表2 予備調査成果一覧1

番号	範囲(m)	面積(m)	遺構	遺物	所見
1-1	17×2	34	横坑1	南昔小屋、堆積土 内	直施面下約0.2mで削平を受けた基盤層を検出。柱穴1基を検出したが時期不明。遺物は耕作土から出土。
1-2	7×2	14	—	—	直施面下約0.2mで削平を受けた基盤層を検出。
2-1	18×2	36	—	—	基盤層は土から南へ傾斜。南側では造土が認められる。南面は直施面下約0.5m。北面は同じ約0.2mで堆積層を検出。
2-2	10×2	20	—	—	基盤層は土から厚さ約0.2mの造土があり、直施面下約0.6mで基盤層を検出。基盤層は西から東へ傾斜する。
3	10×1	10	—	土師質土器上部層	直施面下約0.3mで造土された基盤層を検出。包含層から南昔小屋が検出されたが、地質判別は不可観。
4-1	12×2	24	—	—	直施面下約0.2mで基盤層を検出。耕作土下端に厚さ約0.2mで堆積の造土上を耕作土を検出。南から北へ傾斜する。
4-2	1×2×2×3×2	14	渠1、性格不明遺構1	土師質土器上部層	直施面下約0.7mで基盤層を検出。耕作土下端に厚さ約0.2mで堆積の造土上を耕作土を検出。南から北へ傾斜の遺物はなく、不明遺構から土師質土器上部土層に土器が検出されている。
5-1	10×2	20	—	—	直施面下約1.9mで基盤層を検出。耕作土下端に造土が認められる。その下部に厚さ約0.5mほどのがれへ傾斜する耕作土がある。東西に傾斜する傾向を示す。
5-2	4×2	8	—	—	5-1と同じ傾向を示す。
5-3	3×2	6	—	—	基盤層は約5.1mとシート状に亘る。直施面下約2.6mまで削平した後、基盤層まで深くなかった。遺物が認められず。
6	14×2	28	渠1	土師質土器斜行	直施面下約3.5mまでが認めている。谷の土器斜行下部は造土が認められ、その上部には包含層（中段の土器斜行上部を除く）が認められる。
7-1	10×2	20	—	—	南半部では、直施面下0.2mの耕作土下で削平を受けた基盤層を検出。北半部では谷を埋めた造土が最大0.7mほどが認められる。
7-2	13.5×2	27	渠1、性格不明遺構1	—	直施面下約0.2mで基盤層を検出。而上部が削平され、土器斜行下部が認められる。直施面下約0.9mで私物を検出したが、ともに出土位置が不明である。
8-1	10×2	20	渠4、性格不明遺構1	田器遺物	直施面下約0.2mで基盤層を検出。渠は差別化しており、上部の1渠は耕土から造被以降、下部以下の1渠は底盤部分から古代と考えられる。

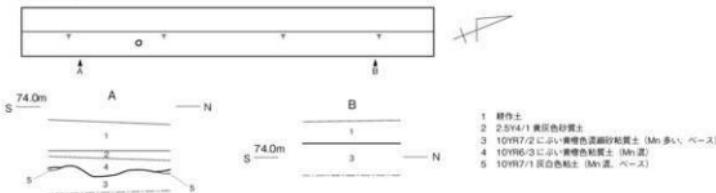
表3 予備調査成果一覧2

番号	範囲(m)	深度(m)	遺傳	遺物	確認
82	5 × 24 × 15	16	縦2	サツカイト小片	縦2トレンチにて発見して採取する調査区、古代の土の団子とそれを切り込む溝を検出した。古代の土は、細胞や柱状の繊維から9.7mmの土層が確認される可能性がある。
93	7 × 15	10.5	横2	土耕質土壌片	耕作下部に泥炭層、泥炭層の奥の土の团子で手平を受けるだけ同じ範囲の2箇所を検出した。1箇所の奥から中耕ふくらむに底面土質と付着が見えた。
94	4 × 1	4	-	-	-
93	5 × 15	7.5	土尻1, 溝2	土耕質土質基盤層	地盤構造況は1トレンチと同じで、約0.5m深まで手平をするより上の溝と横沟。方向は異なるが、9.1トレンチの溝と連続する下部に泥炭層、泥炭層の奥の土の团子で手平を受ける。
103	28 × 2	5.6	横穴29, 溝2	土耕質土質耕作下部、鉢形、瓦片	土耕質土質耕作下部で手平と溝と瓦片を発見。出土物は少ないので、立派な土器底蓋のものと推測している。
102	12 × 2	24.6	横穴15、土尻2、溝1	土耕質土質耕作下部	地盤構造況や地形の横断面は10.4トレンチと同じ。
114	7.5 × 2	15	柱穴1	土耕質土質耕作下部	手平作上に溝と底土を含めて屯城を手平を受けた基盤層上面で柱穴1と北東隅に落ち込み1を検出。地盤構造。
112	17 × 2 × 3	3	柱穴16, 地底3、溝2、土耕質土質耕作下部	土耕質土質耕作下部	地盤構造況は11トレンチと同じで、手平を受けた基盤層と底土と溝や多量の柱穴が検出。土丸からはほほ開墾の古土と土耕質土質耕作下部で手平を受ける。
134	13 × 2	6.0	柱穴3、溝1	土耕質土質耕作下部	地盤構造況は12.4トレンチと同じで、表面に手平を受けた基盤層と底土が検出され、地盤構造。
122	13 × 2	20	柱穴3、溝1	土耕質土質基盤層	地盤構造況は12.4トレンチと同じで、基盤層と底土以下の網眼砂を検出。
13	11 × 2	21	柱穴1、溝1、現代歩道	土耕質土質片	耕作土面上に削成された基盤層を認定。古式の陶器片・瓦・ガラス瓶等を含めたごみと共に取りつく溝を検出。中耕の跡時代で使用されていた古い石器を確認。
143	27 × 2	54.6	柱穴5、土尻1	-	耕作土面上削成された基盤層を認定。村外付近から古式陶器の可能性がある。
142	32 × 2	24	-	-	耕作土面上に削成された基盤層を認定。中耕の跡では古式の陶器片が落ち込みが見られだが、蓋の方に下る地形の方に倒れ残った。
143	30 × 1	10	-	-	耕作土面上削成された基盤層を認定。地中に倒れかぶついた状態を認定。地中に倒れかぶついた状態を手平を受けた。
151	20 × 1	20	柱穴11、土尻1、溝3	縫隙筋片、瓦片	耕作土面上に削成された基盤層を認定。地中に倒れかぶついた状態を手平を受けた。
152	10 × 1	10	-	-	地盤構造況は、14.2トレンチと同じで、東側斜面に乱石が堆積する。基盤層上で発見した柱穴は12.4m距離であり、時間不明。
16	-	-	-	-	地盤構造況は、14.2トレンチと同じで、手平を受けた基盤層と底土が検出され、地盤構造と底土が検出。
174	5 × 15	7.5	-	-	地盤構造况は17.1トレンチのものと同様に、矢張り底土の可能性がある。
172	5 × 15	7.5	-	-	地盤構造况は17.1トレンチのものと同様に、矢張り底土の可能性がある。
173	5 × 15	7.5	-	-	地盤構造況は17.1トレンチのものと同様に、矢張り底土の可能性がある。
174	7 × 1	2	-	-	手平の斜面標高に即して1.8m程度の柱穴が見えたが、検出点は17.1トレンチより西へなる。
163	18 × 1	18	-	-	耕作土面上に削成された基盤層を認定。地中に倒れかぶついた状態を手平を受けた。
182	11 × 1	11	-	-	耕作土面上に削成された基盤層を認定。その下の底土を含めた柱穴を確認。西の谷に向かって傾斜や中耕を複数していった。
183	7 × 1	7	-	-	耕作土面上に削成された基盤層を認定。地中に倒れかぶついた状態を手平を受けた。
184	5 × 1	5	-	-	良い良い立派な柱穴。
19	10 × 1.5	15	-	-	耕作土面上に削成された基盤層を認定。
203	23 × 1.5	34.0	柱穴4、溝1	土耕質、砂質粘	ほぼ全部で底面に凹凸の柱穴の土と柱穴によって手平を受けた基盤層を認定。漢は埴し瓦片や縫隙筋片を含む底面に柱穴のものである。柱穴は瓦片のなく、地盤構造。
202	33 × 1.5	49.5	柱穴1	-	底面 10.0m以上まで 49.4m 時期の底面の成層構造。その日は20.4トレンチと同じに、耕作直下で手平を受けた基盤層を認定。瓦片も瓦片を掘り出しが、出土物は全くない、時間不明。
214	34 × 2	68	縫隙筋小片	-	縫隙筋 5cm までの基盤層が確認され、土耕作直下で手平を受けた基盤層を認定。この底土が底面と同時に柱穴を含む柱穴層を認定。柱穴は5cm以上の大きさの柱穴。
212	185 × 2	37	東1	-	縫隙筋から約 0.3m 下で、基盤層を認定。柄高付した漢は 23.4 トレンチのものと方向が異なるものの、縫隙筋は柱土から同一方向へなる可能性が極めて高い。
213	11 × 15	16.5	土耕質土質小片	-	縫隙筋から約 0.3m 下で、基盤層を認定。柄高付した漢は 23.1-2 トレンチのものと方向が異なるものの、縫隙筋は柱土から同一方向へなる可能性が極めて高い。
22	38 × 2	36	東1	-	地盤構造は柱土のものと同様に、柱穴の底面を含む柱穴層を認定。透視地形と柱土と地盤構造と底土が同じだ。柱穴は不規則。
234	10 × 15	15	-	-	耕作土面上に削成された基盤層を認定。透視地形と柱土と地盤構造と底土が同じだ。柱穴は不規則。
252	7 × 15	10.5	-	-	耕作土面上に削成された基盤層を認定。
253	5 × 15	7.5	-	-	地盤構造況は、20.2トレンチと同じ。
294	-	-	-	-	25.4-3 トレンチの地盤構造から、基盤層によく似た土地の切り下げによって陥地跡面が造られた可能性は極めて低いこととがわかったため、未発見柱と抜き跡面が見出されない。
244	15 × 15	22.5	土尻1、溝2	薄葉韋、中土質	薄葉韋、中土質の柱土のものと同様に、柱穴の底面を含む柱穴層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。溝は埴し瓦片や縫隙筋片を含む底面に柱穴がある。
242	25 × 15	37.5	東2	土耕質土質片	耕作土面上に基盤層の成層が見られ、その下の土は手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
243	20 × 15	30	柱穴3、溝1	塑質圓錐、頭頂部塑質圓錐	耕作土面上に柱土と柱穴のものと同様に、柱穴の底面を含む柱穴層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
20	20 × 5 × 2	50	-	-	耕作土面上で、柱穴に手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
26	6.5 × 1 × 6 = 1	12.5	土尻1、溝1	土耕質土質片	土生土面レンドチ、耕作直下で柱穴と柱土がある柱穴層がある。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
27.3	11 × 2	22	-	-	耕作土面上に削成された基盤層を認定。
27.2	8 × 2	16	-	-	地盤構造は 27.3 トレンチと同じ。
27.3	5 × 1	5	-	-	耕作土面上に基盤層の成層が見られ、その下の土は手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
28.3	19 × 2	38	柱穴3、溝1	土耕質土質片	耕作土面上に柱土のものと同様に、柱穴の底面を含む柱穴層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
28.5	6 × 2	12	柱穴1	-	耕作土面上に柱土と柱穴があり、その下の土は手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
29.1	4 × 2	8	-	-	耕作土面上で柱穴があり、その下の土は手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
29.2	8 × 2	16	びづ凝灰3	-	耕作土面上に柱土と柱穴があり、その下の土は手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
29.3	6 × 2	12	-	-	耕作土面上に柱土と柱穴があり、その下の土は手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
30.1	20 × 2	40	土尻2、性格不明遺構1	-	耕作土面上に柱土と柱穴があり、その下の土は手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
30.2	8 × 1.5	12	-	-	耕作土面上で、柱穴に手平を受けた基盤層を認定。
31	7 × 15	10.5	-	-	耕作土面上で、柱穴に手平を受けた基盤層を認定。
32	25 × 1	25	-	痕跡部分	耕作土面上で、上部が手平を受けた基盤層(黄色系粘土)を確認。南北は基盤層に土寄せして分割。土寄せから痕跡部分がある。
33	30 × 2	60	土尻2	-	耕作土面上で、上部を手平受けた基盤層(黄色系粘土)を確認。南北は同じ土の上層の土2層を構成。うち1層から痕跡部分がある。
33.2	13 × 2	26	土尻1	痕跡部分、痕跡部分	痕跡は 34.4 トレンチと同じで同じ方向で柱穴を認定。南北は柱土と柱土のものと同様に、柱穴の底面を含む柱穴層がある。
34.3	10 × 15	15	-	-	耕作土面上で、柱穴 14 - 20 cm の底面がある。その下に柱穴に手平を受けた基盤層を認定。南北に柱土は水平に削平を認める。南北に柱土の柱土層がある。
34.2	12 × 15	18	-	-	耕作土面上に厚さ 0.6m の底面があり、その下に柱穴に手平を受けた基盤層を認定。南北は底面では底面土层に柱土がある。
34.3	12 × 15	18	-	痕跡部分	耕作土面上に厚さ 0.6m の底面があり、その下に柱穴に手平を受けた基盤層を認定。南北は底面では底面土层に柱土がある。
35.1	16 × 1	16	-	痕跡部分	耕作土面上に厚さ 0.4 - 1.0m の底面があり、その下に柱穴に手平を受けた基盤層を認定。南北は底面では底面土层に柱土がある。

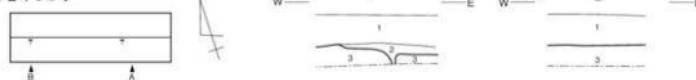


第6図 予備調査トレーンチ配置図

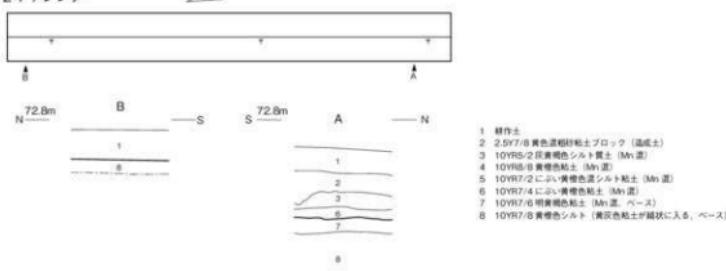
1-1 トレンチ



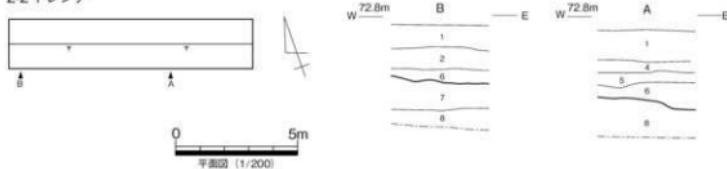
1-2 トレンチ



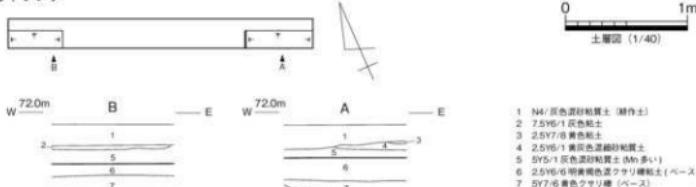
2-1 トレンチ



2-2 トレンチ

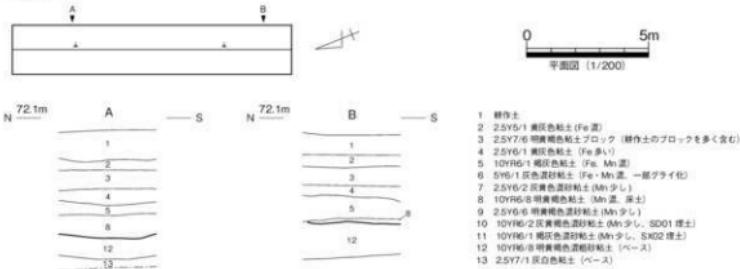


3 トレンチ

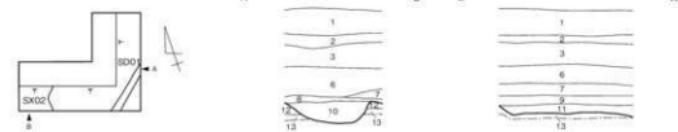


第7図 トレンチ平・断面図1

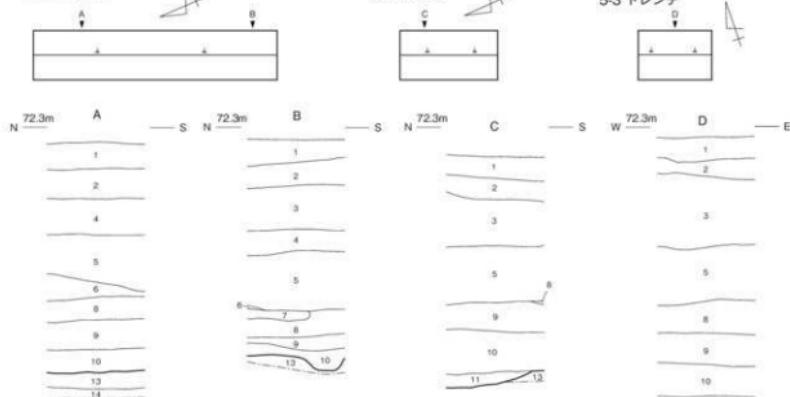
4-1 トレンチ



4-2 トレンチ



5-1 トレンチ

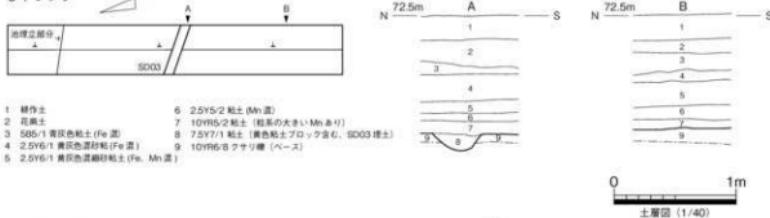


- 耕作土
- 花崗土
- 10YR6/3にびく黄褐色混砂粘土 (涙溝, カラリ含む, 流成土)
- 5G4/1 硅褐色黄褐色砂質土 (黄色粘土ブロック少し, 流成土)
- 10YR5/1 黄褐色混砂粘土 (黄褐色粘土ブロック多い, 流成土)
- 10YR6/1 黄褐色粘土 (Fe 少)
- 2.5Y3/1 黄褐色粘土
- 7.5Y5/1 黄色粘土 (Fe 少し含む)
- 7.5Y6/1 黄色粘土 (Fe 少)
- 7.5Y5/1 黄色粘土
- 2.5Y6/2 黄褐色粘土
- 2.5Y5/6 黄褐色粘土・カラリ砂混粘土 (清水が跡をなため, ベース面まで掘削できなかった)
- 5G6/1 細灰色砂層 (ベース)
- 5G6/1 細灰色砂層 (ベース, 清水面層)

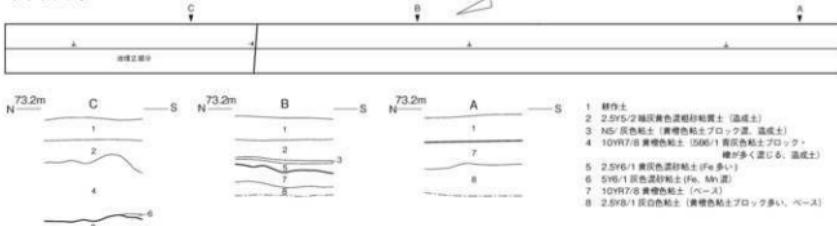
0 1m
土層図 (1/40)

第8図 トレンチ平・断面図2

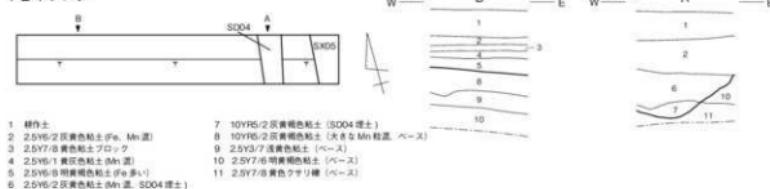
6 トレンチ



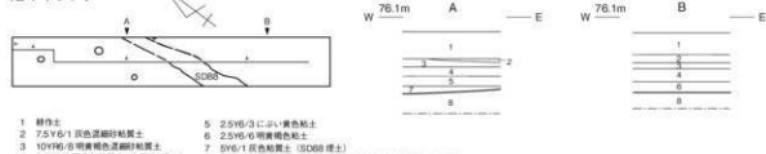
7-1 トレンチ



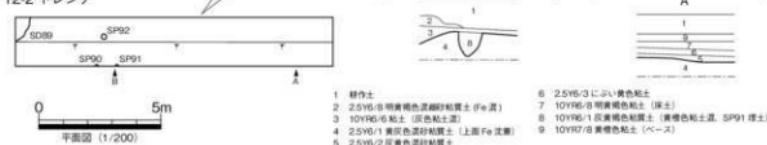
7-2 トレンチ



12-1 トレンチ

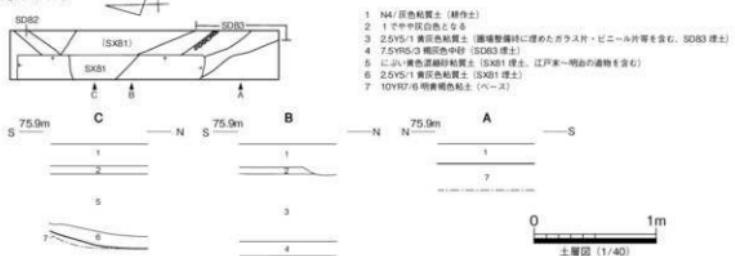


12-2 トレンチ

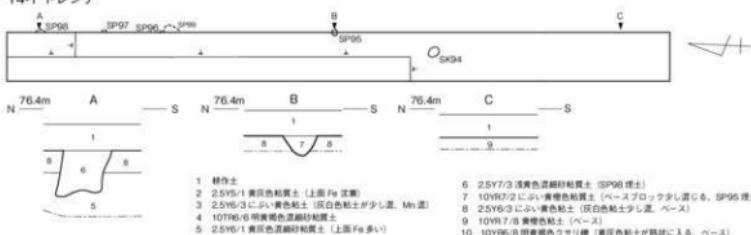


第9図 トレンチ平・断面図3

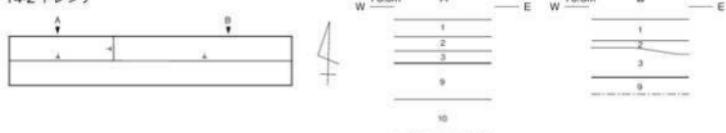
13 トレンチ



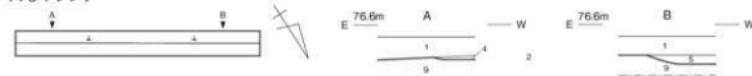
14-1 トレンチ



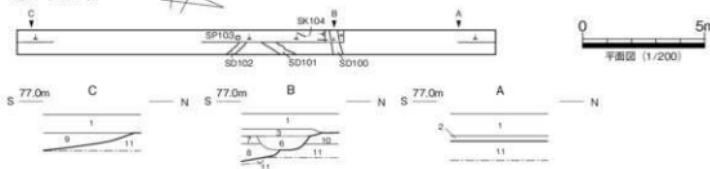
14-2 トレンチ



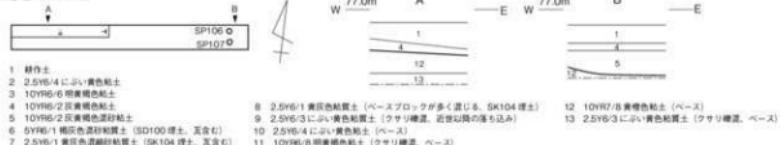
14-3 トレンチ



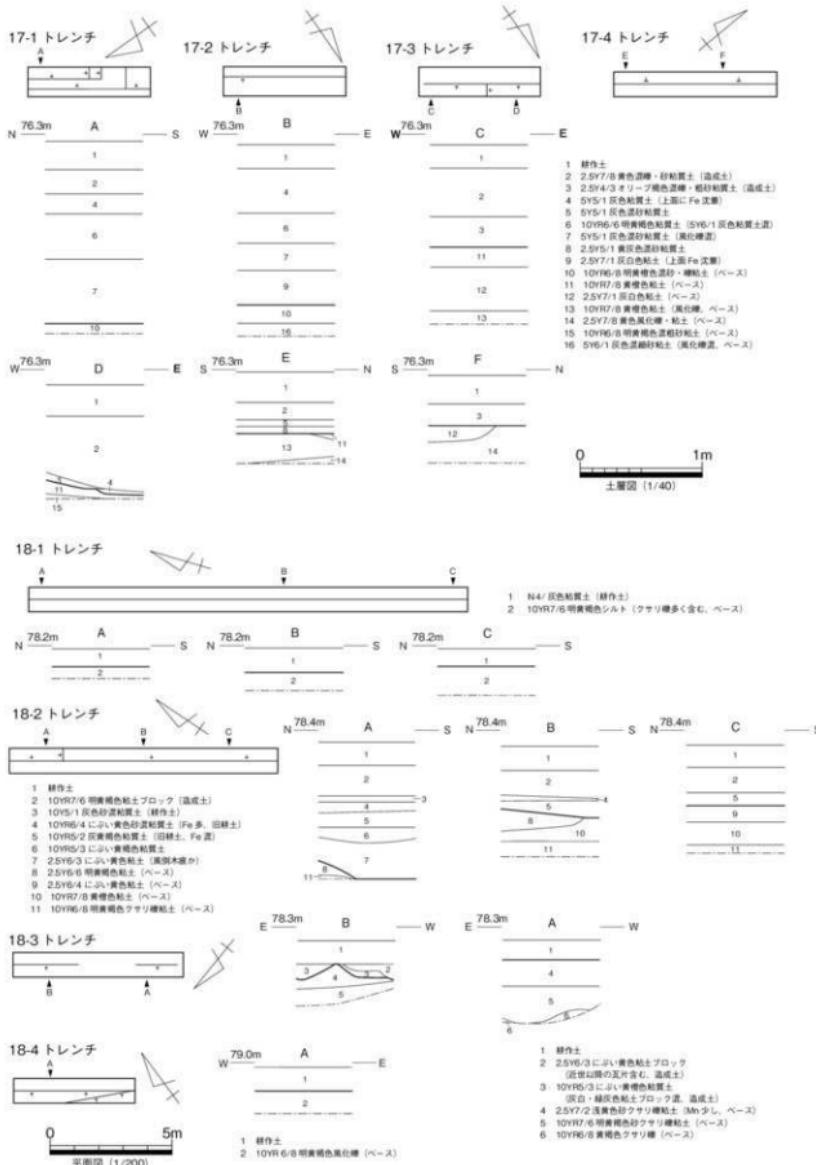
15-1 トレンチ



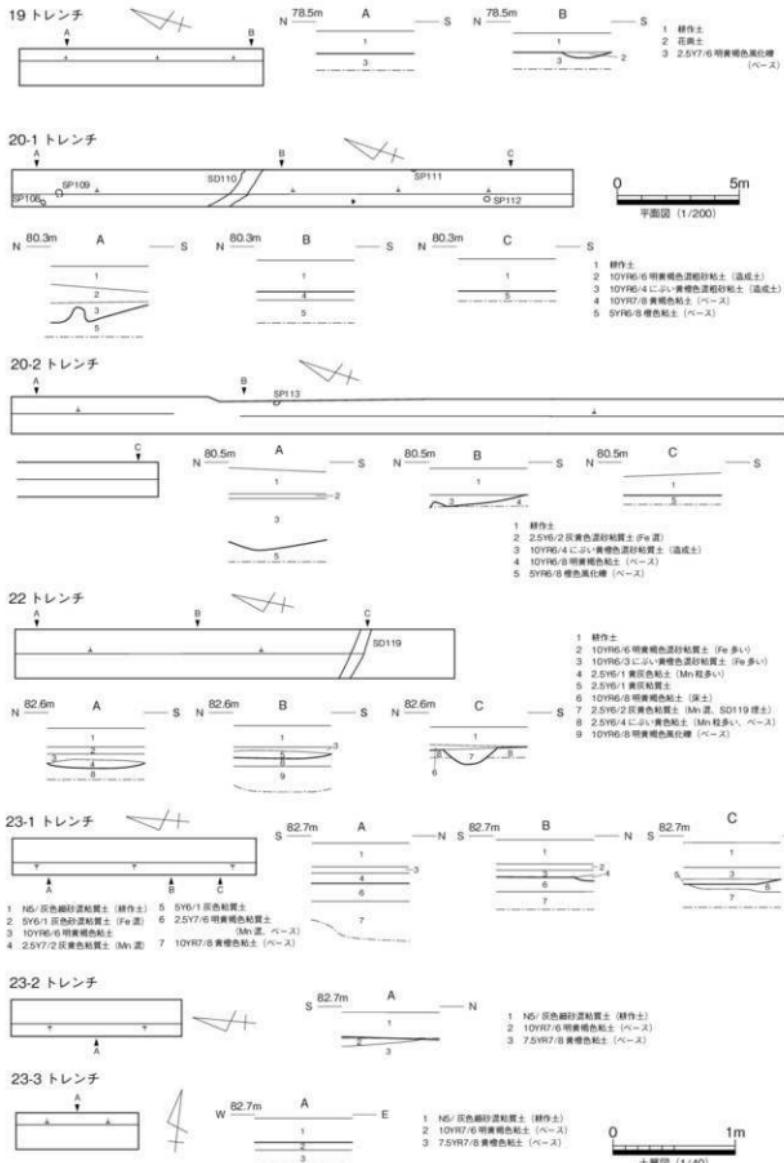
15-2 トレンチ



第10図 トレンチ平・断面図4

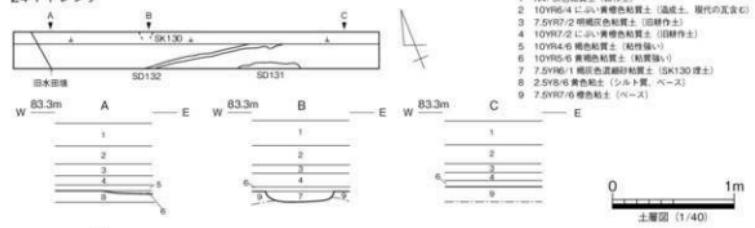


第11図 トレンチ平・断面図5

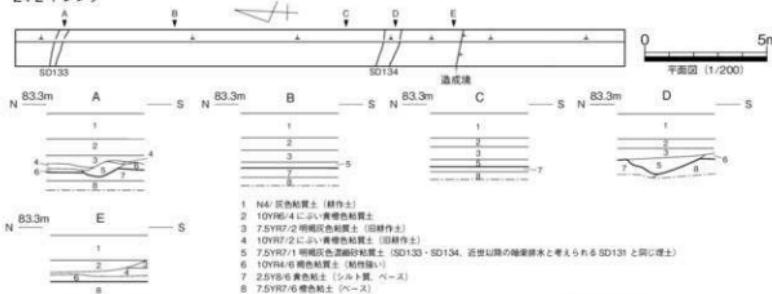


第12図 トレンチ平・断面図6

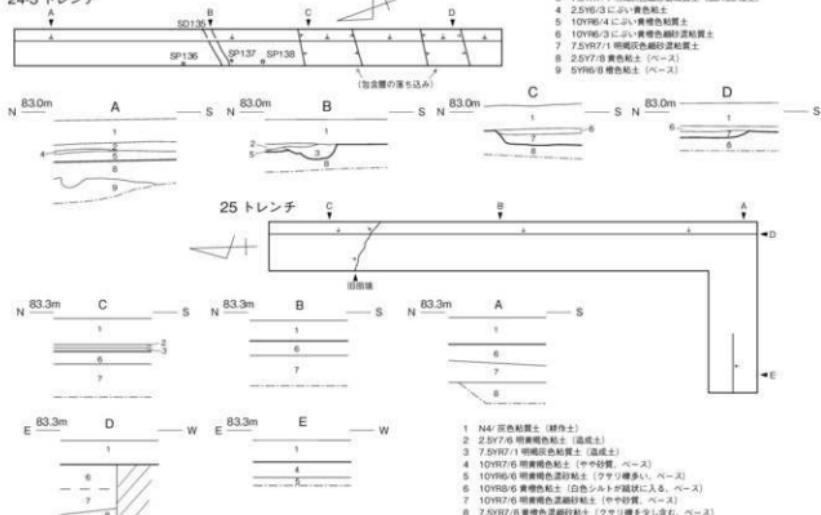
24-1 トレンチ



24-2 トレンチ

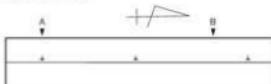


24-3 トレンチ

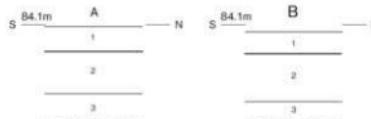


第13図 トレンチ平・断面図7

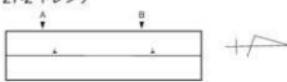
27-1 トレンチ



- 1 N4/灰色粘質土 (耕作土)
- 2 10YR7/8 黄褐色粘質土 (灰白色シルトが縦状に入る、ベース)
- 3 2.5Y7/9 黄褐色土 (ベース)

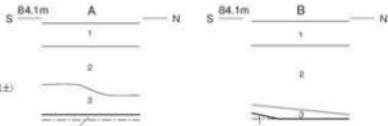


27-2 トレンチ

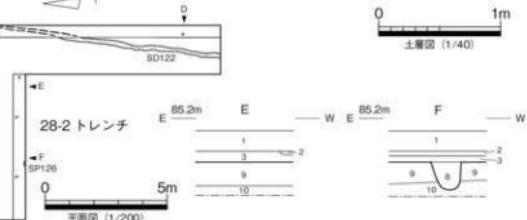
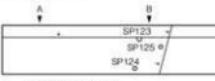


- 1 N4/灰色粘質土 (耕作土)
- 2 5G2/1 細葉色粘質土 (3層をブロック状に含む、造成土)
- 3 10YR7/8 黄褐色粘質土 (灰白色シルトが縦状に入る、ベース)

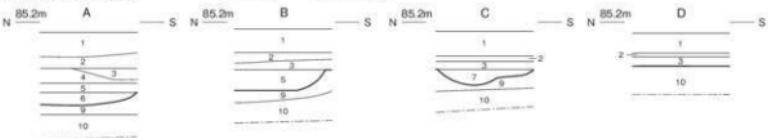
27-3 トレンチ



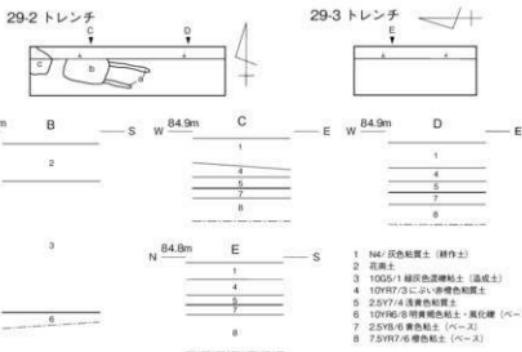
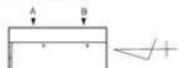
28-1 トレンチ



- 1 N4/灰色粘質土 (耕作土)
- 2 10YR7/4 に近い黄褐色粘質土
- 3 10YR6-6 黄褐色粘質土
- 4 2.5Y6/3 に近い黄褐色粘質土
- 5 2.5Y6/2 黄褐色粘質土 (日本由の位置)
- 6 7.5YR6-2 反覆色粘質土 (日本由の位置)
- 7.5YR4/1 硬化色粘質粘土質土 (SD122 横土)
- 8 7.5YR6/1 硬化色粘質粘土質土 (SD122 横土)
- 9 7.5YR6/1 硬化色粘質粘土質土 (上半は黄褐色粘土を含む、SP126 底土)
- 10 2.5Y7/7 黄褐色粘土 (ベース)

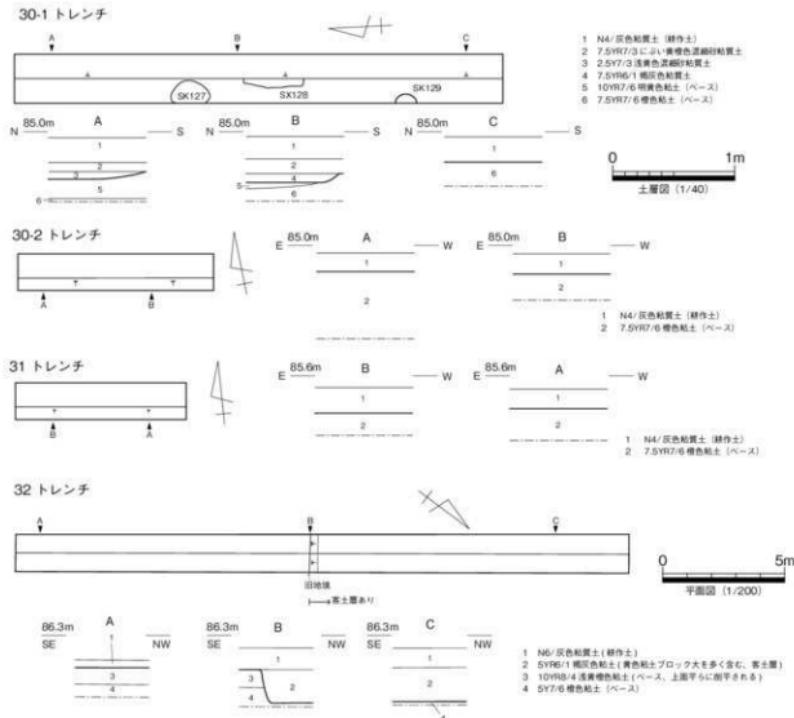


29-1 トレンチ



- 1 N4/灰色粘質土 (耕作土)
- 2 花崗土
- 3 10G5/1 硬化色漂礫粘土 (造成土)
- 4 10YR6/3 に近い黄褐色粘土質土
- 5 2.5Y7/4 黄褐色粘土質土
- 6 10YR6/6 黄褐色粘土 (ベース)
- 7 2.5Y8/6 黄褐色粘土 (ベース)
- 8 7.5YR7/8 黄褐色粘土 (ベース)

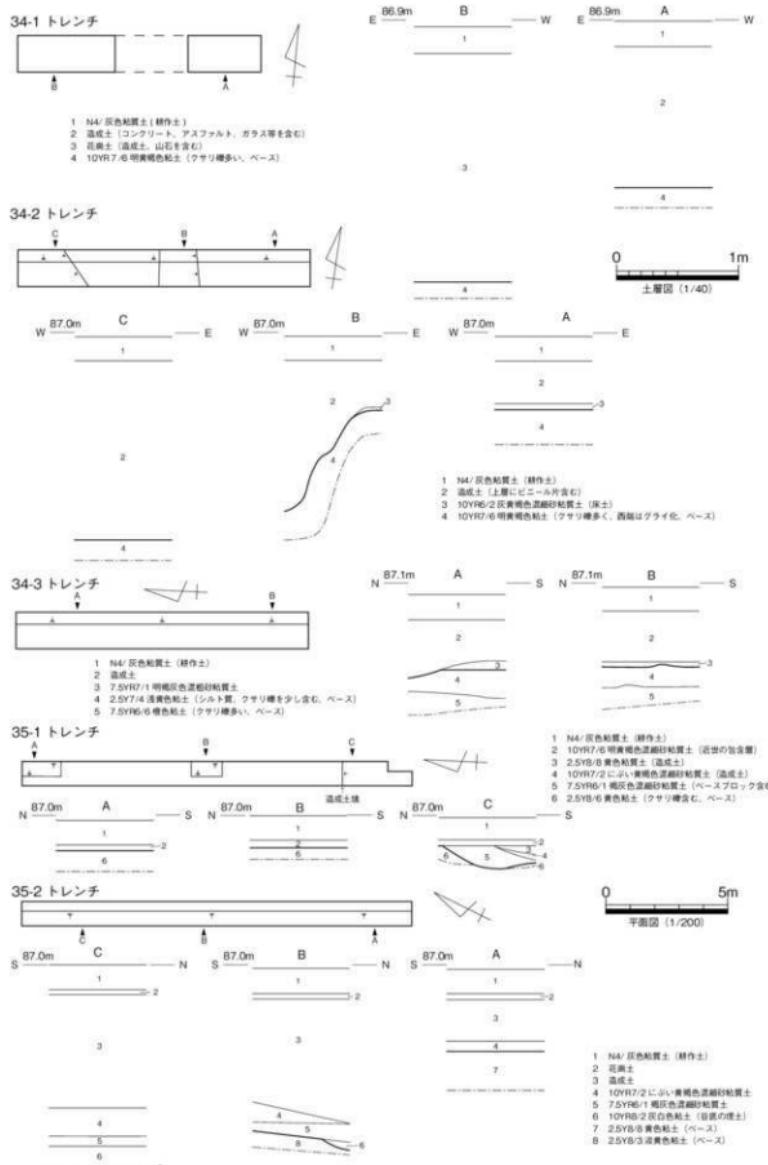
第14図 トレンチ平・断面図8



第15図 トレンチ平・断面図9

18世紀後半前に位置付けられる。

13・16～19・22・25・27～31・33・35・36・41・42・44・45は、13トレンチSX81出土資料である。13は備前焼壺の底部片。内外面に暗赤褐色の塗土を施す。16は、瀬戸・美濃系染付の端反碗。外面は、藤の花房を大きく描き、左右に蔓を配す。17は、産地不明の白磁碗。18は、肥前系染付の広東碗である。18世紀末～19世紀初頭。19は、瀬戸・美濃系陶器の広東碗で、外面に燕子花？、見込みに岩波文？を描く。22は、瀬戸・美濃系の灯明皿。体部は丸味をもって開き、外面口縁端部付近まで灰釉を施釉する。内外面煤が付着し、火災等の可能性が伺える。25は、蛇目四形高台の肥前系染付皿。見込みに竹を描く。27は、瀬戸・美濃系染付蓋。おそらく端反碗の蓋であろう。天井部に草花文を描く。28は、肥前系染付蓋。天井部に牡丹と喜字？、口縁部に流水文を描く。29は瀬戸・美濃系の練鉢。内外面灰釉を施した後、外面体部に白泥をイッチン掛けする。30は、肥前系の刷毛目鉢。内面に同心円状に白土を施す。31は、瀬戸・美濃系の灰釉片口。見込みに目跡1ヶ所を認める。33は、軟質釉陶器の蓋で、行平鍋等の蓋となろう。摘み部に2条、天井部に4条の沈線を施す。35は、同土瓶の注口部の小



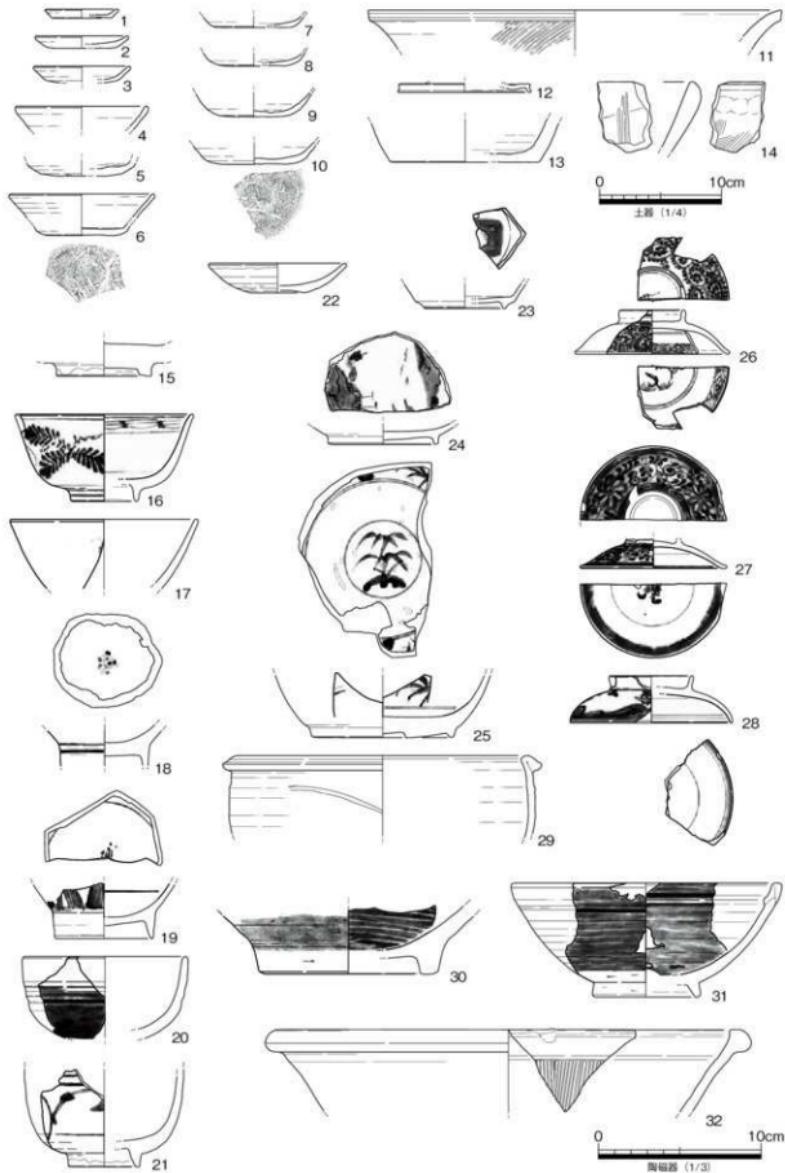
第16図 トレンチ平・断面図 10

片。外面底部周辺に使用時の煤が付着する。**36**は、土師質土器七厘。型成形で外面に草花文を陽刻する。口縁部は波状を呈し、さなと器体が一体となる。胎土中に、角閃石細粒を多量に含み、高松市御殿系の製品である。**41**は、瓦質土器の甌。釜口部の小片で、本資料も胎土より御殿系の製品である。**42・44**は、堺・明石産擂鉢。それぞれ内面に 3~4 条/cm のやや粗いスリメを密に施す。また**44**は、**22** 同様に内外面に煤の付着を認め、火災等により破損した可能性がある。**45**は、土師質土器甌の口縁部片である。本資料も、胎土より御殿系の製品と考える。

20・23・24・32・34・40・43は、13 トレンチ SD83 出土資料である。**23**は、瀬戸美濃系染付磁器で型打皿である。見込みに吳須で描いた枠内に篆書で文字を線刻する。**24**は肥前系染付磁器皿で、見込みに海浜風景を描き、目跡 2ヶ所を認める。**20**は、瀬戸美濃系施釉陶器碗で、いわゆる腰錫碗である。**32**は、产地不詳の施釉陶器擂鉢の口縁部。内外面に鉄釉を施し、5 条/cm のスリメを密に施す。**34**は、軟質施釉陶器鉢で、体部外面に煤が付着することから、行平鍋となろう。**40**は、瓦質土器炬燧の天井部の小片。側面中央部に径約 1.5cm の円孔を穿つ。**43**は、堺・明石産擂鉢の底部片。内面体部には、4 条/cm のスリメを密に施す。本溝出土の資料は、19世紀代の遺物が主体を占め、最終埋没は近代による可能性がある。

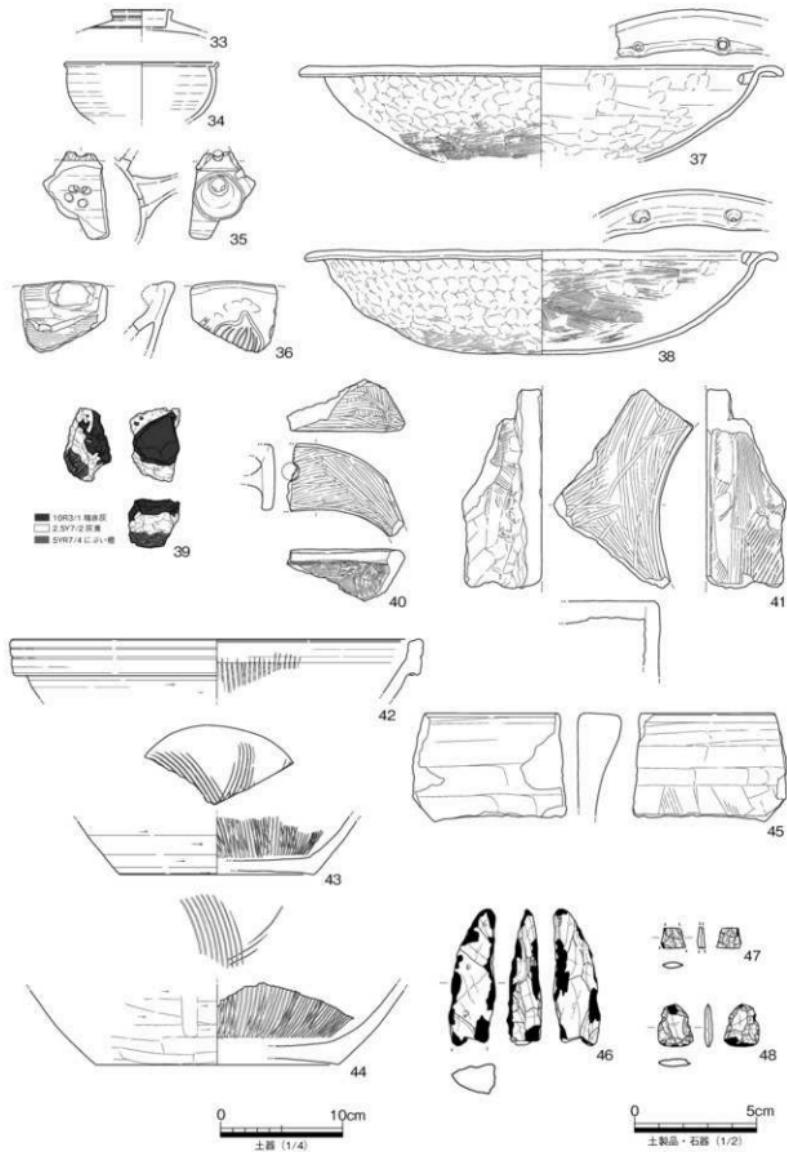
21は、15-1 トレンチ SK104 出土の肥前系陶胎染付碗である。18世紀前半代に位置付ける。**26**は、同トレンチの旧耕作土もしくは床土層出土の肥前系染付磁器蓋である。天井部外面に蛸唐草文、摘み内に寿字、内面には環状の松竹梅文と、口縁部に四方襷文を描く。19世紀前葉～中葉。**46**は、21-3 トレンチ SD118 出土のナイフ形石器である。21-3 トレンチ周辺は、池内御所原遺跡として本発掘調査を実施している。本調査区を含めて唯一の旧石器資料であり、池内御所原遺跡周辺の段丘中位面に、同時代の遺跡が展開していた可能性を示す貴重な資料である。なお、予備調査時に確認した SD118 は、本調査時の SD05 に相当する。**7・9**は、26 トレンチ SD120 出土の土師質土器杯である。いずれも器表面が脆く剥離し、調整等が確認できない。出土した 3 点は、器形や色調、胎土が近似しており、同一工房で製作された可能性が高いと考える。時期は、およそ 13 世紀後半～14 世紀初頭に位置付けられる。なお SD120 は、トレンチ位置より池内御所原遺跡 II 区の SD19 に相当し、遺物の年代も矛盾はない。**4・6**は、28-1 トレンチのベース面上の旧耕作土層とみられる堆積層より出土した須恵器杯である。**6**は、同一個体の破片が、本調査時の同トレンチ埋土より出土している。口縁部と底部は接合しないが、色調や焼成等より同一個体と判断した。いずれも 9 世紀を中心とした時期の資料とみられる。**11**と **15**は、それぞれ 24-3 トレンチ包含層出土の十瓶山周辺窯産の須恵器甌と龍泉窯系青磁碗 I 類の底部片である。いずれも 12 世紀を中心とした時期に位置付けられる。**2**は、26 トレンチ SD120 出土の土師質土器皿。器表面のマツツが顕著。13 世紀中葉～後半に位置付けられる。**10**は、28-1 トレンチ SP124 出土の土師質土器杯である。13 世紀前半代に位置付けられる。**39**は、同トレンチ包含層出土とされる焼土小塊である。右上図（上面）が強く被熱・赤変し、下端は石英粒を含む黄色系粘土と考えられ、ベース層に類似した土壤が固化したものとみられる。用途は不詳だが、鍛冶等に関わる資料の可能性も考えられる。**48**は、28 トレンチ周辺で表採された石礫である。未完成の可能性がある。**5**は、32-1 トレンチ客土層出土の須恵器杯である。7 世紀代の資料とみられる。**12**は、33-1 トレンチ SK01 出土資料で、須恵器高杯の脚端部の可能性を考え図示した。

予備調査の成果からは、近世以降と考えられる本地域の本格的な開発に伴う地形面の改変や、昭和期に実施された圃場整備等により、予想以上に大規模な地形の改変がなされ、現地表面の観察からは読み



第17図 予備調査出土遺物実測図1

取れない小規模な開析谷の存在や、圃場整備前の地割の形状等が明らかとなつた点は大きな成果と言える。また、過去の開発行為により遺構面が強く削奪され、遺構の残存が希薄であったため、本発掘調査の対象地からは除外されたものの、例えば20・24トレンチ等において確認された柱穴等からは、トレンチ周辺において本来は中世の屋敷地等が存在した可能性も指摘される。また、中世以前の遺物を包含する希薄な包含層が12・23・24トレンチ等で確認され、包含層下面はほぼ平坦に削平を被っている可能性が指摘されており、調査成果から包含層が中世段階の耕土層の一部である可能性を示唆するものと考える。これらの成果は、更新世段丘面の中位面の一部について、中世段階には森林が大きく切り拓かれて、耕作地として開発されていた可能性を示唆する実証として重要であろう。今後も、こうした圃場整備後の地域についても、粘り強く調査を継続することで、地表面の観察からは得られなかつた情報が集積され、地域の詳細な歴史像の解明に貢献できるものと思われる。



第18図 予備調査出土遺物実測図2

第4章 池内古田遺跡の調査

第1節 調査の方法

調査対象地は、南北延長約130m、東西幅約18mと南北に長く、調査前は後述する1～4区が水田等の耕作地、5区は雑種地として利用されていた。また、調査区内を用水路や農道等が東西に横断し、こうした工作物や地割等を勘案して、調査区を北より順に1～5区の5調査区に区分して調査することとした。各調査区の実掘面積は、最小は1区の約308m²、最大は5区の約512m²である。また現地表面の標高は、1区が約73.1m、4区が74.7mで緩やかに北に降る。

調査は直営方式により実施し、重機により遺構面まで掘削し、それ以下は人力にて掘り下げを行った。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。調査に際してグリットは設定せず、各調査区が比較的狭小なため、包含層等の遺物については、必要に応じてトータルステーションで出土位置を測量・記録し、出土状況を写真撮影して取り上げた。

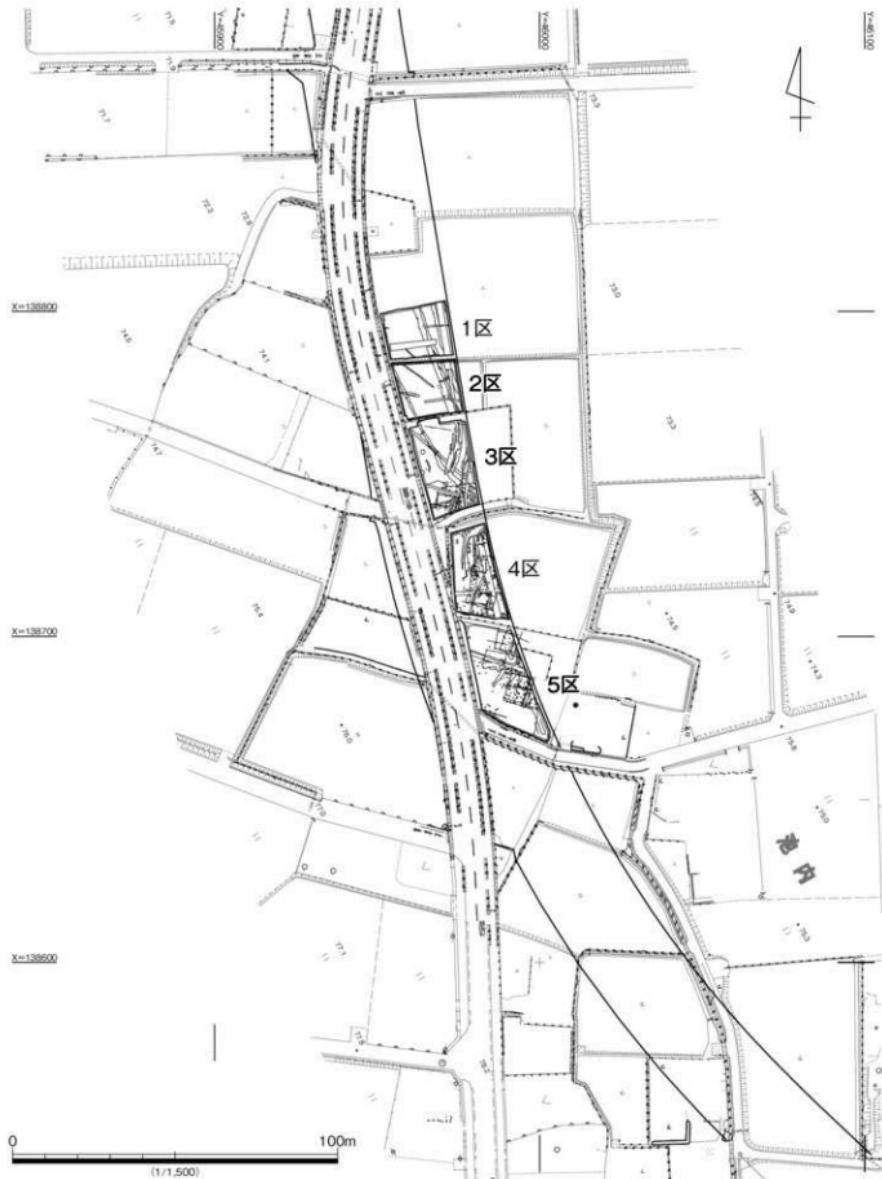
遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、柱穴を除いた全ての遺構については新たな番号を付して統一した。遺構の種別については、調査時の担当者の所見を尊重し、土坑としたものが掘立柱建物の柱穴となったもの等、明らかに齟齬があるものを除いて、基本的に変更は行っていない。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲する。

なお、本書の執筆に際して、調査担当者と協議を行い、事実関係に齟齬が生じないように調整を行った上で、藏本が執筆した。

第2節 基本層序

土層序の観察は、基本的に各調査区の壁面において行った。調査地は耕作地や雑種地として利用されていたようだが、昭和期の圃場整備による大規模な改変を除けば、各調査区の土層序の堆積状況に、大差は認められないようである。

1区では、現耕作土（第21図西壁2層）が20～30cmの厚さで堆積し、その下位には最大5層に細分される旧耕作土ないし床土層や整地層とみられる水平堆積層（同図5～13層）が、北西方向に厚みを増して堆積しており、昭和60年度の圃場整備前には、調査区の中央付近で東西に2筆以上の耕作地に分筆されていた可能性が高いと考えられる。これら旧耕作土・床土層下でSD03（第20図北壁22・23層）やSD04（同図19～21層）等の遺構を検出した。これを第1遺構面とする。また、調査区の西半部で第1遺構面下に最大3層に細分される包含層（同図北壁29～31層）を確認したが、各包含層下で明確な遺構は確認されなかった。なお、包含層からは、古代とみられる須恵器片や中世土師質土器足釜、瓦質土器擂鉢の他、肥前系染付磁器、產地不詳の施釉陶器等の小片が若干量出土している。SD03等の遺構は中世に位置付けられることから、近世遺物は上位層からの混入の可能性が高く、中世を下限とする堆積層と考えられる。以下、各区の包含層でも同様に近世の資料が出土しているが、いずれも上位層からの混入の可能性を想定したい。また前章で既述したように、本遺跡の西には開析谷が南北に走行しており、遺跡は尾根西斜面部に位置する。包含層は、谷部に向けて堆積した斜面堆積層の一部と考えられる。



第19図 池内古田道路調査区割図

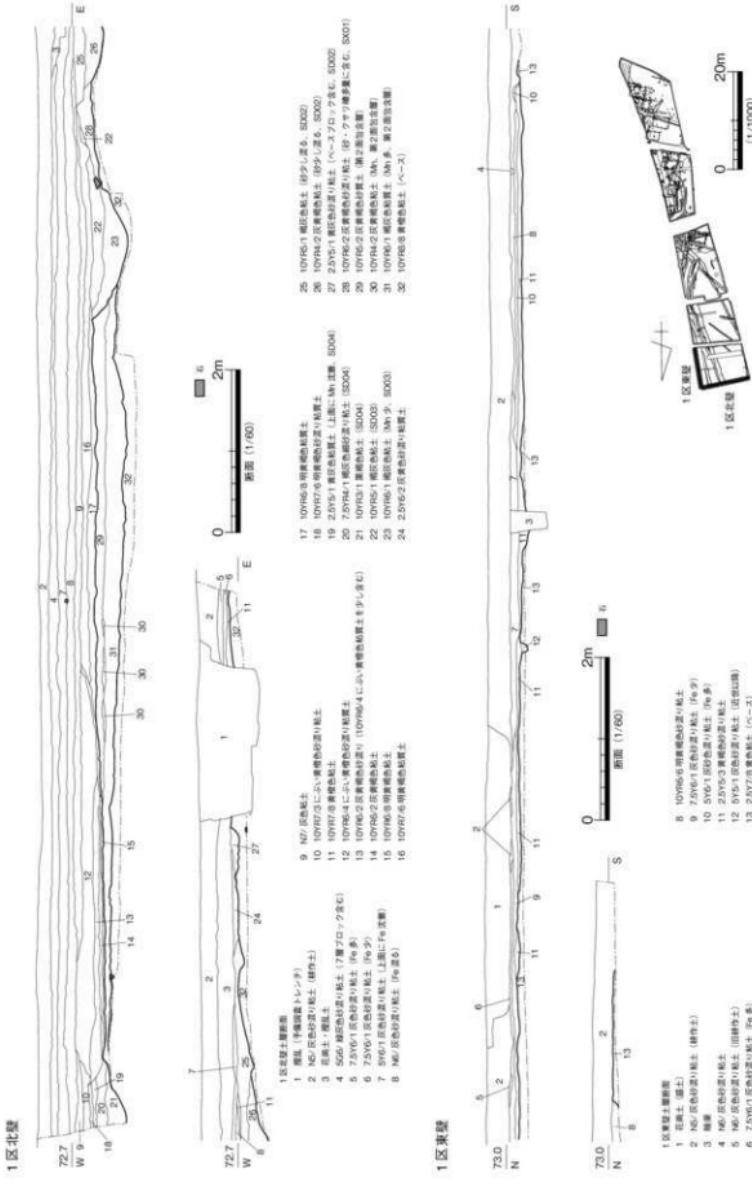
2区でも1区と同様に、現耕作土（第21図北壁1層）下に、最大4層に細分される旧耕作土ないし床土層や整地層とみられる水平堆積層（同図3～11層）が、西側に厚みを増して堆積しており、本地區でも圃場整備前には、東西に2筆以上の耕作地に分筆されていたと考えられる。そして、それら旧耕作土層等下で、SD02、SD03等の遺構を検出し、第1遺構面として調査を行った。第1遺構面下で、2層に細分される包含層の水平堆積（同図19・20層）を調査区西半部で検出しており、1区同様上面を旧耕作土等により削奪された斜面堆積層と考えられる。遺物の内容も1区とほぼ同様で、1区より連続する堆積層であろう。また例えば東壁（第22図）では、SD02（同図10層）がSX02（同図8層）と切り合っていることが記録されているが、平面図では両遺構は約3m離れて記録され、さらに土層図に両遺構の間で検出されたSD10が記録されていない等、平面図と土層図の各調査記録が整合しない。

3区北半部の耕作土下には、最大厚約0.5mの圃場整備時の客土層（第24図西壁4層）の堆積が認められ、圃場整備がなされる前には、南北に2筆の耕作面に分筆されていたと考えられる。その客土層下には、最大4層に細分される旧耕作土・床土等の水平堆積層（同図6～10・15・17・18層）が認められ、その下面で溝SD21（同図13・14層）や井戸SE01等の遺構を検出した（第1遺構面）。旧耕作土層の堆積状況から、かつてはさらに複数の筆に細分されていたと考えられる。また、調査区南半部では、第1遺構面下に2～3層に細分される旧耕作土層（同図16・20・22・23層）の堆積が認められ、その下面でSD23（同図24層）を検出した（第2遺構面）。SD23は近世の溝と考えられることから、上述した旧耕作土層はいずれも近世以降に位置付けられる。第2遺構面下には、包含層とみられる黄灰色粘質土の水平堆積（同図25層）が認められた。包含層からは、中世土師質土器皿等の小片の他、近世土師質土器や陶磁器、丸瓦等が出土したが、上述のように近世の遺物は混入の可能性を考える。上述した旧耕作土層下及び包含層下で、ベース層である黄色系粘土（同図26～30層）が露出する。

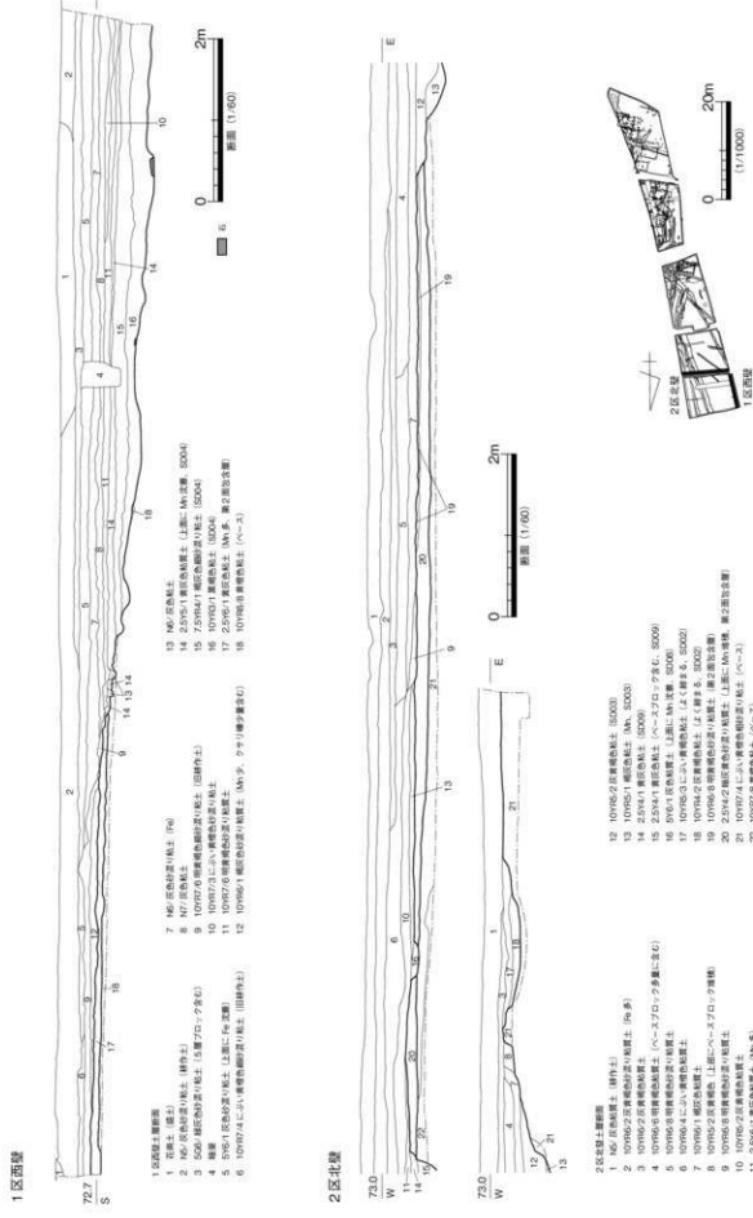
4区南半部では、床土層とみられる明黄褐色砂混り粘質土（第25図東壁5層）下で基盤層の黄色系粘土が露出する。一方、調査区北半部では旧耕作土とみられるにぶい黄橙色砂混り粘質土（同図8層）が水平堆積し、本区においても圃場整備以前には2筆以上の耕作面に分筆されていたと考えられる。南半部においては、基盤層上面でSD35・SD36等の遺構を検出した。また北端部付近には、基盤層上に第2面包含層とみられる灰褐色粘質土（同図17層）の水平堆積が認められ、本層上面でSD29（同図9層）を検出した。第2面包含層からは、器種不詳の弥生土器や中世土師質土器とみられる土器小片が少量出土している。

5区では、雑種地として利用されていたことから、現地表面下には厚さ10～40cmの造成土が盛られ、さらに調査区北半部を中心に圃場整備に伴うと考えられる、層厚最大60cmにも及ぶ造成土が堆積していた。造成土を除去すると、南北に2段の水平面が検出され、本区でも圃場前には2筆の耕作面に分筆されていたようだ。上述してきたように、各区で近年の圃場事業による合筆等の地形変更が認められた。調査結果から圃場整備前の調査地周辺は、南北幅の狭い、地形の傾斜におおよそ合致した、最大でも30cm程度の高低差しかない耕作面が連なる、棚田状の景観に復元されよう。

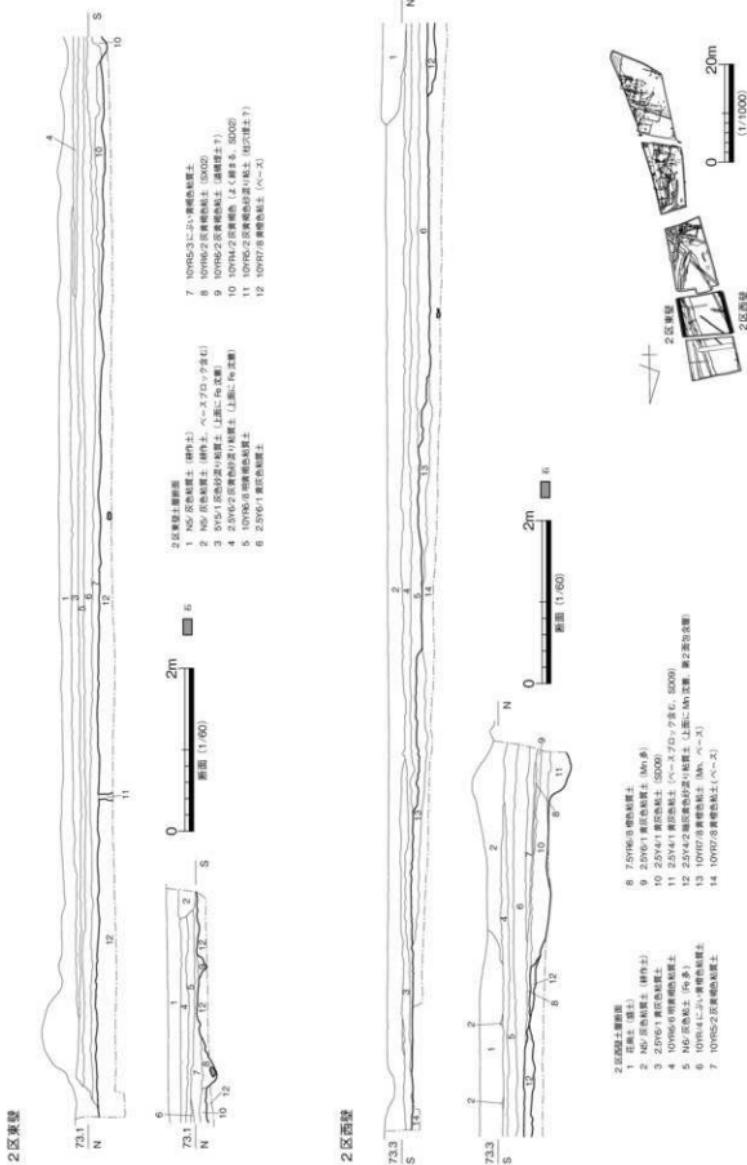
5区では、近世以降の土地区分により、南北に上下2段の平坦面に区分される。その区画は現在の土地割と異なり、東西軸は概ね北から72°西へ偏した方位となっていたようだ。中位段丘面に認められる条里型地割の方向とは異なり、おおよそ地形の傾斜面に平行ないし直交したものであった可能性が考えられる。南側では、造成土下に3～4層に細分される旧耕作土・床土層とみられる水平堆積層（第27図4～7層）が認められ、その下で第1遺構面のSX06やSX07等の遺構が検出された。また、中央部



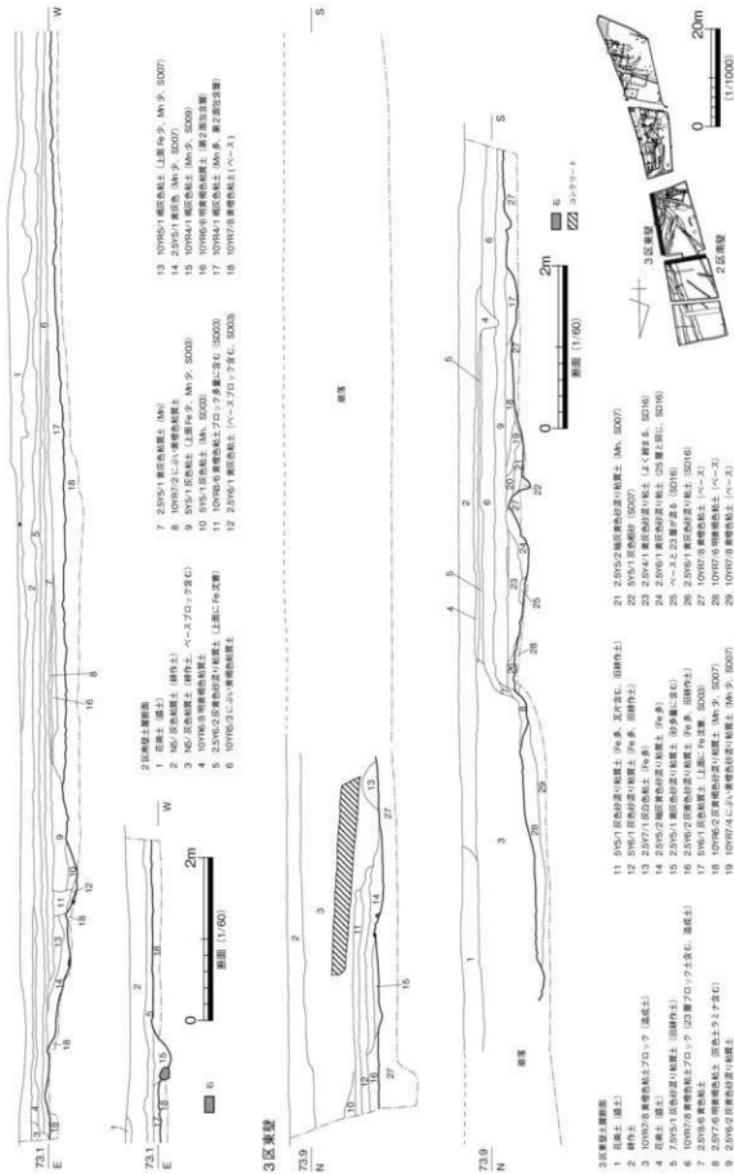
第20図 1区北壁・東壁・南壁断面図



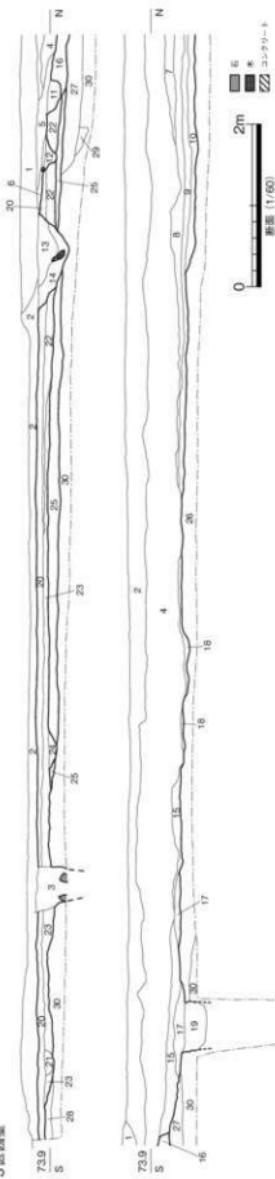
第21図 1区西壁・2区北壁・2区南壁・2区東壁・層面図



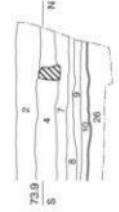
2区南壁



3区西壁



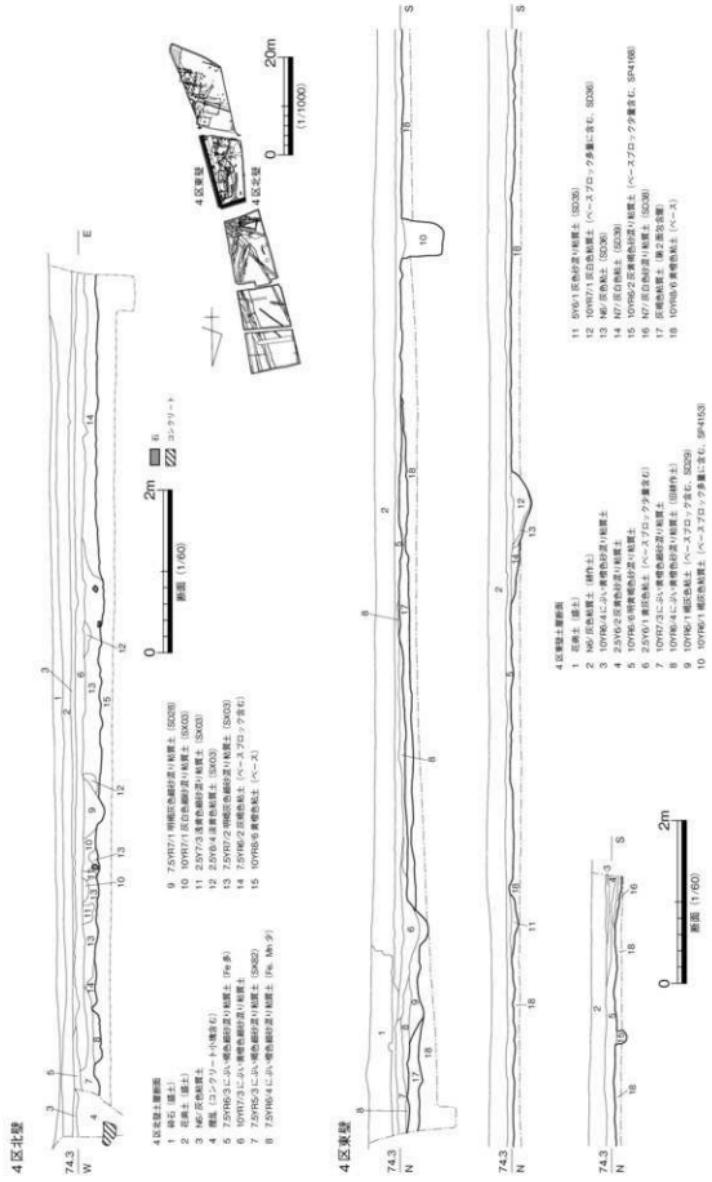
3区南壁



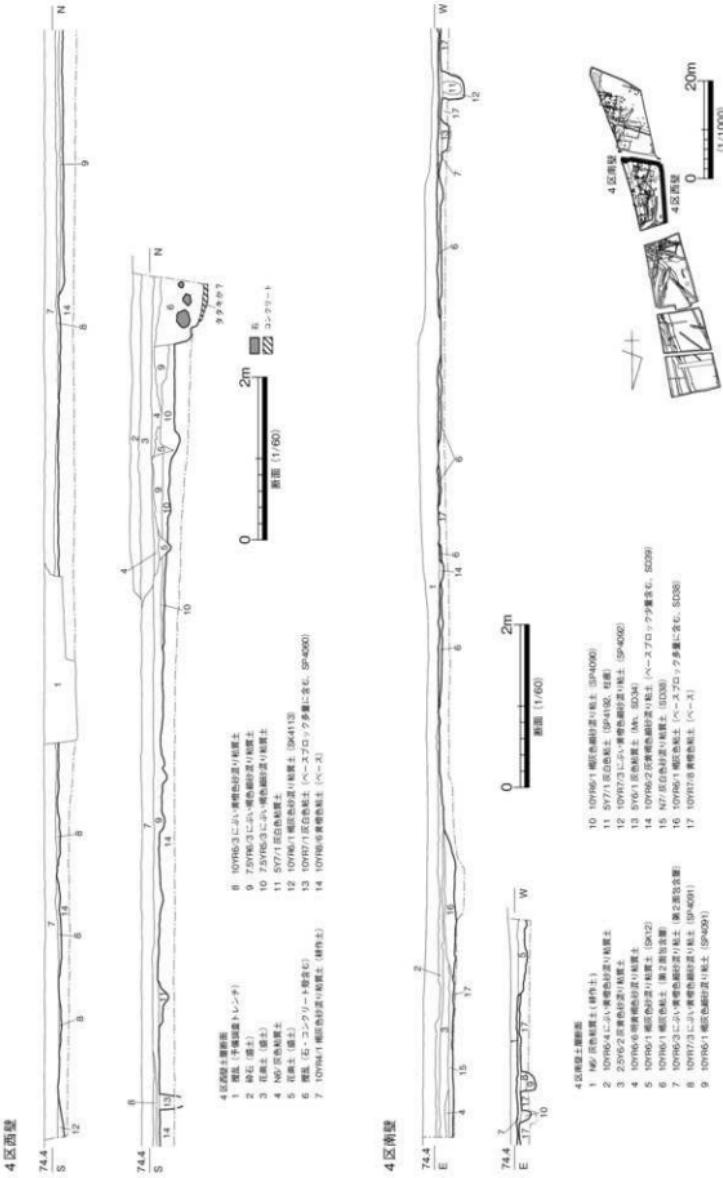
3区西壁

1. 砂質土 (砂質土)
2. 2.5m/4.1mの複数層の充満土 (砂質土)
3. ~2.7m/2.7mの充満土 (砂質土)
4. 2.5m/4.1mの複数層の充満土 (砂質土)
5. 5.8m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
6. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
7. 5.5m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
8. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
9. 8.8m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
10. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
11. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
12. 2.5m/5.1mの複数層の充満土 (砂質土)
13. 2.0m/2.0mの複数層の充満土 (砂質土)
14. 1.4m/1.4mの複数層の充満土 (砂質土)
15. 5.6m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
16. 2.5m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
17. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
18. 5.0m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
19. 2.5m/2.0mの複数層の充満土 (砂質土)
20. 2.5m/7.2mの複数層の充満土 (砂質土)
21. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
22. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
23. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
24. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
25. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
26. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
27. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
28. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
29. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
30. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)

1. 砂質土 (砂質土)
2. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
3. 1.4m/1.4mの複数層の充満土 (砂質土)
4. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
5. 2.0m/2.0mの複数層の充満土 (砂質土)
6. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
7. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
8. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
9. 8.8m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
10. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
11. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
12. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
13. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
14. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
15. 1.4m/1.4mの複数層の充満土 (砂質土)
16. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
17. 5.6m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
18. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
19. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
20. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
21. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
22. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
23. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
24. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
25. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
26. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
27. 2.5m/6.1mの複数層の充満土 (砂質土)
28. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
29. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)
30. 10.9m/1.8mの複数層の充満土 (砂質土)

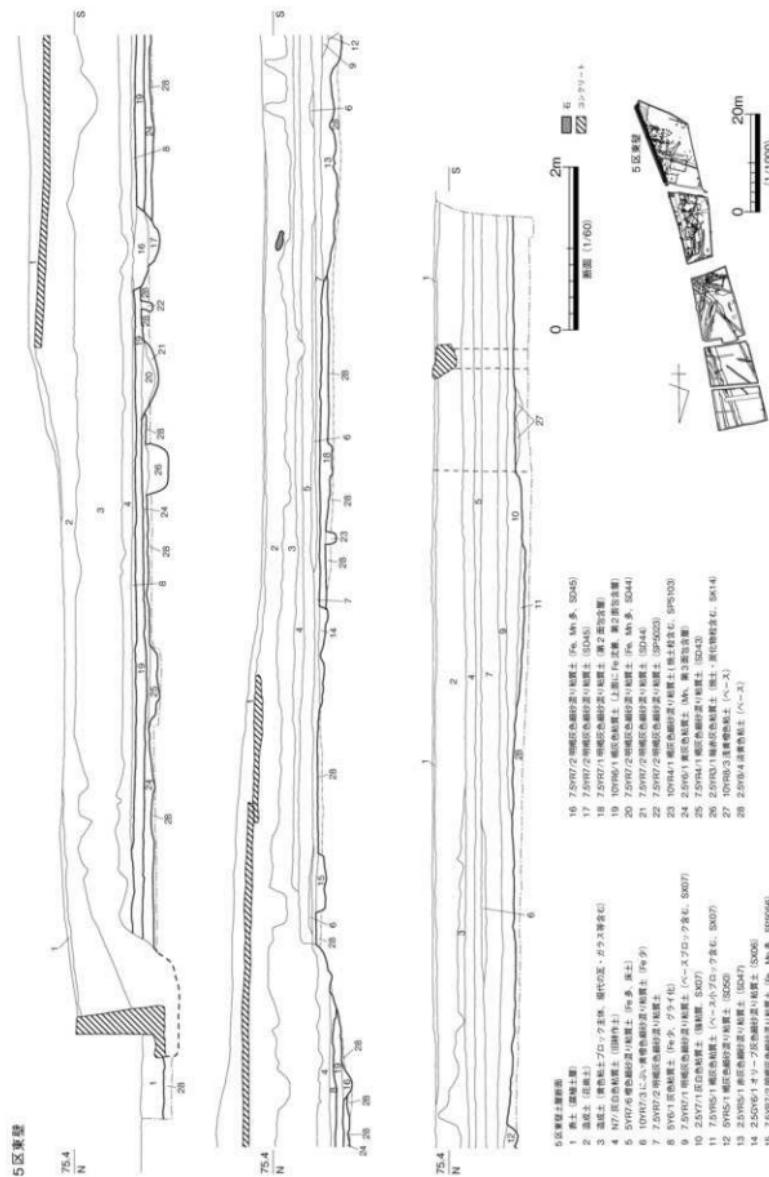


第25図 4区北壁・東壁土質断面図

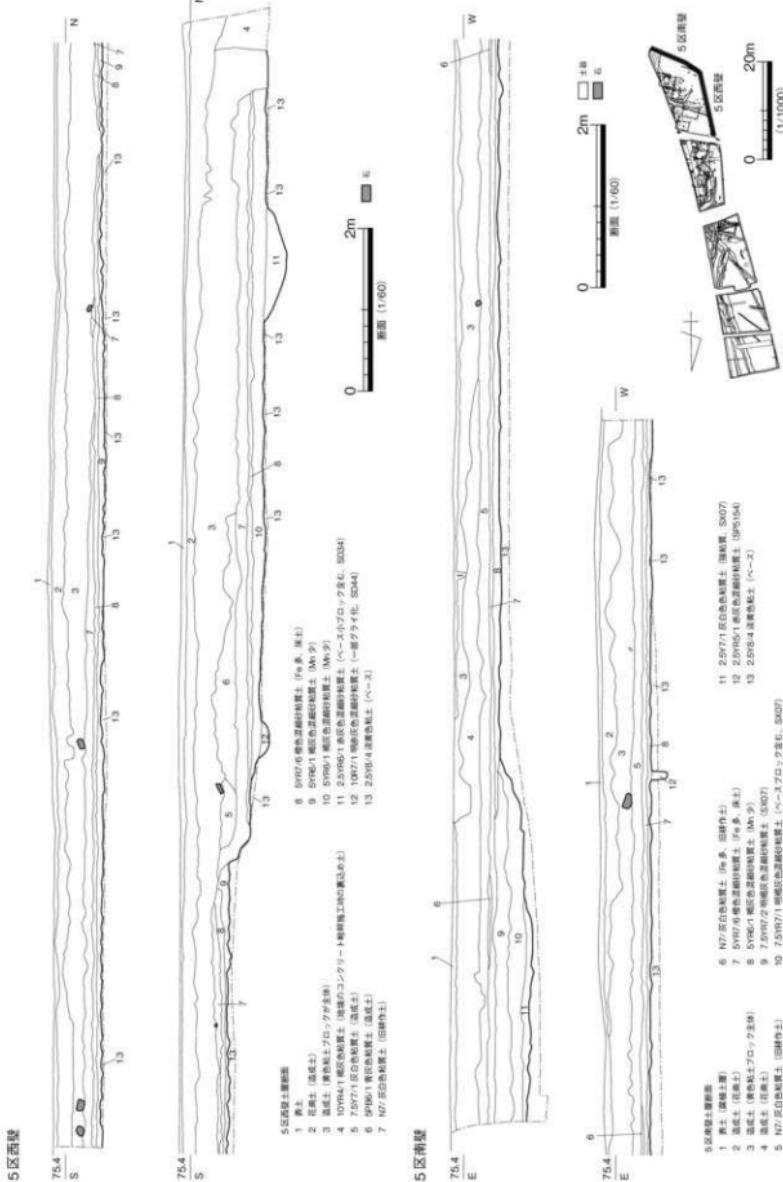


第26図 4区西壁・南壁・北壁断面図

5区東壁



第27図 5区東壁土層断面図



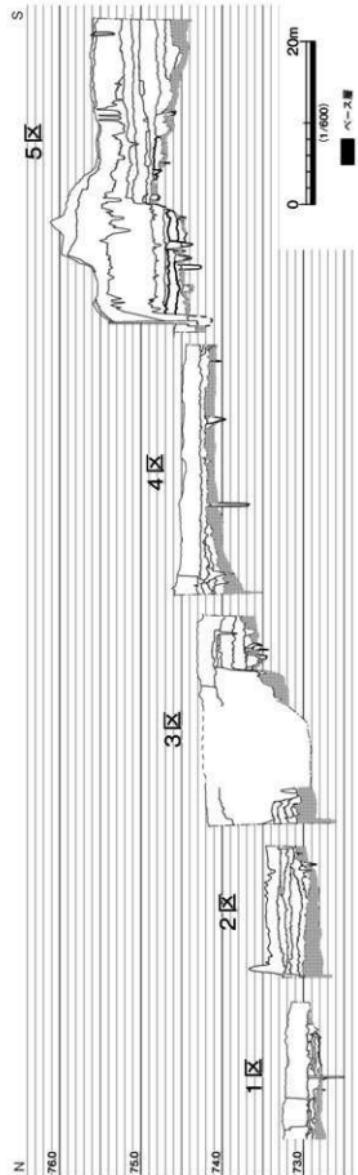
第28図 5区西壁・南壁土質断面図

付近はさらに10~15cm程度下げられ近世の耕作土の可能性がある明褐灰色細砂混粘質土(同図18層、第2面包含層)が水平堆積し、その下位で柱穴SP5109等の遺構を検出した。第2遺構面は、無遺物層と考えられる淡黄色粘土(同図28層)をベースとする。

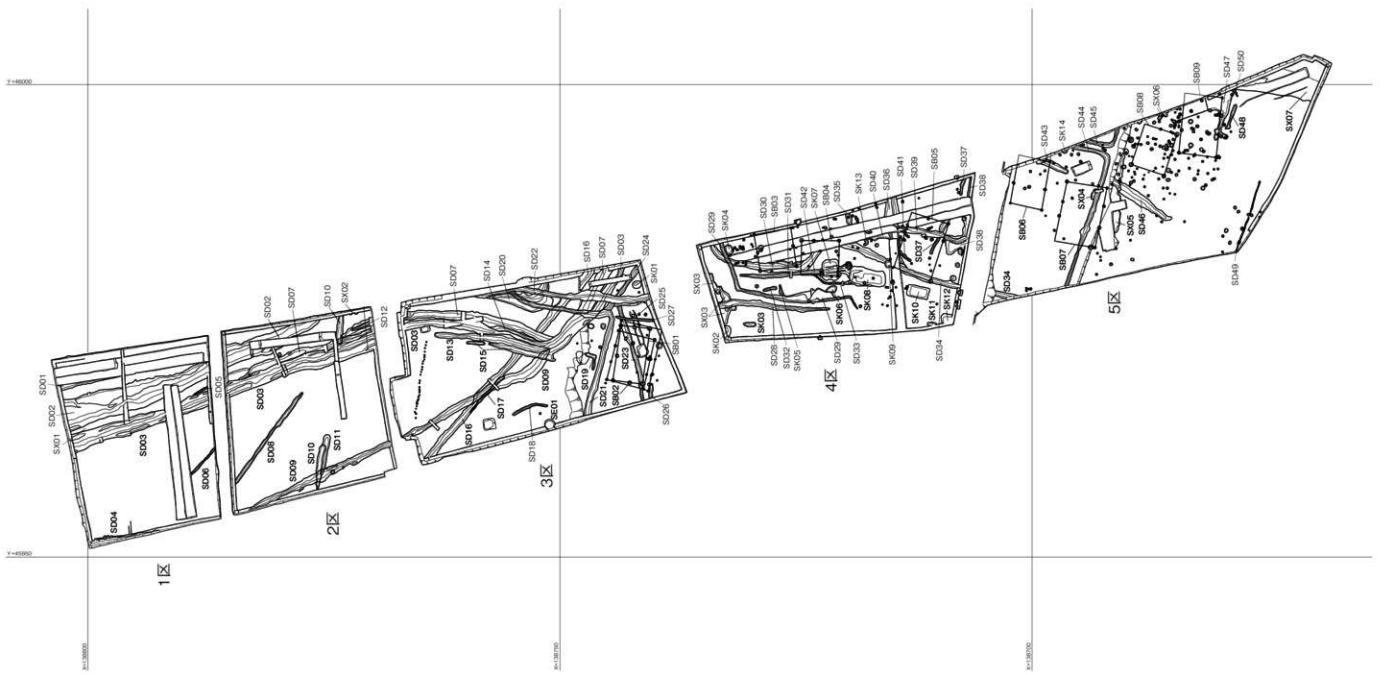
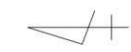
一方北側では、造成土下に2層に細分される旧耕作土等の水平堆積と確認し、その下面で褐灰色粘質土(同図19層)をベースにSD45南北溝(同図16・17層)が開削されていた。その灰色粘質土下では、SD45東西溝(同図16層)と、ほぼ同時期と考えられるSD47南北溝(同図20・21層)が開削され、一連の溝が包含層の上下面に分層されるという、層位的な矛盾が生じている。現状では、両溝が灰色粘質土上面から掘り込まれていたのか、その下面から掘り込まれていたのかを検証することが困難なため、調査時の記録を改変せず掲載する。その灰色粘質土下では、南半部と同様に、近世の耕作土と考えられる黄灰色粘質土(同図24層、第3面包含層)が堆積し、その下面でSD43やSK14等の遺構が、淡黄色粘土をベースとして掘り込まれていた。

本調査区では、基盤層上面まで重機で掘り下げて調査を行っており、数層に細分される包含層単位での遺物の取り上げは行えていない。重機による掘削時に基盤層上面に堆積した包含層中から出土した遺物が少量採集されており、器種不詳の弥生土器とみられる土器小片のほか、中世土師質土器足釜等の小片、近世陶器小片等が出土している。上述したように、近世の遺物は混入の可能性が高い。

第29図は、各調査区の東壁を連続して図示したもので、各調査区でのベース層の出現レベルを視覚的に表現したものである。この図からベース層のレベルは、5区中央部の標高74.85m前後をピークに、若干の起伏は認められるものの、概ね緩やかに北ないし南へ下っており、旧地形をある程度反映している可能性が考えられる。5区南半部は、遺跡東側を北へ延びる開析谷へと連続する斜面地であろう。しかし、図を細かく見ると、1区南端部や4区南半部では、現耕作土や床土層直下でベース層が検出されている。これらの範



第29図 調査区東壁断面図



第30図 池内古田道路渠構配図

縁は近年の圃場整備の影響を少なからず被っている可能性が考えられる。また、各調査区において、中世以前に遡る包含層は、窪地状の自然地形面上で部分的に検出されることはあっても、調査区全面を覆うものではない。基本的には、ベース層上面は近世以降と考えられる旧耕作土層の水平堆積に覆われており、近世段階で徐々に地形面の改変が連続的になされ、古い時期の堆積層や遺構はこうした開発行為により徐々に削奪・消滅していく可能性が考えられる。中・近世の遺構や旧耕作土層から、ローリングを受けた弥生時代の石錐や古代以前の須恵器片が少なからず出土することは、こうした近世あるいは中世以降の土地の改変により、消滅した当該期の遺跡が近接して所在した可能性を示唆するものと言えるだろう。

第3節 遺構・遺物

1. 中世

土坑

SK02（第31図）

4区北西隅部で検出した。遺構北半部は調査区外へ延長し、南半部のみ調査を行った。調査区北壁の土層（第25図）より、SX03より先行する可能性が考えられる。南北0.82m以上、東西1.13m以上で、平面形は隅丸方形ないし梢円形状を呈するとみられる。残存深は0.13mで、断面形は碗底状を呈する。埋土は褐色灰色細砂混り粘質土の単層であった。

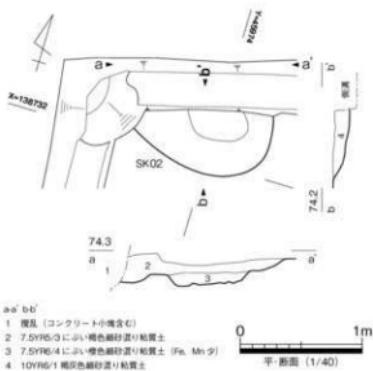
遺物は出土しておらず、詳細な時期決定の根拠を欠くが、SX03より先行することや埋土の特徴から、当該期の遺構として報告する。

溝

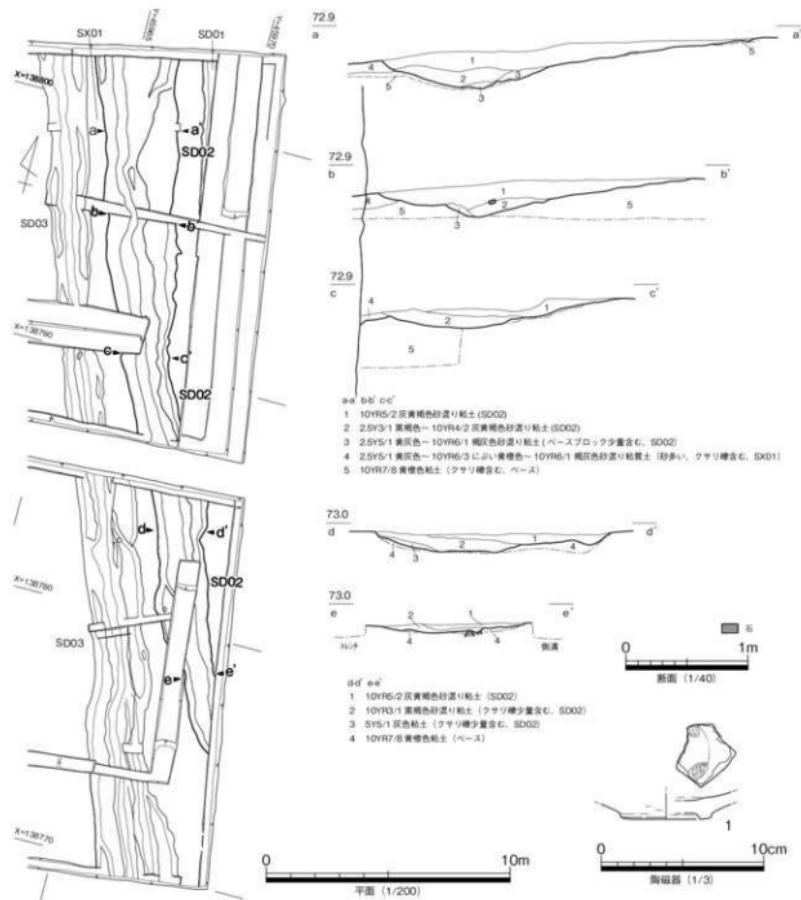
SD02（第32図）

1・2区東端部付近を南北に配された僅かに蛇行する南北溝で、第2面包含層上面より掘り込まれる。延長28.1mを調査した。流路方向は、概ねN 17.82°～21.03°Wである。検出面幅1.27～3.34mで、北に向けて幅広となる。残存深0.03～0.2mで、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、北端で72.32m前後、南端で72.90m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は2～3層に細分され、黒～灰色系の粘土が水平堆積し、流水下の堆積層は認められず、また最下層には溝東肩部を中心とする壁面の崩落に伴うとみられるベース層ブロック土が含まれることから、比較的長期間オープンな状態で自然埋没した可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外は器種不詳の土器小片や土師質土器足釜・擂鉢、瓦質土器の小片が少量出土し



第31図 SK02 平・断面図



第32図 SD02 平・断面・出土遺物実測図

たのみである。1は肥前系灰釉皿の底部片。見込みに砂目積みの目跡2ヶ所を認め、残存部から高台内には兜巾はみられない可能性が高く、こうした特徴から17世紀前半位に位置付けられる。近世に位置付けられる資料はこの1点のみであり、後述するSD03と並走し、出土量は乏しいものの、灰釉皿を除く出土遺物が14～15世紀代に位置付けられるものである点を考慮すると、本資料は混入の可能性が高いと判断される。また、後述するように、SD03の東側にSD03の後継溝SD20が新たに開削される点を踏まえるなら、延長約20mが調査区外となるため断定は困難ながら、埋土は比較的近似していることもあり、本溝とSD20が一連の遺構である可能性も考えられる。

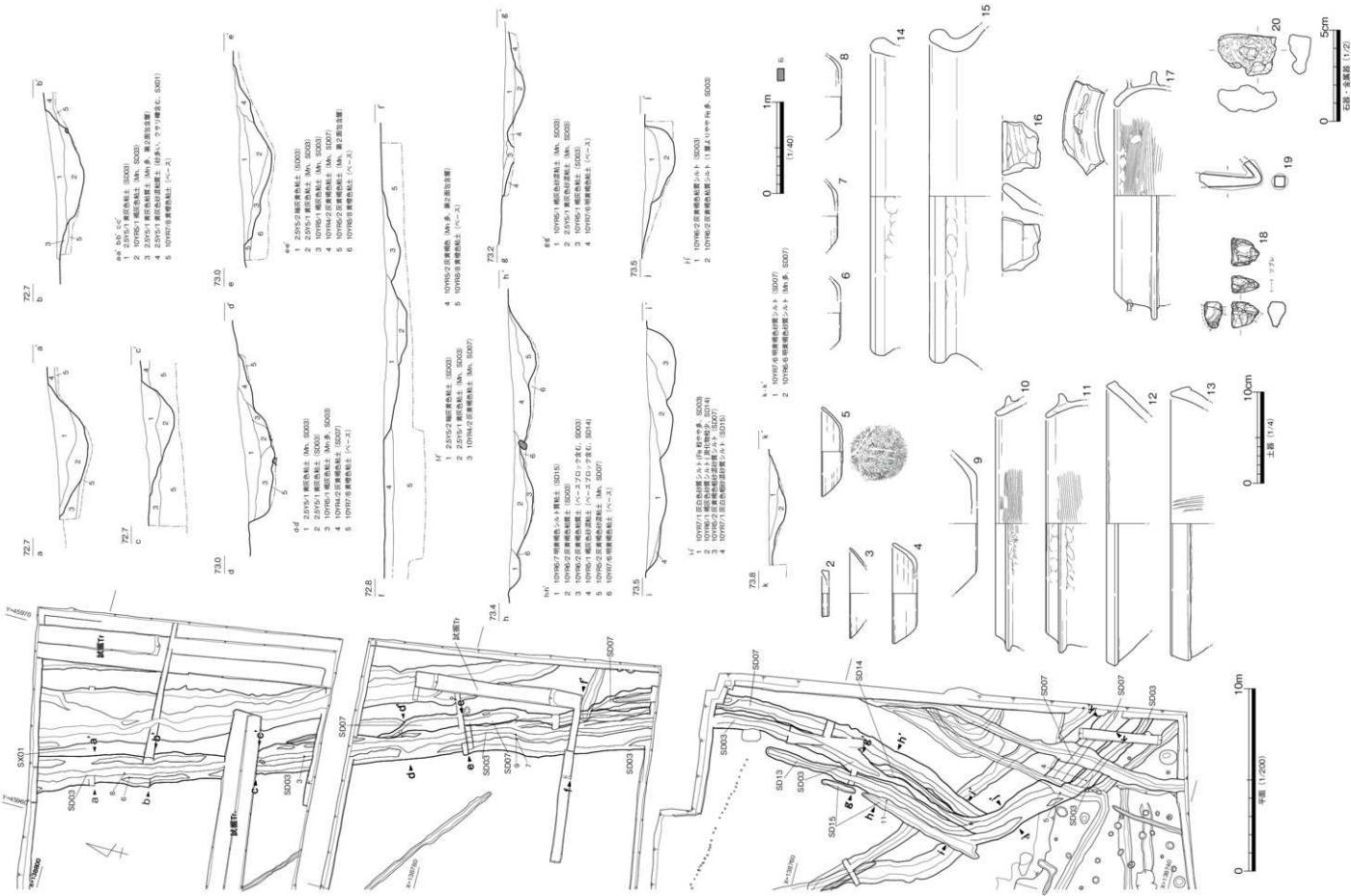


図33 図 SD03・SD07・SD13・SD14・断面・出土遺物実測図

SD03・SD07・SD13・SD14（第33図）

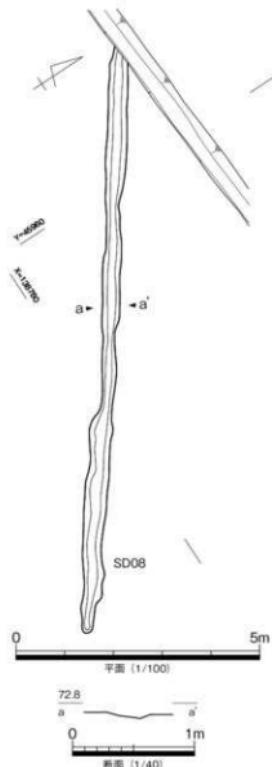
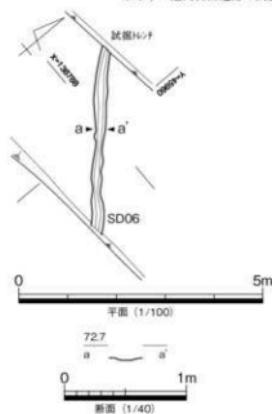
SD03は、1～3区東半部付近を南北に配された溝で、1・2区は直線状に、3区ではくの字状に大きくクランクして配される。また、3区で東側にSD13が分岐する。第2面包含層（例えば第21図2区北壁20層）上面より掘り込まれる。重複関係より、SD15・SD21・SD22より先行し、SD07・SD09・SD14より後出する。SD07・SD14とは、南北溝・東西溝の各流路方向が概ね一致し、溝の規模も相互に近似していることから、本溝は両溝の改修溝の可能性を考える。総延長63.8mを調査した。流路方向は、1・2区で概ねN 19.38°W、3区北半でN 14.95°E、同南半でN 38.06°Wにそれぞれ配される。検出面幅0.51～1.94mで、場所により差異が大きいが、概ね北に向けて幅広となる。残存深0.10～0.38mで、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。底面の標高は、北端で71.97m前後、南端で73.60m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は2層に細分され、いずれも灰色系粘土が水平堆積していた。

遺構は、複数度の改修を経て、流路を微妙に変更しながら維持・管理されていた灌漑水路と考えられ、遺跡周辺が耕作地として開発されていた可能性を示すと共に、流下方向より予備調査によって明らかとなつたトレンチ周辺の開析谷へ、排水していた可能性も考えられる。

遺物は、図示した以外は器種不詳の土器小片や土師質土器皿・擂鉢・足釜、瓦質土器擂鉢・羽釜・甕、亀山焼甕、備前焼の小片が少量出土したのみである。

2は土師質土器皿。3・4・5は同杯。いずれも内外面のマメツが顕著である。5の底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を認める。9は須恵器の底部片。全体に器表面のハクリが顕著で、調整等を確認できない。器形等から、束播系捏鉢の可能性がある。10・11は土師質土器足釜の口縁部片。いずれも鋸部付加法とみられる。13世紀代に位置付けられる。12は土師質土器鉢の口縁部と見える。内外面マメツが顕著である。13は瓦質土器擂鉢。内面には3条/cmで、4条以上/単位の粗いスリメを口縁部端まで施す。14・15は土師質土器甕の口縁部片。口縁部は玉縁状を呈する。14世紀後半か。16は土師質土器鍋。17は瓦質土器羽釜。口縁部に横方向の外耳を貼付する。16とともに近世資料であり、混入品と考える。

18は、チャート製の火打石の碎片である。石材や色調より徳島県阿南市大田井産の可能性が高い。同産のチャート製火打石に



第34図 SD06・SD08平・断面図

については、中世後半段階より本県へも流通していることが明らかとなっている（藏本2019）が、上記したように近世の遺物が出土していることから、本資料も混入の可能性も考えられる。19は約6mm角の角釘である。下半部が強く折れ曲がり、頭部、下端部共に折損する。

SD07は、2区南西部から3区西半部において、第2面包含層上面で検出した南北溝で、既述したように、SD03の先行溝と考える。検出面幅0.78m以上で、場所により差異を認める。残存深0.06~0.30mで、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。底面の標高は、北端で7284m前後、南端で7350m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は、単層ないし2層に細分され、灰色系の砂質シルトないし砂混り粘土が堆積しており、上位層中にはベース層のブロック土が含まれることから、最終的には人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師質土器小片が少量出土したのみである。6・7は土師質土器皿、8は同杯である。7の底部は回転ヘラ切りで、他の2点はマメツのため不明。20は、楕円形漆の可能性がある。調査時に右半分を折損しているようで、破断面は黒褐色を呈する。上下面は残存し、気泡等による凹凸を顕著に認める。

SD14は、3区中央部、SD03の屈曲部北側で、同溝とSD07とに挟まれるように検出した南北溝である。溝の重複関係より、SD03より先行し、SD07より後出す。延長約6.4mを検出したのみで、南北両端はSD03に切られ、その西及び南側で延長部が確認されないことから、SD07より後出すSD03の先行溝と考える。最大幅0.87m以上、残存深0.3m前後、断面形は皿状を呈し、埋土は褐灰色砂質粘土の単層であった。各溝の土層図（第33図）より、SD03は徐々に幅を広げながら、深さは浅く掘り込まれる傾向にある。おそらくは流水量の微妙な調整等がその背景に予想されるが、溝全体を調査したものではないため、可能性を指摘するにとどめる。

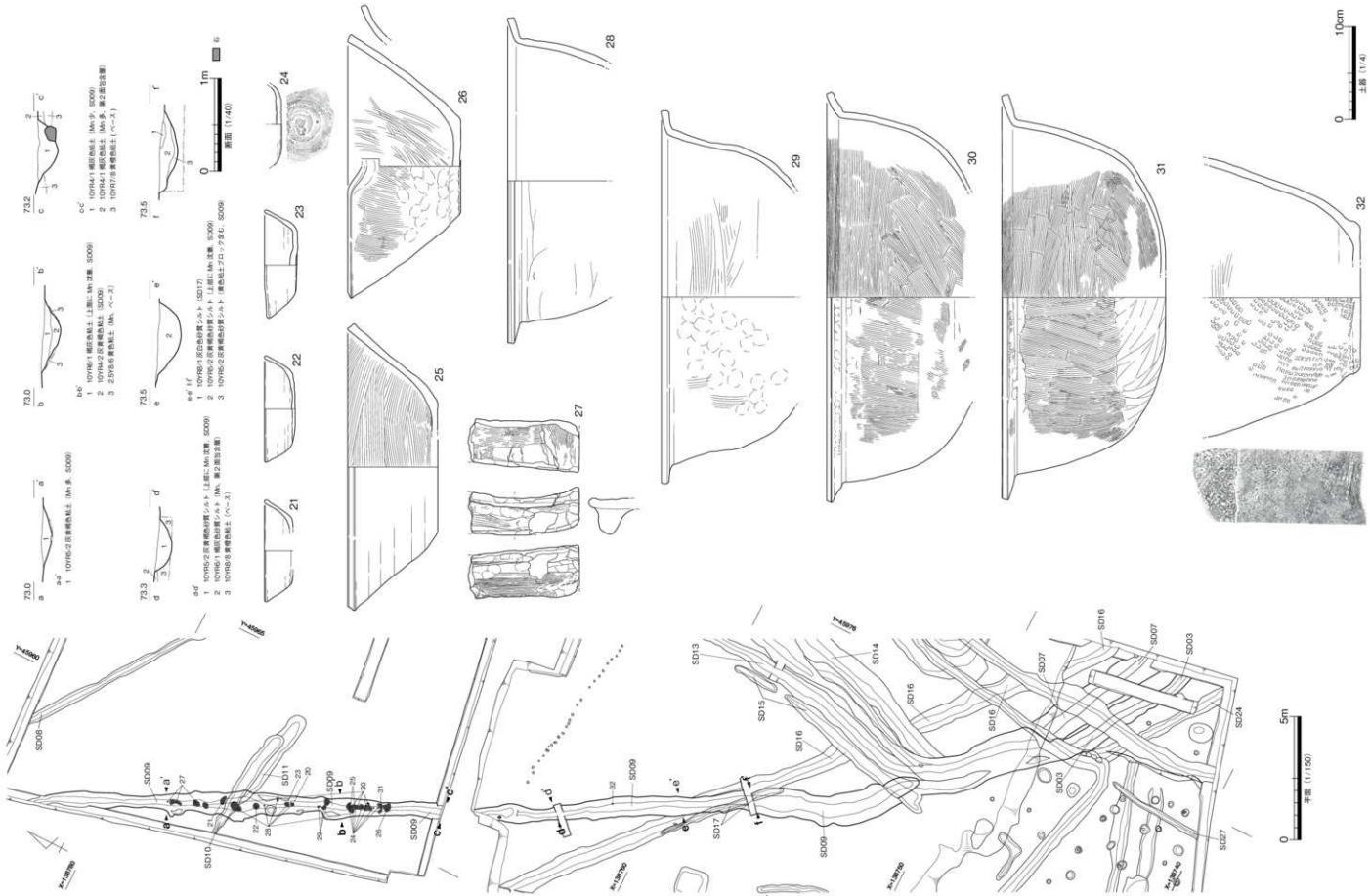
遺物は、土師質土器皿もしくは杯とみられる小片や器種不詳の須恵器小片が少量出土したのみで、図化した資料はない。

以上、各溝を整理すると、まずSD07が開削され、次にSD14、最後にSD03へと改修されたと考えられる。SD03からは、まとまった量の遺物が出土したが、SD07・SD14の遺物は乏しい。最終改修溝であるSD03からは、13世紀末~15世紀前葉に位置付けられる遺物が出土しており、おそらくは本溝群の使用・埋没時期のおおよその時期幅を示していることが想定される。

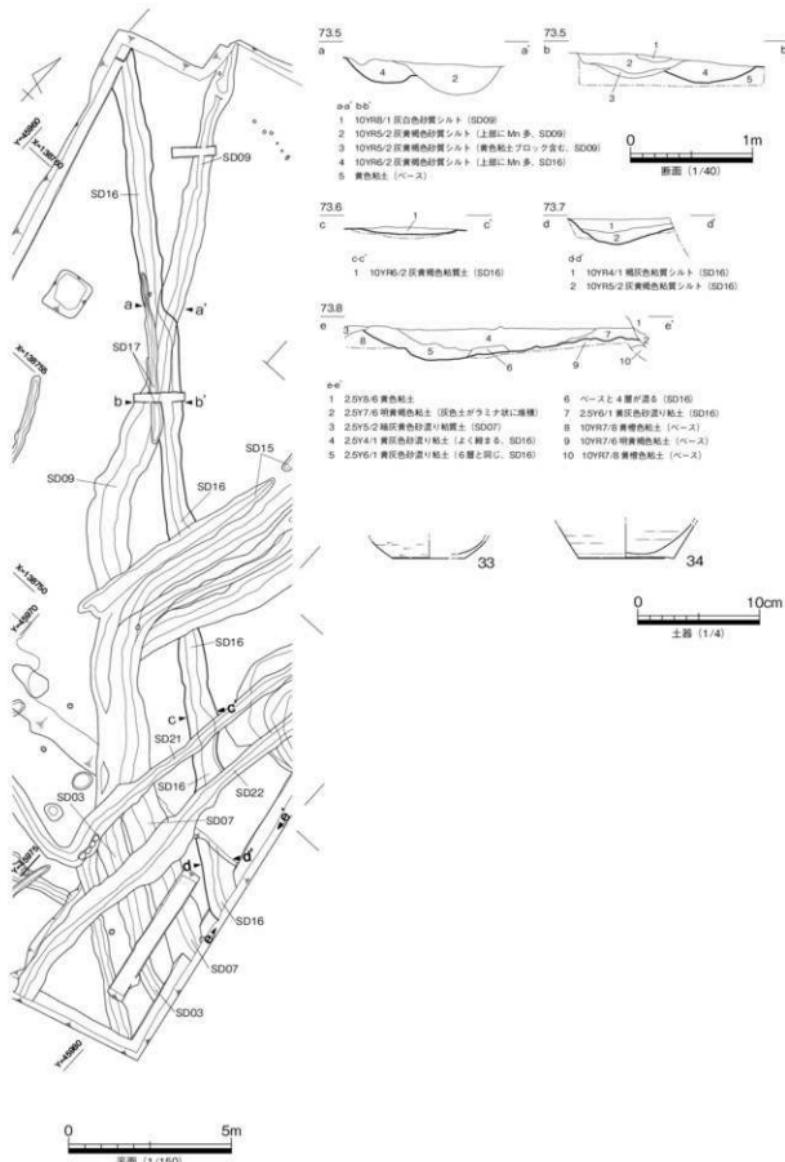
SD06（第34図）

1区南部で検出した南北直線溝である。北端は試掘トレーニングにより削除され、それ以北では延長は確認されず、南端は2区で延長部分は確認されなかつたため、検出長3.7mを調査したに過ぎない。流路方向N 46.56°Wに配される。検出面幅0.27m前後。残存深0.05m前後と浅く、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、北端で72.54m、南端で72.59mをそれぞれ測り、僅かだが高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土に関する記録はない。

遺物は出土していないため、時期を特定することは困難である。後述する2区SD08や3区SD16と概ね流路方向を共有することから、同時期に併存したか、あるいは位置関係から既述したSD07やSD03等より西へ派生する枝溝となる可能性が考えられ、当該期の遺構として位置付ける。



第35図 SD09 平・断面・出土遺物実測図



第36図 SD16 平・断面・出土遺物実測図

SD08 (第34図)

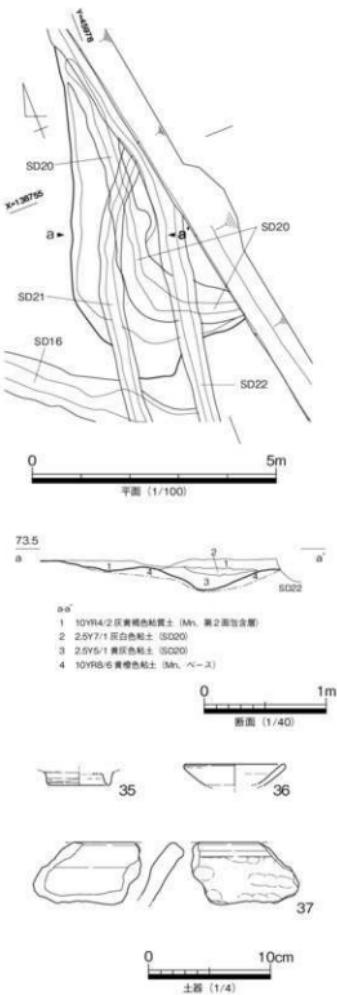
2区北西部で検出した南北直線溝である。北端は1区で延長が確認されず、南端は調査区内で途切れる。延長11.88mを調査した。流路方向N 53.37mWで、上述したSD06と概ね平行する。検出面幅0.36m前後、残存深0.04m前後で、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、北端で72.68m前後、南端で72.73m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は、灰色粘質土の単層であった。

遺物は、土師質器鍋等の小片が数点出土したのみである。出土遺物から時期を特定することは困難だが、SD06と同様な理由から、14世紀代を上限とする時期と考えられる。なお、本溝もSD06同様に、SD07やSD03等の南北溝より西へ派生する枝溝となる可能性が考えられる。

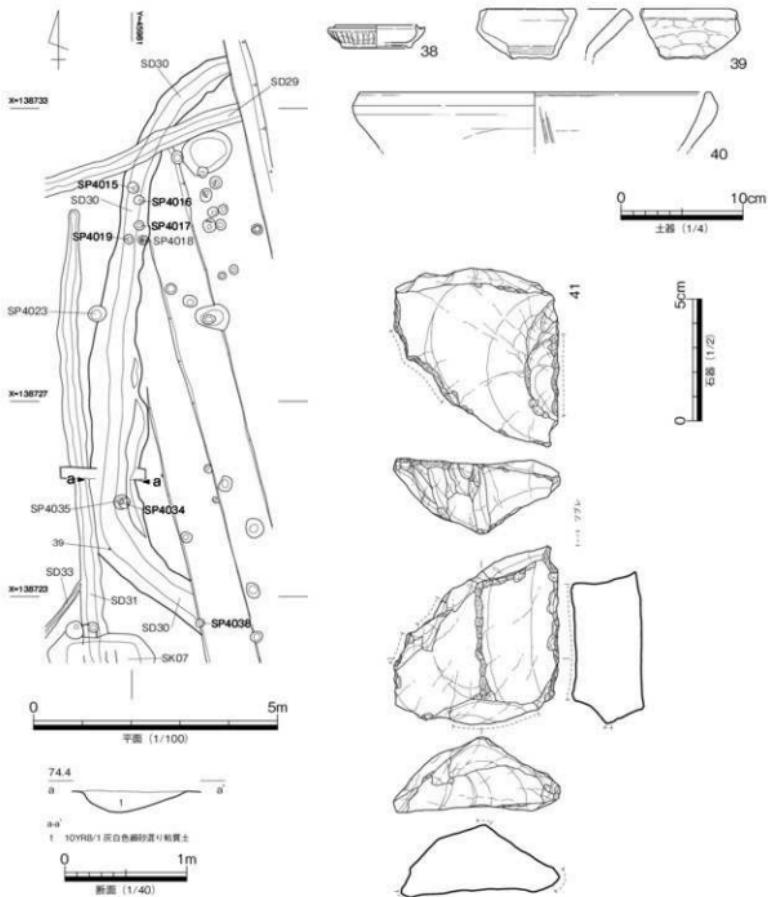
SD09 (第35図)

2区西部から3区中央部にかけて、第2面包含層上面で検出した南北直線溝で、南端部は緩やかに屈曲し、SD15に切られ途切れる。屈曲部以東は、上述したSD03南端部の流路方向と概ね合致し延長部が重複することから、SD03の改修前の流路であった可能性が高いと考える。検出長35.8mを調査した。SD10・SD11・SD16・SD17と重複し、SD16より後出する以外は、そのいずれよりも先行する。流路方向N 26.41°Wに配される。検出面幅0.43～1.30m、残存深0.12～0.30mで、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。底面の標高は、北端で72.63m前後、南端で73.20m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は2層に細分され、褐色系の粘土ないし粘質シルトが堆積していた。

遺物は、コンテナ2箱程度と、本遺跡で確認された中世の遺構の中では、やや出土量が多い。21～24は土師質器杯。21の口縁部内面の一部には煤が付着しており、灯明具として使用された可能性がある。25・26は瓦質器鉢。いずれも焼成はややあまく、内面を中心土師質に近い。26は片口を付す。28～31は土師質器鍋。30・31は全形のはば1/4程度の破片がまとまって出土した。いずれも外面を中心に、使用時の煤や炭化物が付着する。27は、土師器窓の焚口部の底部小片。焚口部に接して突帯を貼付する。内面や破断面の粘土接合痕より、まず体



第37図 SD20 平・断面・出土遺物実測図



第38図 SD30 平・断面・出土遺物実測図

部を幅2~3cmの粘土紐積み上げにより成形した後、突帯を貼付したとみられる。32は瓦質土器窓で、やや軟質である。体部外面には格子タタキを施す。岡山県の亀山製品と考えられ、搬入品である。

やや時期幅を認める遺物も含まれるが、概ね最終埋没は14世紀前半頃を想定する。

SD16（第36図）

3区北西隅から南東隅に横断する直線溝で、延長26.2mを調査した。包含層上面より掘り込まれる。重複関係より、SD03・SD07・SD09・SD14・SD15・SD17・SD20より先行する。流路方向N 48.77°Wと、

上述したSD06・SD08と概ね平行する。検出面幅0.79～0.88m、残存深0.13～0.20mで、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、北端で73.16m前後、南端で73.40m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は褐色系粘質シルトが堆積し、1～2層に細分された。

遺物は、土師質土器鍋等の小片数点のほか、図示した軟質土器土瓶底部片や大谷焼瓶片が出土したが、遺構の重複関係を考慮すると、出土した近世資料は混入の可能性が高いと考える。

33は軟質施釉陶器の行平鍋の底部小片とみられる。外面には煤が付着する。34は徳島県大谷焼の瓶底部片。体部外面にのみ鉄軸を施す。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を加える。いずれも近世に位置付けられる混入資料である。既述したSD09より先行することから、13世紀末～14世紀前葉を中心とした時期に開削・埋没した可能性を想定する。

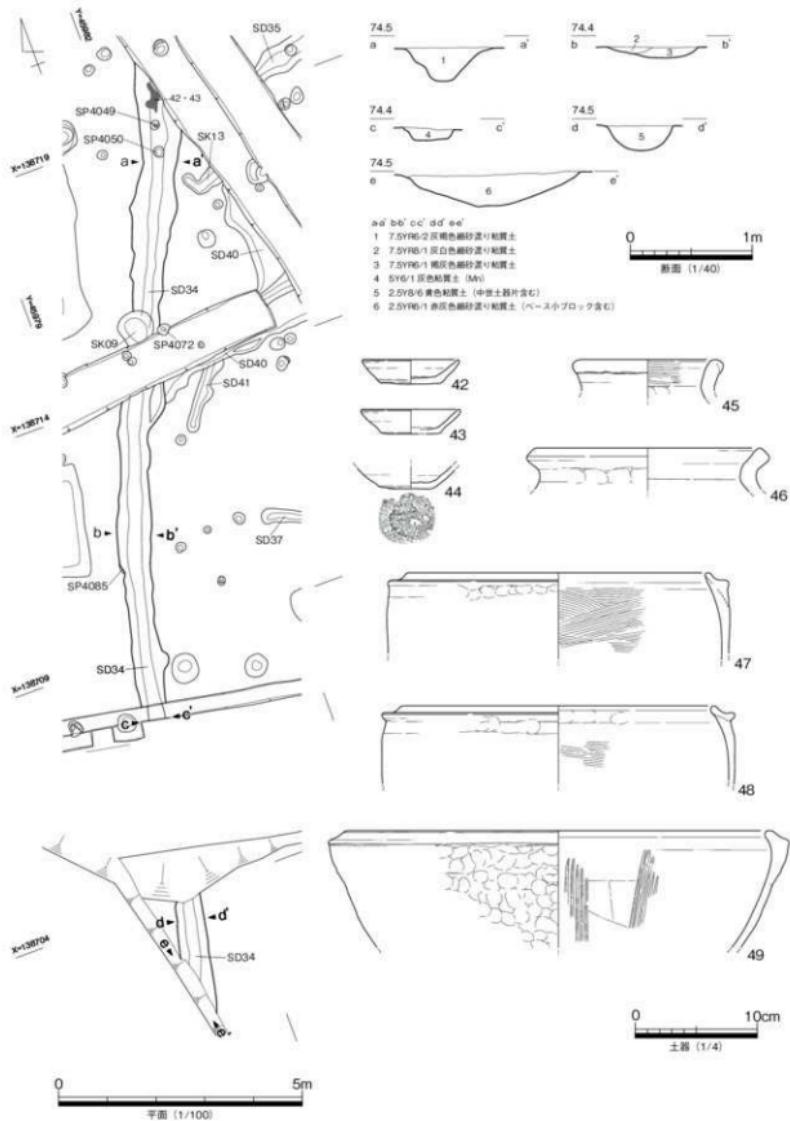
SD20（第37図）

3区中央東端部で検出した、L字状に屈曲した溝である。重複関係より、後述する近世溝SD21とSD22より先行する。流路南北両端は調査区外へ延長し、約7.1mを調査したにとどまる。調査区東壁面が本遺構周辺で図化以前に崩落したため、包含層等との層位的な関係は不明だが、掲載した土層断面図(a-a')では第2面包含層下面より掘り込まれていたとされる。しかしながら、平面図に示された本遺構の掘り方は、明らかにこの第2面包含層の堆積範囲を含んだものであり、平面図と断面図の調査記録は整合しない。また、断面図に示された第2面包含層は、溝の西側部分と溝の上面とで、その底面の標高値が僅かながら異なり、溝の西側部分がやや深い位置にある。後述する出土遺物の年代や周辺の他の遺構との関係を踏まえるなら、本遺構は第2面包含層上面より掘り込まれていたはずであり、上述した包含層底面の標高値の差は、溝の西側部分と溝の上面の包含層とが、別の性格の堆積物である可能性を示唆しているものと思われる。つまり、溝上面の包含層は溝の埋土をそのうちに含み、溝は第2面包含層上面より掘り込まれていたと理解するのが妥当だと考える。以上のように理解した場合、本溝は北半南北溝の流路方向は概ねN 52.7°Eに配され、検出面幅1.2m以上、残存深0.25m前後で、断面形は皿状を呈するとみられる。流下方向は不明である。埋土は、灰色系粘質土ないし粘土が主にレンズ状に堆積していた。なお、掲載した挿図については、再検証が可能となるよう、調査時の記録のまま掲載する。

遺物は、図示した以外には器種不詳の土師質土器小片等が少量出土したのみである。35は、釉調より龍泉窯系青磁碗の高台部小片と考える。高台疊付と高台内は露胎。体部を欠損しており、細別分類は不明。36は土師質土器皿。器表面はハクリが顕著なため、調整は不詳である。37は土師質土器鍋の口縁部片。外面には使用時の煤が付着する。35や36より、15世紀代に位置付けられ、37は混入の可能性を考える。なお位置関係より、既述したSD03との関係が想定される。調査範囲が限られるため、断定するには至らないが、出土遺物よりSD03に後出し、SD03の用途を継承する灌漑水路の可能性を想定し、その検証は周辺部の今後の調査に期待したい。

SD30（第38図）

4区北東部をコの字状に開むように検出した溝である。調査区東壁の土層図（第25図）では、後述するSD29と同一層として分層されており、平面図の記録と整合しない。いずれにしろ包含層上面より掘り込まれる。北側東西溝の東端は調査区外へ延長し、南側東西溝東端は試掘トレンチに削奪され、トレンチ以東で延長部が確認されなかったことから、再度屈曲してSD34と一連の遺構となる可能性も考



第39図 SD34 平・断面・出土遺物実測図

えられるが、調査時の所見及び、溝の断面形状や埋土等から、別の遺構として報告する。延長12.8mを調査した。南北溝の流路方向N 538°Eとほぼ正方位に近く配される。検出面幅0.6~1.1m、残存深0.2m前後で、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、南側東西溝東端で74.15m前後、北側東西溝東端で73.95m前後をそれぞれ測り、概ね北へ流下していたと考えられる。埋土は灰白色粘質土の単層であった。

遺物は図示した以外に、土師質土器足釜、炭化材等の小片が少量出土した。**38**は印籠蓋造の青白磁合子の身の破片。高台周辺は無軸。**39**は土師質土器鍋の口縁部小片。外面には煤が付着する。**40**は瓦質土器擂鉢の口縁部片。内面に2条以上/単位のスリメを認める。**41**はサヌカイト製の火打石。剥離面は黒色を呈して埋没後の風化等は乏しく、稜線部分に多数の敲打痕が施されることから火打石とした。

本溝は、上述した遺構の規模や出土遺物より、14世紀中葉を前後する時期に機能・埋没した可能性を想定する。

SD34（第39図）

4区南半部から5区北西部にかけて、ベース層上面で検出した南北直線溝で、既述したように北端は試掘トレンチにより削奪され、トレンチ以東で延長は確認されていない。検出長18.0mを調査した。やや西に湾曲するものの、流路方向は概ねN 18.02°Eに配される。検出面幅0.5~0.9m、残存深0.1~0.3mで、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。底面の標高は、南端で74.25m前後、北端で74.05m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は1~2層に細分され、灰色ないし黄色系粘質土が堆積していた。

遺物は、図示した以外に器種不詳の須恵器や土師質土器、備前焼壺、炭化材の小片等が少量出土した。**42~44**は土師質土器皿。いずれもマツガが顯著で、調整等の不明な資料が多い。**44**の底部は回転ヘラ切りである。**45**は備前焼壺の口縁部片。口縁部は玉縁状に小さく肥厚する。乗岡編年中世5期前後か。**46**は土師質土器甕の口縁部片である。口縁部はやや玉縁状に肥厚する。**47~48**は同足釜。体部外面には使用時の煤が付着する。いずれも口縁部は、一体接合法とみられる。**49**は同擂鉢。体部内面には1單位5条のスリメを施し、小片のため図示していないが片口を有する。

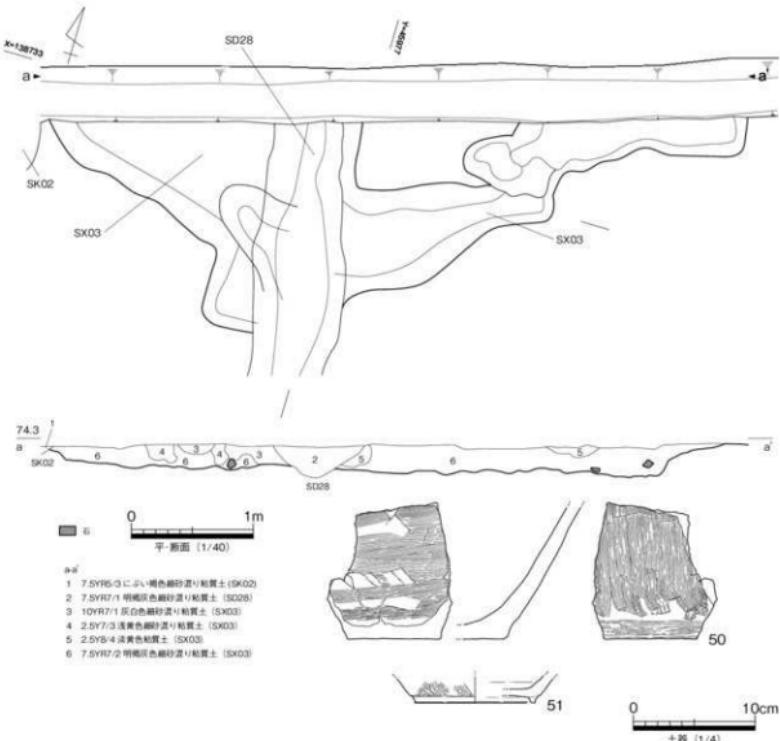
出土遺物にはやや時期幅を認めるが、土師質土器皿に糸切り底のものが含まれず、肥前系陶磁器類も出土していないことから、16世紀後葉の開削・埋没の可能性を想定する。

性格不明遺構

SX01（付図、第20図参照）

1区北端、SD03とSD02の間で検出された浅い落ち込みである。遺構南端部についての記録がなく平面プランは不明だが、残存深は調査区北壁（第20図28層）で0.2m前後を測る。埋土は灰黄褐色砂混り粘質土の単層であった。同図で、灰黄褐色砂質土（同図29層）等の第2面包含層がSD03の東側に堆積し、そのSD03の西側にSX01が所在することや、包含層とSX01埋土の色調等が近似することから、SX01はSD03東側に堆積する包含層の延長の可能性が高いと考える。あるいは、SD03の先行溝SD07の埋土の一部である可能性も残る。

遺物が出土していないため、詳細な堆積時期を特定することは困難であるが、SD03より先行することから、13世紀代以前であることは確実だが、詳細な時期は不詳である。

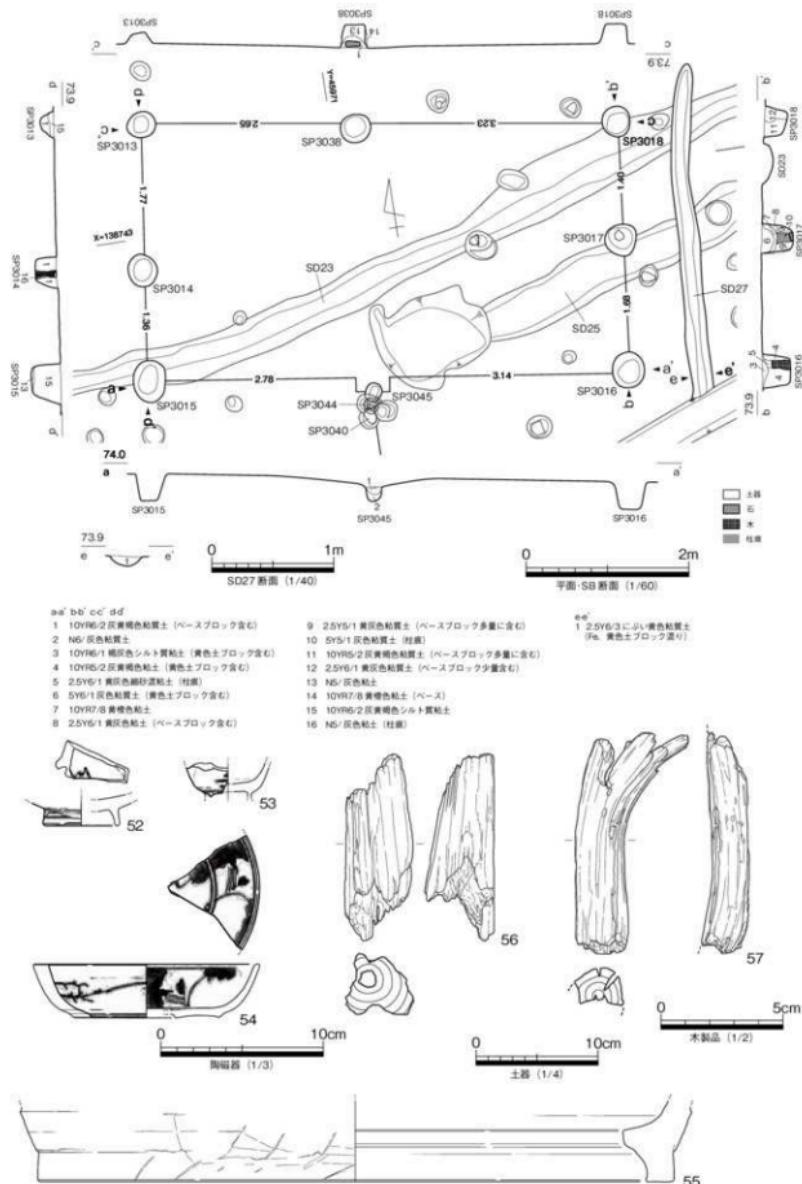


第40図 SX03 平・断面・出土遺物実測図

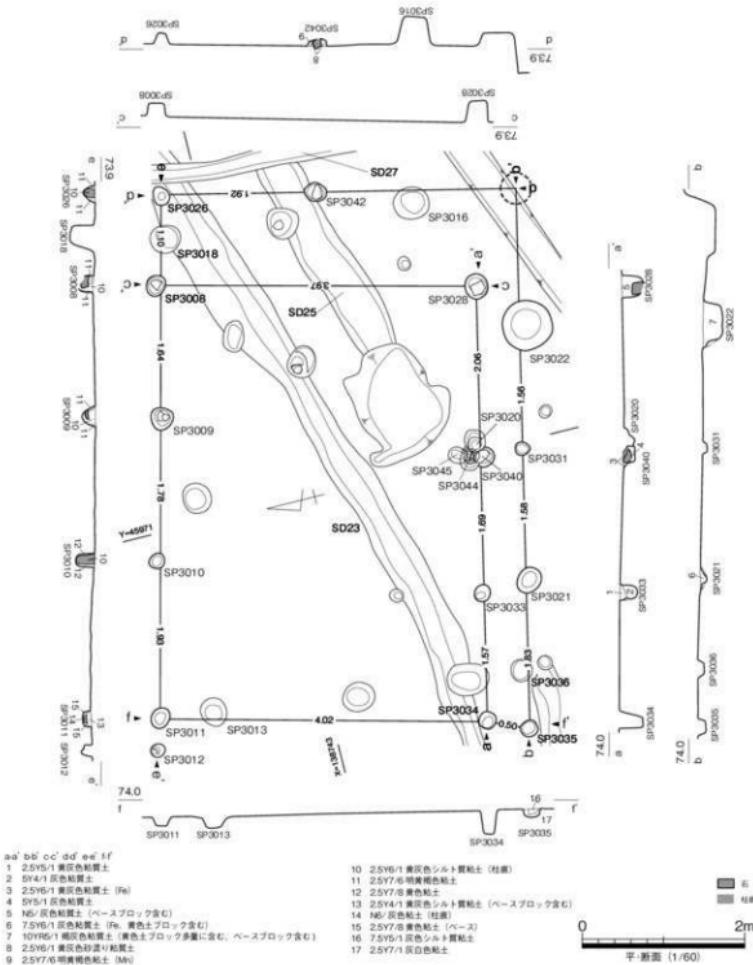
SX03 (第40図)

4区北端部、第2面包含層上面で東西に検出した溝状の落ち込みである。調査時には東西に重複する2基の遺構の可能性を想定していたが、北壁の土層図(第25図)より、一連の遺構と判断した。重複関係より、SD28やSK02より先行する。平面形は不定形な環状を呈するが、上述したように調査区北壁の土層図では、東西5.5m以上の連続する堆積層が記録され、平面プランとは合致しない部分がある。同図では、残存深0.25m前後で、断面形は底面が平坦な整った逆台形状を呈する。埋土は4層(第40図)に細分されるが、上位2層(同図3・4層)は、SD28の西側部分にのみ堆積が認められ、本遺構の主要な埋土である6層と色調等が大きく異なり、またその上面より掘り込まれていることから、別の遺構の重複の可能性も考えられる。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師質土器の小片1点とサヌカイトチップ1点が出土したのみである。50は備前焼壺の底部片。重複するSD28出土資料と接合したが、本来は本遺構に伴う資料と考える。須恵質焼成であり、14世紀前半までに位置付けられる。51は須恵器壺底部片。体部外面は格子タタキ

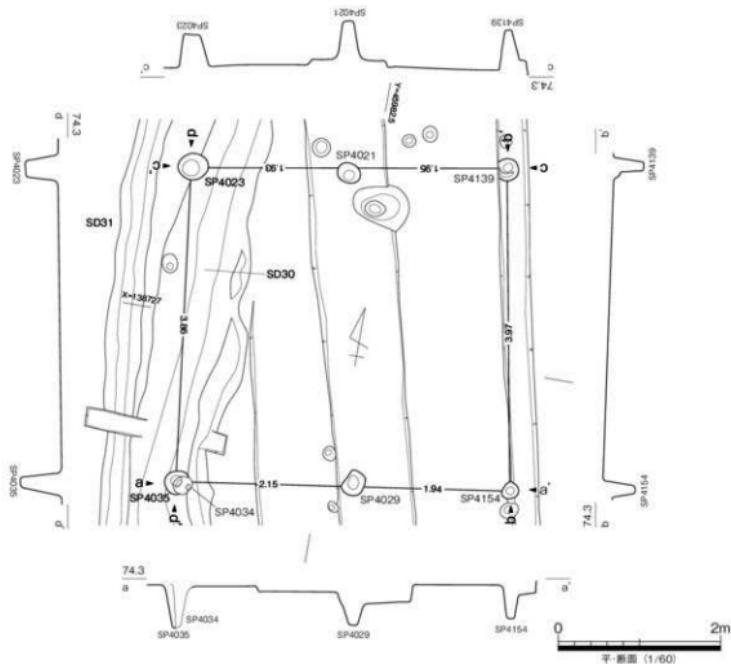


第41図 SB01・SD27 平・断面・出土遺物実測図



第42図 SB02平・断面図

が施され、底部外周に低い高台を付す。9世紀前半代に位置付けられる資料であり、混入品であろう。出土遺物より、14世紀前半代を中心とした埋没の可能性を想定する。



第43図 SB03平・断面図

2. 近世

掘立柱建物

SB01・SD27 (第41図)

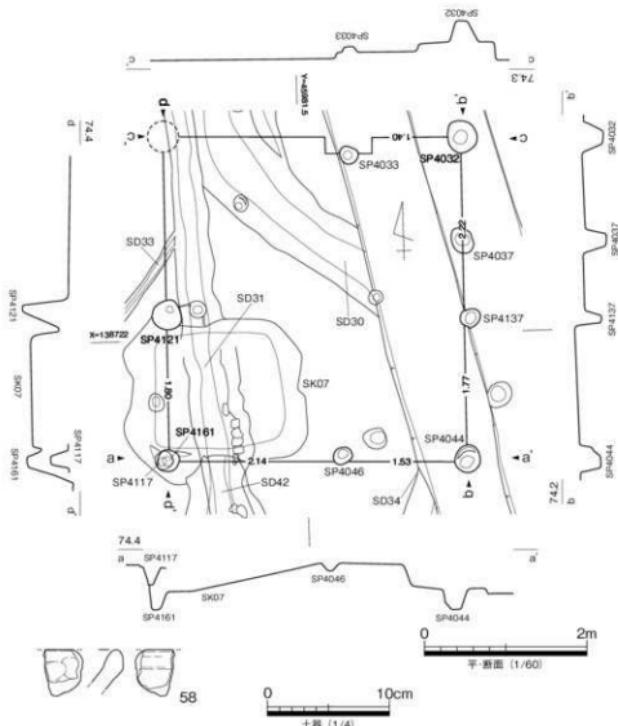
3区南西端部、北をSD21に、東をSD22により、各々画された区画内部で検出した。梁間2間(3.09m)、桁行2間(5.88m)、床面積18.17m²、建物主軸N 81.95°Wに配された東西棟の側柱建物を想定する。桁行南列中央穴を欠く。南に庇を付設し、また西に雨落ち溝SD27を伴う。重複関係より、SD23・SD25・SD26、SP3044より後出する。柱穴は、長径0.35～0.49mの平面略円ないし梢円形を呈し、残存深0.18～0.38mで、断面形は碗底状ないし逆台形状を呈する。SP3014とSP3016には柱材が遺存し、SP3017・SP3018の各柱穴には径0.1m前後の柱痕が認められ、SP3017の底面には根石が据えられていた。

雨落ち溝SD27は、建物の西列より0.67m離れて南北に配された直線溝で、北端は建物の北0.65mで途切れる。検出面幅0.23m前後、残存深0.08mで、断面形は皿状を呈する。流下方向は不明。埋土はにぶい黄色粘質土の單層であった。

遺物は、図示した以外にSP3038より瓦質土器羽釜、SP3015より器種不詳の土師質土器、SP3014より肥前系陶胎染付碗、SP3031より肥前系呉器手碗のそれぞれ小片1点が、SD27より瓦質土器鍋、土師質土器火鉢、平瓦の小片等が少量出土した。52はSD27出土の遺物で、染付磁器碗の底部片。53は、

SP3013より出土した瀬戸・美濃系の磁器小杯である。色の濃い瑠璃釉で模様を描く。54はSD27出土の肥前系染付皿。底部は低い蛇の目凹形高台である。55も、SD27出土の土師質器風呂の底部片で、体部下端にヘラ押えによる低い突帯を貼付する。また使用時の被熱により、体部外面に煤が付着する。SD23出土資料と接合した。胎土中に角閃石粒を多量に含み、高松市御誕地での製作の可能性が考えられる。

56は、SP3016より出土した柱材である。腐食等が顯著な



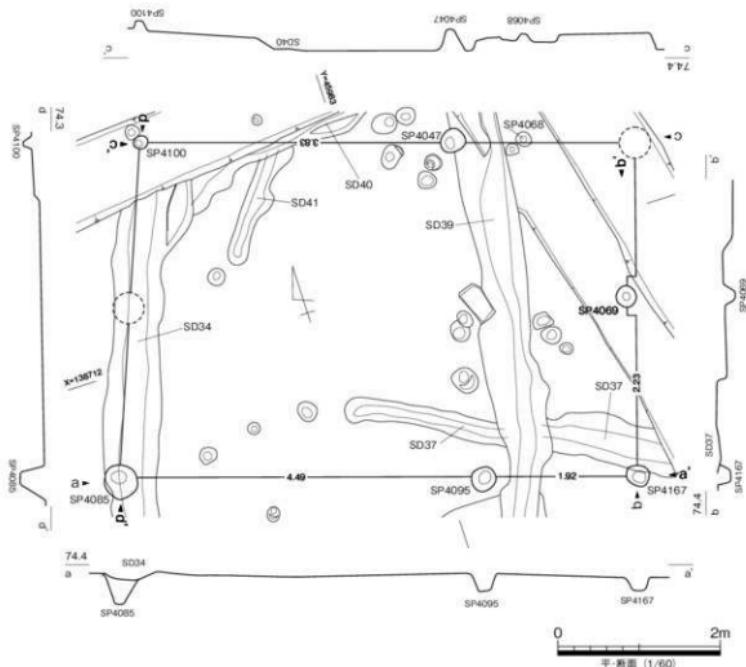
第44図 SB04 平・断面・出土遺物実測図

ため、現状で柱の形状等の詳細は不明である。残存部より径もしくは辺8cm程度の柱材とみられる。スギ属？（第6章第1節参照）の芯持ち材を用いる。57は、SP3014より出土した柱材である。本材も腐食等により脆弱化しており、取り上げ後に大きく破損した。加工痕等は現状で確認できない。また上半部は、乾燥等によるとみられる大きな変形を認める。残存部より判断すると、ツガ属（第6章第1節参照）の芯持ち材を用いた丸柱の可能性が考えられる。同じ建物に、異なる樹種の柱材が使用されており、樹種の選択にさほど注意が払われなかつた可能性も考えられ興味深い。

出土遺物より、19世紀後半代の廃絶が考えられる。後述するSB02と重複するが、両建物の柱穴に重複は認められない。既述したSP3044との重複関係より、SB02が先行することが確認され、SB02の後継建物であった可能性が考えられる。

SB02（第42図）

3区南部、上述したSB01と同じく、北をSD21に、東をSD22により、各々画された区画内部で検出した。両梁間中央穴と庇南東隅穴等を欠く。重複関係より、SD23より後出し、SP3044より先行す



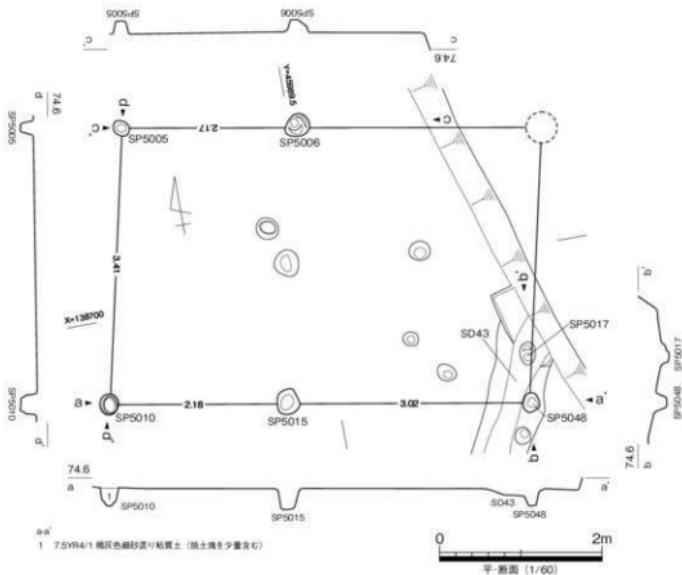
第45図 SB05 平・断面図

る。上述したように、SB01の先行建物の可能性が考えられる。梁間2間（4.00 m）、桁行3間（5.33 m）、床面積21.32m²の側柱建物を復元する。建物西面と南面には、各々主屋に平行して配される柱穴列が確認され、主屋との距離は各々相違するものの、それぞれ西面と南面に庇を付設した可能性を想定する。主軸方向N 76.66° Wに配され、SD21の流路方向と概ね平行し、両遺構間の有機的な関係が伺える。柱穴は、長径0.25～0.30 m前後の平面略円ないし楕円形状を呈し、残存深0.10～0.24 mで、断面形は箱形ないしU字状を呈する。SP3011、SP3010、SP3026には径0.10 m前後の柱痕が認められ、SP3009、SP3008、SP3028、SP3040、SP3042の各底面には根石が据えられていた。

遺物は、SP3031より肥前系陶器小片1点が出土したのみである。詳細な時期は不詳ながら、SD21との関係を踏まえ、SB01に先行する18世紀後葉～19世紀中葉のいずれかの時期に位置付けられるものと考える。

SB03（第43図）

4区北東部、SD28もしくはSD31により、北及び西を画された区画内で検出した。中世溝SD30より後出する。現状で、梁間1間（3.90 m）、桁行2間（4.00 m）、床面積15.60m²の側柱建物を復元する。また、梁間中央穴を欠き、桁行（梁間）はさらに東へ延長する可能性も考えられる。主軸方向N 80.62°



第46図 SB06 平・断面図

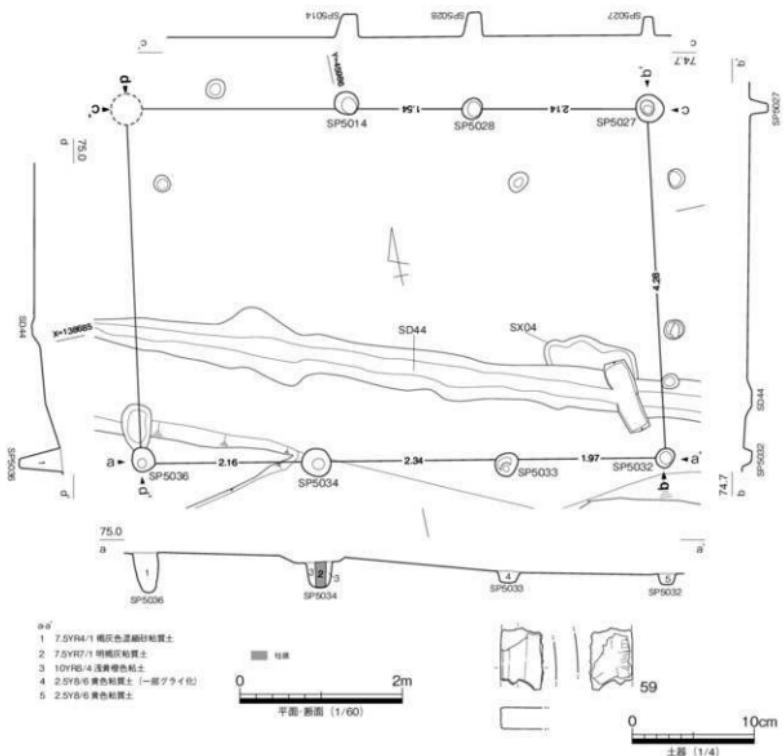
Eに配される。柱穴は、長径0.20～0.35m前後の平面略円ないし梢円形状を呈し、残存深0.30～0.48m前後で、断面形は箱形ないしU字状を呈する。柱穴埋土に関する情報は記録されていない。

遺物は、SP4023より器種不詳の土師質土器、SP4035より須恵器の各小片1点が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、後述するSD31の流路方向と建物主軸が概ね合致することから、近接した時期の遺構の可能性を想定する。

SB04（第44図）

4区中央東、上述したSB03と同様に、SD29により北及び西を画された区画内で検出した。SK07、SD31より後出する。梁間2間（3.67m）、桁行2間（3.99m）、床面積14.64m²の南北棟の個柱建物を復元する。北西隅柱等を欠き、柱間間隔は一定しない等、柱配置にやや課題を認め、復元案として参考までに提示する。主軸方向N 0.44° Eと、ほぼ正方位に配される。柱穴は、長径0.21～0.37m前後の平面略円ないし梢円形状を呈し、残存深0.10～0.57m前後で、断面形は箱形ないしU字状を呈する。柱穴埋土等に関する情報は、記録されていない。

遺物は、SP4121より土師質土器の小片2点が出土したのみである。58は、SP4121より出土した17世紀中葉前後の土師質土器鉢もしくは鉢鉢の口縁部小片である。後述する理由から混入資料と考える。本建物はSK07やSD31より後出することから、17世紀末以降に位置付けられるが、詳細な時期は不詳である。

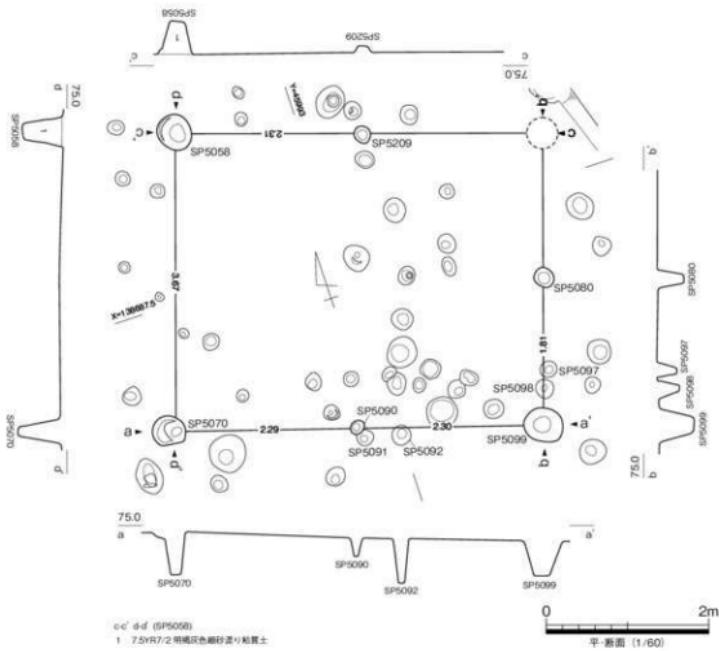


第 47 図 SB07 平・断面・出土遺物実測図

SB05 (第 45 図)

4 区中央南端で検出した。近世溝 SD39 より後出し、中世溝 SD34 に先行する。重複する溝との関係に矛盾があり、建物構造として成立しないか、重複関係に誤認があった可能性がある。各柱穴は、概ね整った位置関係で矩形に配されることから、参考までに復元案を提示する。梁間西列中央穴と東列北端穴を欠く。梁間 2 間 (4.12 m)、桁行 2 間 (6.41 m)、床面積 26.41m² の東西棟の側柱建物を復元する。南列西側柱間隔が約 4.5 m と、同列東側の約 1.9 m と比して長いことから、本来は桁行 3 間であった可能性が高い。主軸方向 N 72.22° W に配され、先行する SD34 の流路方向に近似することから、時期的に SD34 と近接する可能性が考えられる。柱穴は、長径 0.3 ~ 0.4 m の略円ないし椭円形を呈し、残存深は 0.18 ~ 0.39 m 前後で、断面形は U 字形ないし逆台形状を呈する。埋土等に関する情報は、記録されていない。

遺物は、SP4069 より瀬戸・美濃系とみられる施釉陶器碗小片と、SP4167 より平瓦小片 1 点が出土したのみである。出土遺物より、18 世紀中葉を中心とした時期に位置付けられると考える。



第48図 SB08 平・断面図

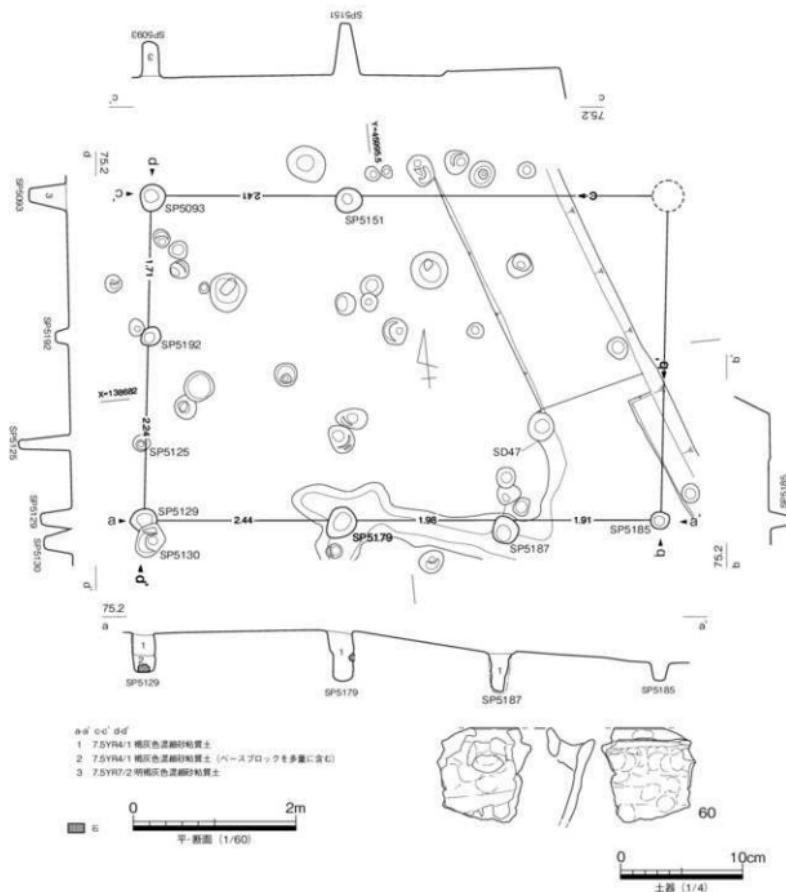
SB06（第46図）

5区北東隅部で検出した。北東隅柱が調査区外となり、平面形が厳密には矩形とはならず、梁間・桁行の各柱間間隔も広いこと等、本建物も柱配置に課題があり、復元案として参考までに報告する。SD43より先行する。梁間1間（3.41m）、桁行2間（5.21m）、床面積17.77m²の東西棟の隅柱建物を復元する。主軸方向N 80.12°Wと、後述するSB07の主軸方向に近似する。柱穴は、長径0.20～0.30m前後の平面椭円形状を呈し、残存深0.13～0.27m前後で、断面形は箱形ないしU字状を呈する。SP5010を除いて、埋土等に関する情報は記録されていない。

遺物は、SP5006とSP5010、SP5048の各柱穴より、それぞれ若干量の焼土塊が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、SB07と主軸方向が近似することから、近接した時期の遺構と判断する。

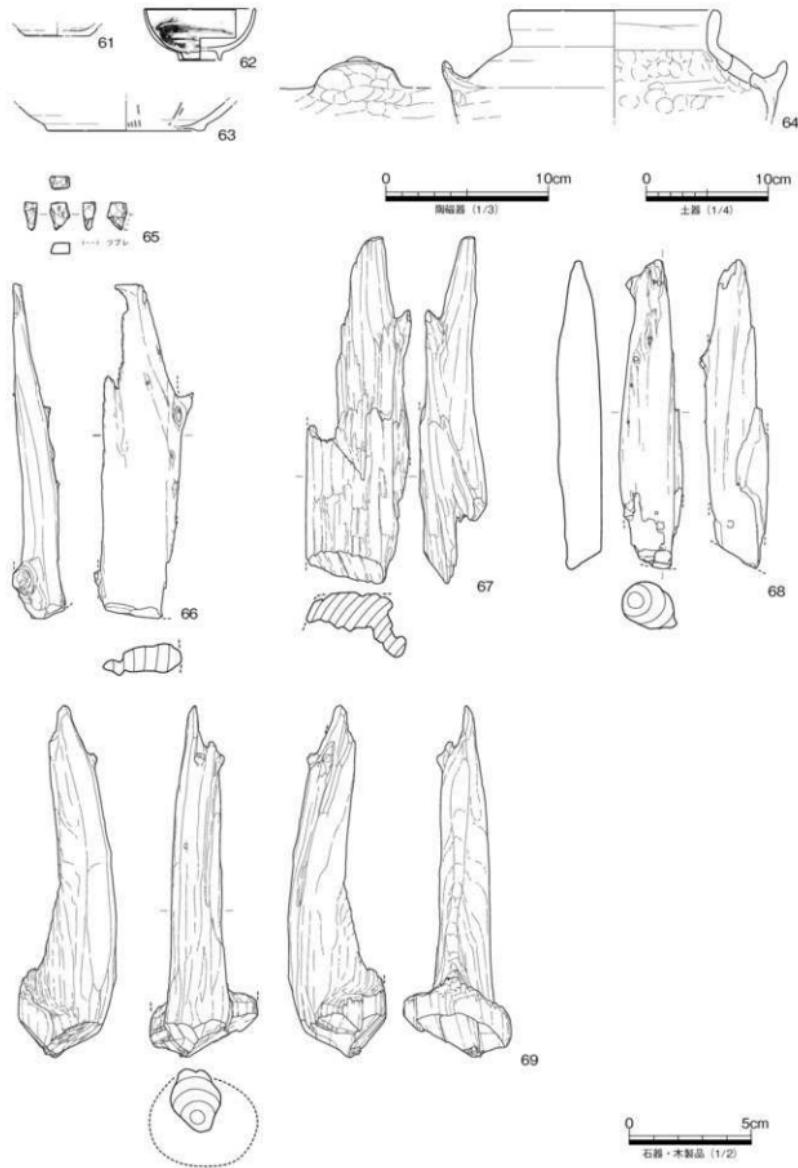
SB07（第47図）

5区中央部付近で検出した。北西隅柱を欠き、平面形が厳密には矩形とはならず、桁行の柱間が一定しないこと等、本建物も柱配置に課題があり、復元案として参考までに報告する。SD44と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。しかし、SD44東西溝と概ね平行し、近接し



第49図 SB09 平・断面・出土遺物実測図

た時期に造成されたと推定される地下げの崖面と重複し、崖面下では柱穴が削平を被って浅くなっていることから、地下げ造成以前の建物である可能性が高く、おそらく後述するように17世紀末～18世紀後葉に開削されたと考えられ、SD44より先行するものと考える。梁間1間(4.29m)、桁行3間(6.45m)、床面積27.67m²の東西棟の側柱建物を復元する。主軸方向N 78.28°Wに配され、SB06と概ね平行する。柱穴は、長径0.23～0.34m前後の平面略円ないし梢円形状を呈し、残存深0.11～0.53m前後で、断面形は箱形ないしU字状を呈する。埋土等については、図示した柱穴についてのみ記録がある。また、SP5034のみ径約0.18mの柱痕が認められる。



第50図 柱穴出土遺物実測図

遺物は、SP5028・SP5034より、それぞれ器種不詳の土師質土器等の小片数点と、SP5033より平瓦小片59が出土したのみである。出土遺物より近世以降の時期が考えられるが、より詳細な時期は不明である。

SB08（第48図）

5区中央東半、SD46を概ね西限とする柱穴群に所在する。北東隅柱と梁間西列中央穴を欠くものの、平面形は矩形を呈し、柱間間隔も一定していること等から、建物として報告する。梁間2間（3.68m）、桁行2間（4.50m）、床面積16.56m²の東西棟の側柱建物を復元する。主軸方向N 72.75°Wに配される。柱穴は、長径0.17～0.46m前後の平面略円ないし梢円形状等を呈し、残存深0.08～0.52m前後で、断面形は箱形ないしU字状を呈する。埋土等については、図示した柱穴についてのみ記録がある。

遺物は、SP5058より、器種不詳の土師質土器等の小片数点の他、SP5070より土師質土器小片数点と瓦質土器擂鉢小片、焼土塊小片がそれぞれ出土した。出土遺物より時期を特定することは困難だが、建物主軸方向は、後述する溝SD44・SD45の東西溝の流路方向と概ね合致することから、近接した時期を想定する。

SB09（第49図）

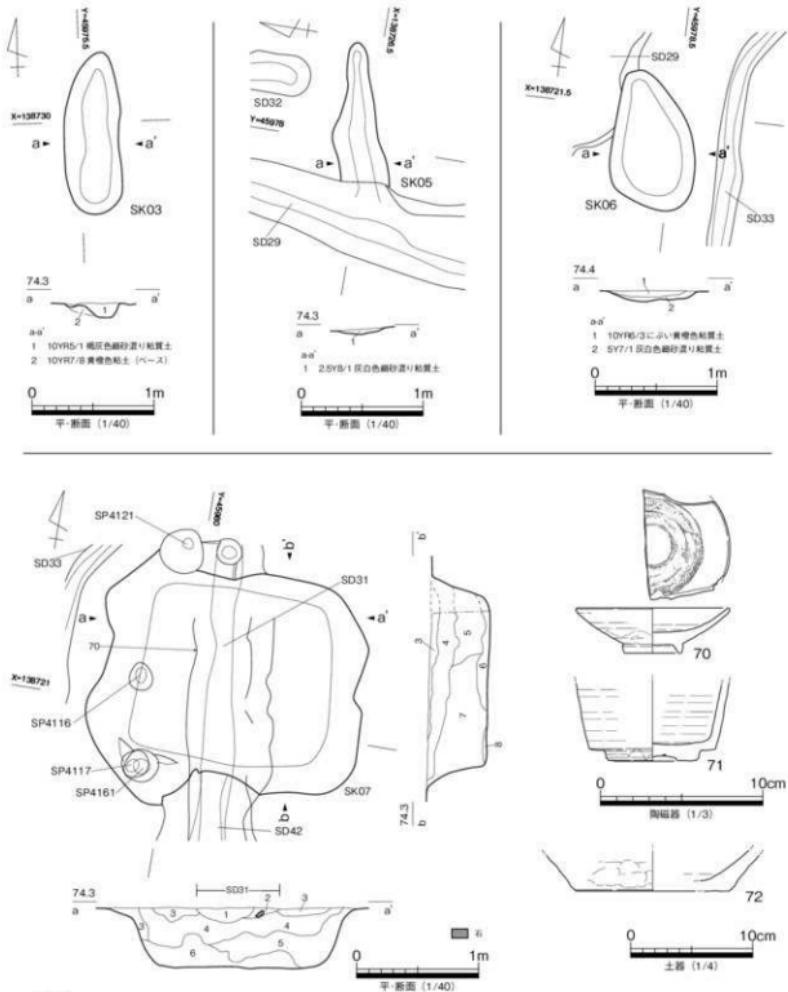
5区南東部、SD46を概ね西限とする柱穴群に所在する。北東隅柱と梁間東列中央穴等を欠くものの、平面形は矩形を呈し、柱間間隔も一定していること等から、建物として報告する。梁間2間（3.96m）、桁行3間（6.33m）、床面積25.07m²の東西棟の側柱建物を復元する。さらに東へ桁行が延びる可能性もあるが、調査では確認できなかった。主軸方向N 84.15°Wと、ほぼ正方位に近く配される。柱穴は、長径0.21～0.40m前後の平面略円ないし不整梢円形状等を呈し、残存深0.17～0.67m前後で、断面形は箱形ないしU字状を呈する。埋土等については、図示した柱穴についてのみ記録がある。

遺物は図示した以外に、SP5151より土師質土器皿小片1点と器種不詳の須恵器小片1点、SP5129より土師質土器足釜等小片4点と焼土塊少量、SP5179より土師質土器皿等の小片約20点がそれぞれ出土した。**60**は、SP5185より出土した土師質土器把手付鍋の小片である。体部外面には使用時の煤が付着する。17世紀前葉前後に位置付けられる。

柱穴出土の遺物（第50図）

3～5区を中心に柱穴が多数検出されたが、建物が復元されたのは、上述した9棟のみである。SB01の一部とSB03は調査時に復元していたが、その他は報告書作成時に図上で復元した。それでも建物遺構を構成しない柱穴は多数あり、それら柱穴から出土した遺物について、以下報告する。なお、出土遺物に中世のものが含まれるが、混入の可能性等もあり、柱穴が中世に位置付けられるとは限らない。埋土等に関する記録はなく、近世以降の柱穴と中世のそれを明確に区分することは困難であり、以下では一括して報告する。

61は、5区SP5100出土の土師質土器皿。器表面はマツツが顕著なため、調整等は不明である。**62**は4区SP4128より出土した、瀬戸・美濃系磁器碗で、体部外面に3匹の海老を描く。**63**は5区SP5079出土の土師質土器擂鉢の底部片。マツツが顕著だが、内面に1単位4～5条のスリメが施されている。**64**は、5区SP5062より出土した、土師質土器茶釜である。肩部に把手を付し、その上方に弦



第51図 SK03・SK05・SK06・SK07 平・断面・出土遺物実測図

を付すための径約2cmの円孔が穿たれる。**65**は、3区SB02のSP3040と重複するSP3044より出土した、徳島県大田井産チャート製火打石の碎片である。**66**は、5区SP5136出土の柱材である。ツガ属(第6章第1節参照)の芯去り材を使用した角柱の可能性が考えられるが、腐食等により断定は困難である。下端はヨキにより斜めに落とされる。**67**は、5区SP5208出土の柱材である。同じくツガ属(同節参照)の芯去り材を使用した角柱の可能性が考えられるが、腐食等により表面の残存状況が悪く、規格等の詳細は不明である。下端は斜めに切断される。**68**は、5区SP5092出土の柱材である。ツガ属(同節参照)の芯持ち材を使用し、腐食等が顕著なため断定は困難だが、本資料は枝を落としただけの丸柱の可能性が高い。下端にはヨキの痕跡を認める。**69**は、5区SP5125出土の柱材である。残存部より、ツガ属(同節参照)の芯持ち材を用いた丸柱の可能性が考えられる。下端は、ヨキにより中央部が尖った円錐状に加工される。

土坑

SK03(第51図)

4区北西部で検出した。長軸1.31m、短軸0.44m前後、平面形は溝状を呈する。残存深は0.12mで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐灰色細砂混り粘質土の単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不詳だが、土坑主軸方向は、隣接するSD28の流路方向と概ね合致し、埋土は後述するSK07下層と近似することから、当該期の可能性を想定する。

SK05(第51図)

4区中央北部で検出した。西半部はSD29に切られ、全形は不詳である。南北0.37m前後、東西1.13m以上を測り、平面形は溝状を呈する。形状や後述する埋土の特徴より、SD29より分岐する溝である可能性も考えられる。残存深は0.04mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は、SD29下層に近似する灰白色細砂混り粘質土の単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不詳だが、上述したように埋土の特徴がSD29と近似することから、当該期の遺構の可能性を想定する。

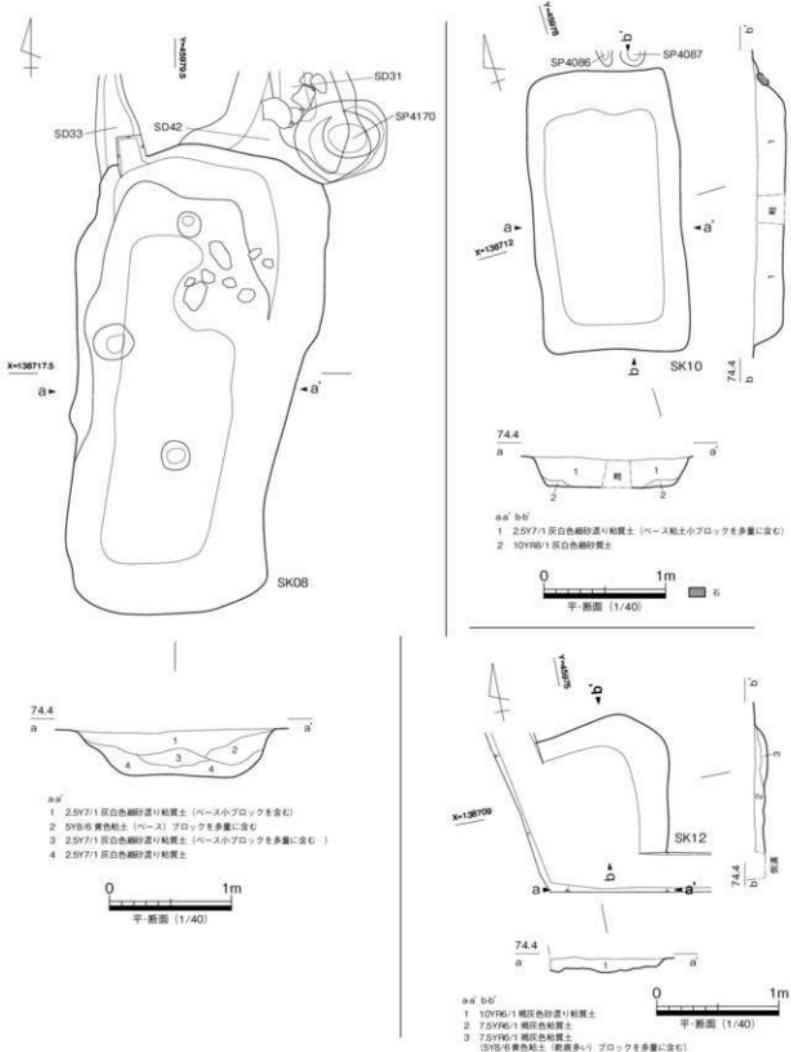
SK06(第51図)

4区中央部で検出した。重複関係より、SD29より後出す。長軸1.16m、短軸0.70mを測り、主軸方向はN 20.08°Wで、南北に長いいびつな楕円形状を呈する。残存深は0.05mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は2層に細分され、いずれも粘質土が水平堆積していた。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不詳だが、SD29より後出すことから、当該期の遺構として報告する。

SK07(第51図)

4区中央部で検出した。重複関係より、SB04、SD31より先行する。長軸2.26m、短軸1.79mで、平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。残存深は0.052mで、断面形は底面が平坦な箱形を呈する。主軸方向はN 83.13°Eで、概ね正方位に配される。埋土は6層に細分され、土坑底面に堆積した明褐色細砂混り粘質土の薄い堆積層を除き、いずれもベース層のブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻



第52図 SK08・SK10・SK12 平・断面図

された可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外には、須恵器、土師質土器足釜、焰烙、備前焼、肥前系呉器手碗等の小片が少量出土した。**70**は肥前系磁器皿。見込みは蛇目釉剥ぎされ、アルミナ砂を薄く塗布する。肥前IV期。**71**は肥前系青磁の筒形香炉で、体部から高台の一部に青磁釉が施される。**72**は土師質土器鉢の底部片とみられるが、内外面磨滅により器種を特定できない。時期は中世に位置付けられ、混入品であろう。出土遺物より、18世紀中葉～後半代の埋没の可能性を考える。

SK08（第52図）

4区中央部で検出した。重複関係より、SD33、SD42より後出する。長軸3.82m、短軸1.75m前後を測り、平面形はややいびつな隅丸長方形を呈する。残存深は0.39mで、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。遺構の主軸方向はN83.35°Eで、正方位に近い。埋土は4層に細分され、上位3層はベース層のブロック土を一定量含むこと、最下層は細砂混粘質土であることから、一定期間オープンな状態で放置された後、人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は、土師質土器足釜、瓦質土器羽釜、備前焼、肥前系磁器色絵碗、同陶器呉器手碗の小片のほか、砂岩焼砾小片が少量出土したのみである。図示していないが、出土遺物より17世紀中葉～18世紀後葉の時期幅が想定され、上述したSK07と同様の性格を有する遺構の可能性を想定した場合、後述するSD31、SD32との先後関係を踏まえ、SK07より後出する可能性を想定する。

SK10（第52図）

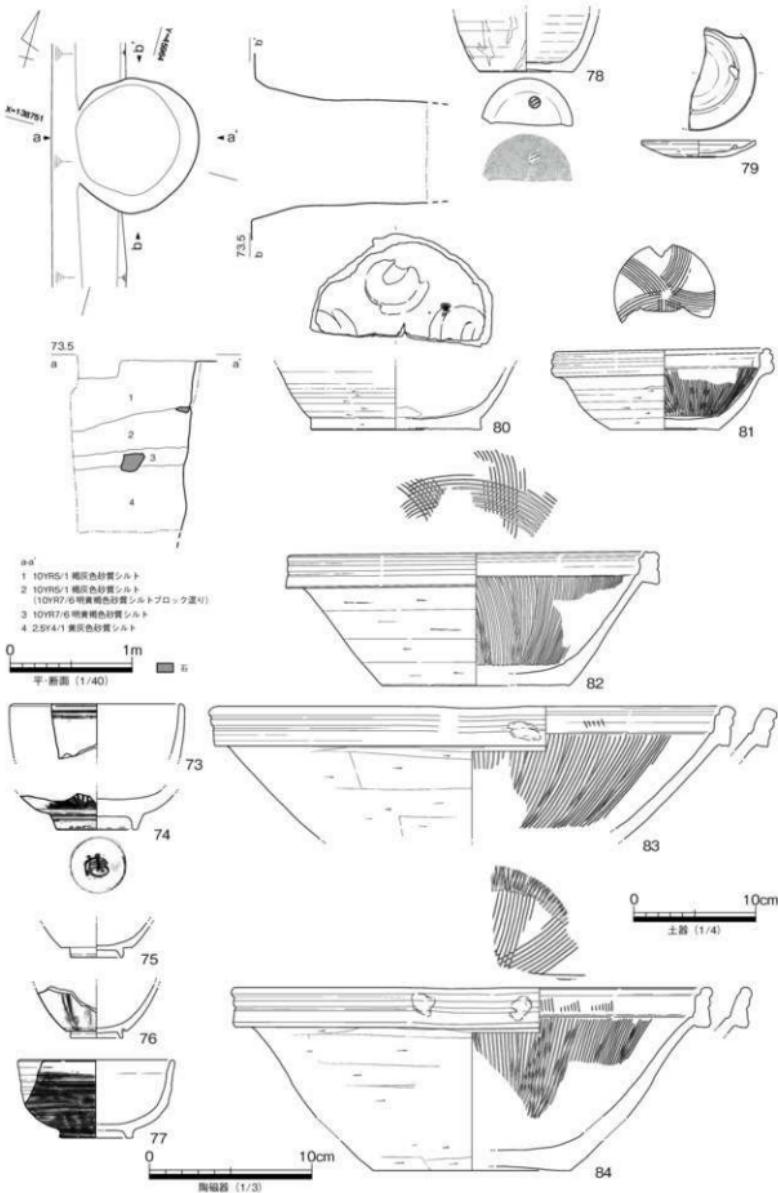
4区南西部で検出した。長軸2.27m、短軸1.18mを測り、平面形は整った隅丸長方形を呈する。残存深は0.25mで、断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦であった。遺構の主軸方向はN13.44°Eで、東に隣接するSD34の流路方向と概ね平行する。埋土は主に、ベース層のブロック土を多量に含む灰白色細砂混り粘質土が堆積し、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の土師質土器や見込みを蛇の目釉剥ぎした肥前系染付皿の小片が少量出土したほか、焼土塊、炭化材小片が若干量出土した。出土遺物から詳細な時期を特定することは困難だが、18世紀中葉～後半代には埋め戻された可能性が考えられる。本土坑も、形状よりSK07・SK08と類似する性格が想定され、それら土坑と近接した時期に埋め戻されたと考えられる。

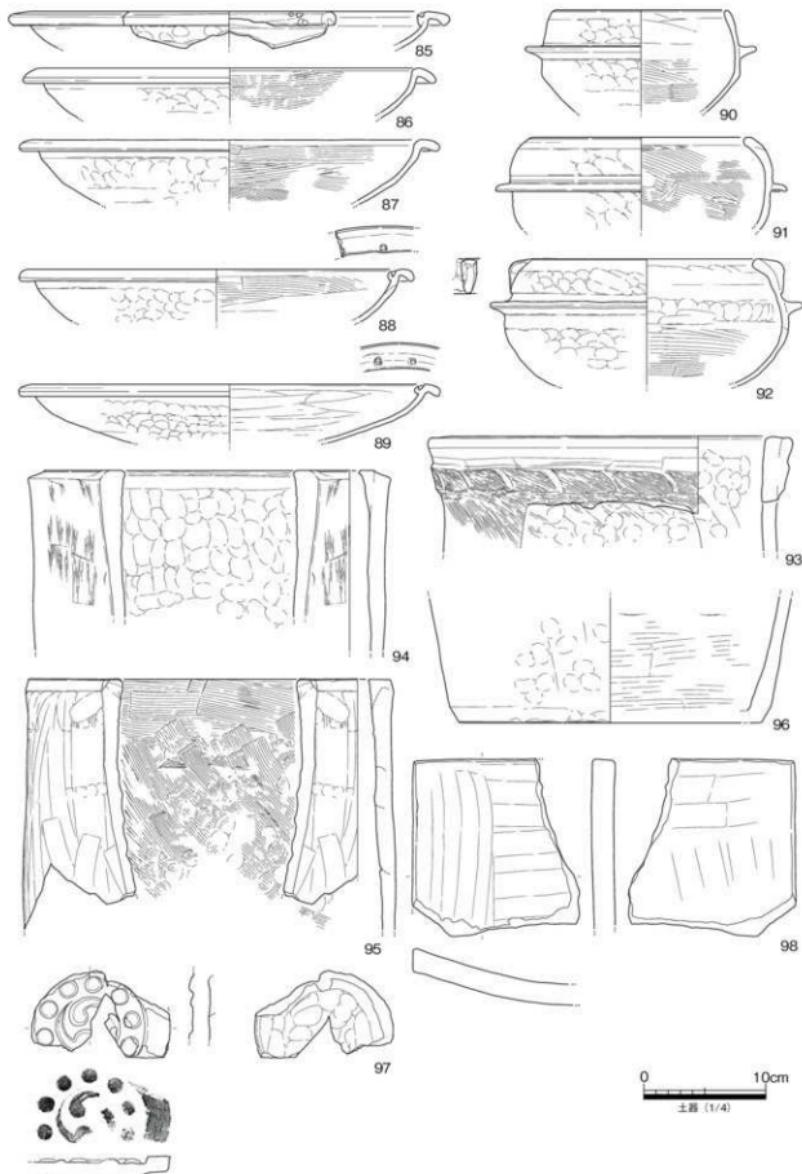
SK12（第52図）

4区南西隅部、ベース層上面で検出した。遺構の北東部を検出したのみで、全形は不明である。南北1.32m以上、東西1.23m以上を測り、平面形は隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.08mと浅く、断面形は底面の平坦な皿状を呈する。埋土は褐灰色粘質土が堆積し、北壁の底面に堆積した埋土中には、壁面の崩落に起因するとみられるベース層ブロック土が多量に混入していた。

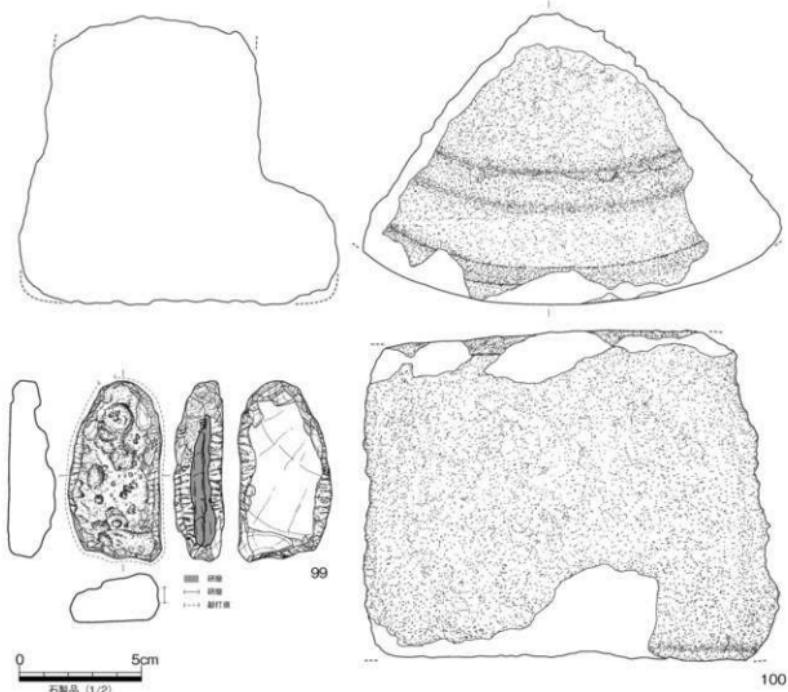
遺物は、器種不詳の土師質土器、瀬戸美濃系施釉陶器、肥前系青磁香炉、道具瓦等の小片、炭化材小片が各1～2点出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、青磁香炉片より17世紀後半代には埋め戻されていたと考えられる。



第53図 SEO1 平・断面・出土遺物実測図1



第54図 SE01出土遺物実測図2



第55図 SE01出土遺物実測図3

井戸

SE01 (第53～56図)

3区中央西端、ベース層上面で検出した素掘りの井戸である。平面形は径1.09m前後の略円形を呈し、残存深は1.4m以上で、底面までの掘り下げは断念した。埋土は、上位4層のみ記録した。褐色系の砂質シルトを主体とし、いずれも人為的な埋め戻し土と考えられる。井戸としたが、底面まで掘り下げていないため、掘り方が透水層まで達しているかどうかは不明であり、厳密には用途を井戸に限定できない。しかし、掘り方はほぼ垂直に1.4m以上掘り込まれており、出土遺物に木製品や植物遺体が出土し、また調査時に湧水がみられたことから、素掘り井戸の可能性を考え報告する。

遺物は、コンテナ2箱程度出土した。図示した以外には、器種不詳の弥生土器や土師質土器の小片、平瓦と丸瓦片が少量と、1～2mm角程度の金箔片が少量、桃核1点、竹、樹種不詳の木片、ウラジロ等の植物遺体が出土している。金箔片（図版45）は、漆器の蒔絵や沈金として用いられていたものと考えられるが、漆器本体は残存しておらず、具体的な器種や用途は不明である。竹やウラジロについては、詳細な出土状況が不明なため断定はできないが、井戸廃絶時の祭祀的な用途に使用された可能性も考え

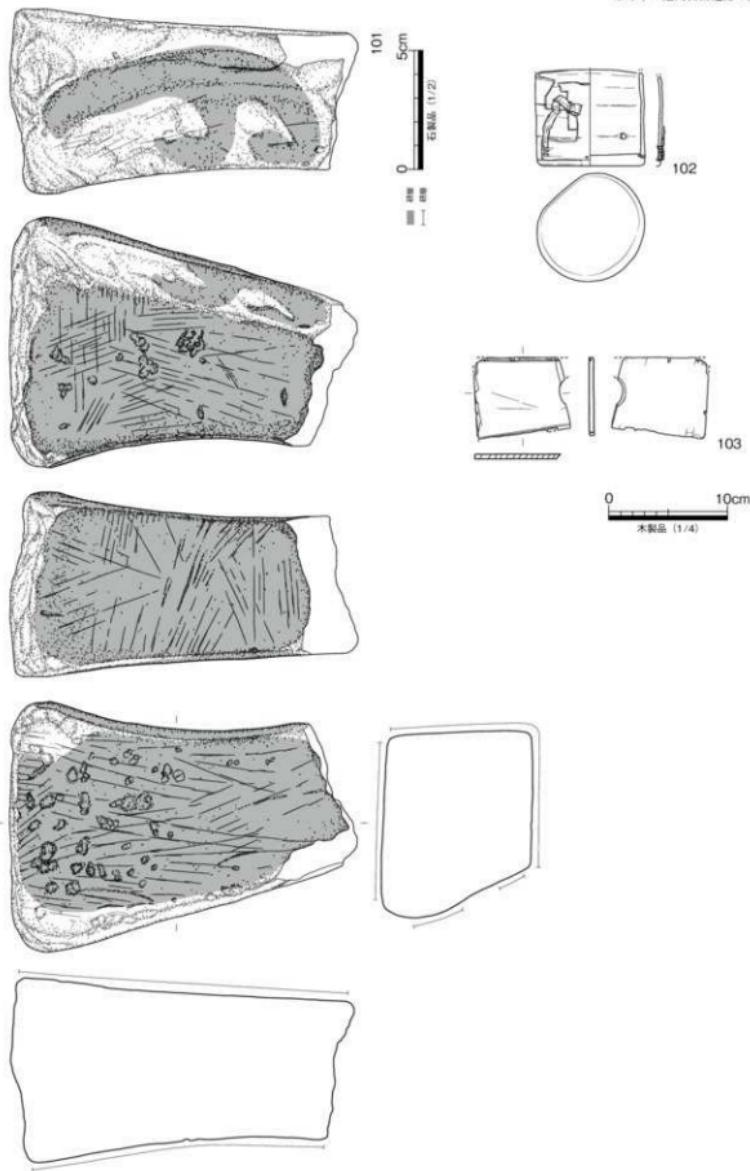
られる。

73は肥前系陶胎染付碗。小片のため、復元した口径にやや難がある。**74**は肥前系染付碗。高台端無釉で砂付着。体部に草花文、高台内に崩れた渦「福」銘を描く。肥前IV期。**75・76**は京・信楽系陶器小杉碗。**76**では鉄絵により2本の若杉を描く。また、外底面には煤が付着する。**77**は瀬戸・美濃系陶器の腰錫碗。体部上位に3条の櫛書き沈線を施し、鉄釉と灰釉を掛け分ける。破断面の一部に煤付着か。

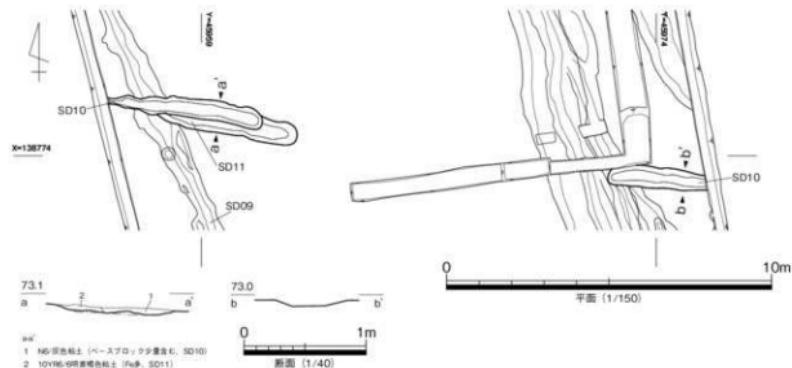
78は備前焼の底部片。外面全面に塗土が施され、体部には火拂を認め、外底面には丸に二の窯印が押捺される。**79**は備前焼灯明皿。**80**は瀬戸・美濃系陶器練鉢の底部片。非常に幅の広い蛇ノ目高台で、高台周辺を除いて灰釉が施される。内面見込みには流し掛けられた緑釉が、水滴状に残る。**81**は小形、**82**は中形、**83・84**は大形のそれぞれ焼締め陶器擂鉢である。**81**と片口を有する**82・84**の体部のスリメは3~4条/cmとやや粗い。**83**も片口を有し、鉄クシ様の原体によるとみられる細いスリメが、5~6条/cmと密に施される。見込みのスリメは堂島を含め各種を認めるが、口縁部の形状から、いずれも稻原氏(稻原2000)のⅡ・Ⅲ類に分類される。

85・88・89は土師質焼成の、**86・87**は瓦質焼成のそれぞれ培塿である。土師質焼成の3点の培塿の内耳部の孔は貫通しておらず、本来の機能を喪失している。上述した培塿の胎土中には、多量の角閃石粒が含まれ、高松市御腰周辺の製品の可能性が考えられる。御腰系の土師質・瓦質土器類は、培塿のほか**92~96**の各種土器類が出土している。**92**は土師質土器羽釜。口縁部に付された外耳に孔はなく、装飾的なものに退化している。**90・91**は瓦質土器羽釜。**92**同様に、鍔部から体部にかけ使用時の煤が付着する。**93**は土師質土器置壺で、口縁部下を肥厚して突帯状とし、上面をハケ状工具で撫でつけている。突帯下には矩形の窓を有する。口縁部等の形状はやや相違するが、日下氏のⅡ E類(日下2002・2003)、松本和彦氏のⅡ E類(松本2003)に近い。類似した製品は、高松市正箱遺跡Ⅱ区SX03出土資料(信里2004)にみられ、近代以降の時期が想定されている。**94・95**も置壺である。日下正剛氏のⅡ F類に分類される。各地の類似資料は、近代以降に出現するとされる。なお、いずれも側面の火所(開口部)の幅は推定値であり、残存部位から正確に算出することはできなかった。また、**93・94**では破断面にも煤が付着しており、使用時に破損したか、破損後火中にあった可能性が想定される。**96**は土師質土器の底部片。残存部から火消し壺等の可能性が想定される。**97**は三つ巴文軒丸瓦の瓦当部の小片。瓦当面にはキラコが付着する。**98**は平瓦片。おそらく狭端部側の小片である。

99は、サヌカイト自然縞の一部を打ち欠いて使用した火打石である。周縁部に多量の敲打痕を認める。また側面の一部に、幅約5mmの縦方向の溝が認められ、長軸方向に擦痕がみられることから、小型工具の砥石として転用されたと考えられる。**100**は、角礫凝灰岩(豊島石)製の挽き石臼である。上臼で、約1/5程度に破損しているが、残存部より径33cm程度に復元される。下面は使用や器表面の剥落等により、目は確認できない。**101**は細粒砂岩製の角柱状砥石である。図右端の面を除く3面は、よく使い込まれて平滑となっている。**102**は、口径8cm程度の小型の曲物で、側板にはヒノキ科アスナロ属(第6章第2節参照)の厚さ約2mmの板材を、底板にはスギ科スギ属スギ(同節参照)の柾目材を用いる。側板は、調査時に大きく破損したため、保存処理時に復元作業を行った。しかし、側板数点は接合箇所が不明で、桙皮紐も当初のようには復元できなかった。したがって、現状で曲物は、底板を含めた高さ約8cmを測るが、本来はさらに3~4cm以上深い器形となる。底板は、厚さ1.2cm、横幅が約1cm長い楕円形を呈し、図下端部は4cm程が直線状となり、その上部に桙皮綴じ部が配される。桙皮は幅5mmの細い紐で、1列綴じ下内3段以上が確認できる。桙皮綴じ部の背後の側板の底面から約2cmほど上位に、



第56図 SE01出土遺物実測図4



第57図 SD10・SD11 平・断面図

径約5mmの円孔が穿たれており、柄杓曲物の柄の先端を差し込んだ孔と考えられる。底板上面周縁部は、幅2~3mm程度、上面から3mm程度を削り段状とし、その部分に側板を置く。現状で径2mm程度の目釘を3箇所認める。底面は平坦で、周縁を丸く面取りする。なお、上記した計測数値や実測図は、保存処理後のものである。103は、薄い板状の木製品で、左図上下端付近に幅約1mm、深さ約2mmの脇を引き、右端に浅い弧状の抉りを穿つ。用途は不明。ヒノキ属（第6章第2節参照）の柾目材を用いる。

出土遺物には、18世紀代に位置付けられるものもみられるが、最終的に埋没したのは明治期以降と考えられる。なお、遺物の出土状況の詳細が不明なことと、井戸底まで掘り下げが及んでいないことから、短期間で廃絶したものか、長期間使用されていたものかは不明である。

溝

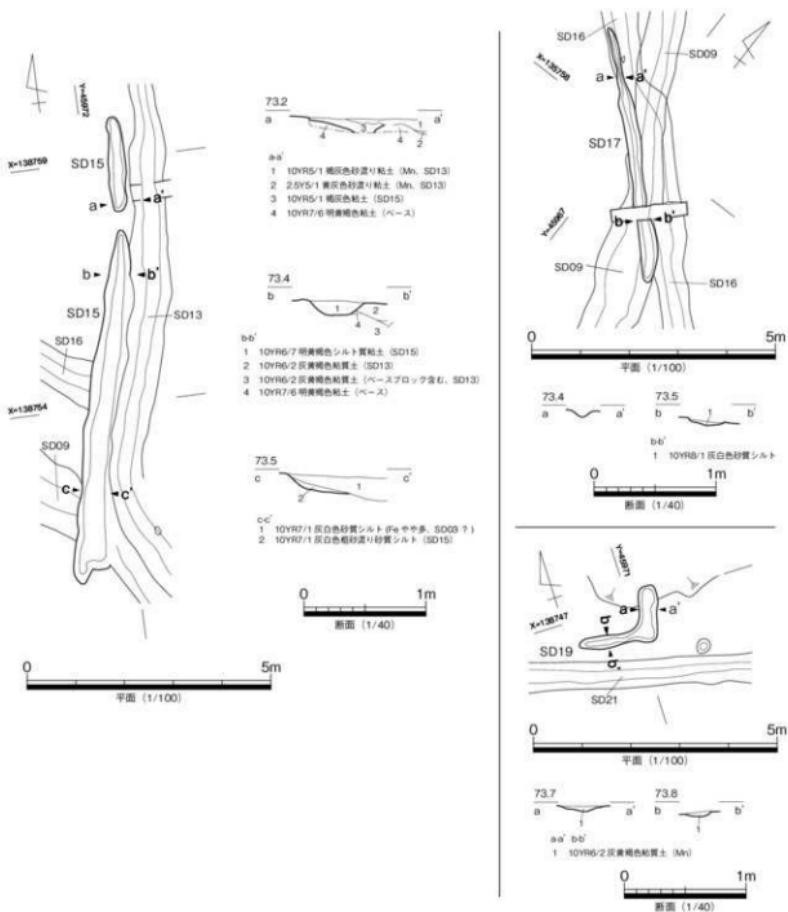
SD10（第57図）

2区南部で検出した東西溝で、東西両端は調査区外へ延長する。また、調査区中央部で10.7m途切れるが、調査時には一連の遺構として判断しており、調査時の所見を尊重して同一遺構として報告する。西溝延長4.7m、東溝延長3.03mをそれぞれ調査した。SD09・SD11と重複し、両溝より後出する。検出面幅0.6m前後、残存深0.05m前後で、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、西端で72.94m前後、東端で72.90m前後をそれぞれ測り、僅かだが高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、灰色粘土の単層であった。流路方向はN 71.23°W前後を測り、後述するSD21と近似することから、近接した時期の遺構と判断する。

遺物は、出土していない。

SD11（第57図）

2区中央西端で検出した東西溝で、SD10より先行し、SD09より後出する。SD10と大半が重複するため、同溝の先行溝の可能性がある。検出面幅0.75m前後、残存深0.04m前後で、断面形は浅い皿状を呈する。流下方向は不明。埋土は、明黄褐色粘土の単層であった。



第58図 SD15・SD17・SD19 平・断面図

遺物は、出土しておらず詳細な時期は不明だが、前述したSD10との関係より、当該期の遺構の可能性を想定する。

SD15（第58図）

3区中央部で検出した南北直線溝で、一部途切れるが延長9.5mを調査した。重複関係より、SD09・SD16より後出することは確実なようだが、中世溝SD03との関係は、土層の観察位置により先後関係が逆転し、判断不能である。土層を撮影した写真（例えば図版29最下段左）からは、SD15が後出す

るようにも見えるが、確証は得られない。流路方向N 13.73° Eに配され、SD21等と平行する。検出面幅0.45m以上、残存深0.12m前後で、断面形は皿状ないし浅い逆台形状を呈するとみられる。底面の標高は、北端で73.13m前後、南端で73.33m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は、褐色系ないし灰白色粘土ないし粘質シルト等の単層である。

遺物は出土していないことから、詳細な時期は不詳だが、後述するSD21と流路方向が近似することから、近接した時期の遺構と考える。

SD17（第58図）

3区中央部西半、中世溝SD09とSD16の交差部分を中心に、東西に延びる直線溝である。両端は調査区内で途切れ、延長約5.3mを調査した。流路方向N 41.86° Wに配される。重複関係より、SD09とSD16の両溝よりも後出する。検出面幅0.25m前後、残存深0.06m前後で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、灰白色砂質シルトの単層であった。底面の標高は、北西端で73.30m前後、南東端で73.35m前後をそれぞれ測り、僅かだが高低差より北西方向へ流下する。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片2点が出土したのみであり、詳細な時期は不詳である。遺構の重複関係や埋土の特徴、溝の規模等より鍤溝の可能性も考え、当該期の遺構として報告する。

SD19（第58図）

3区南半、後述するSD21の東西溝北側で検出された平面逆L字状を呈する小溝である。北端及び西端は調査区内で途切れ、南北約1.1m、東西約1.6mを検出したに過ぎない。東西溝の流路方向N 79.57° Wを測り、SD21と概ね平行する。検出面幅0.2～0.3m、残存深0.04m前後で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質土の単層であった。底面の標高は、西端部で73.67m前後、北端部で73.62m前後をそれぞれ測り、僅かだが高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

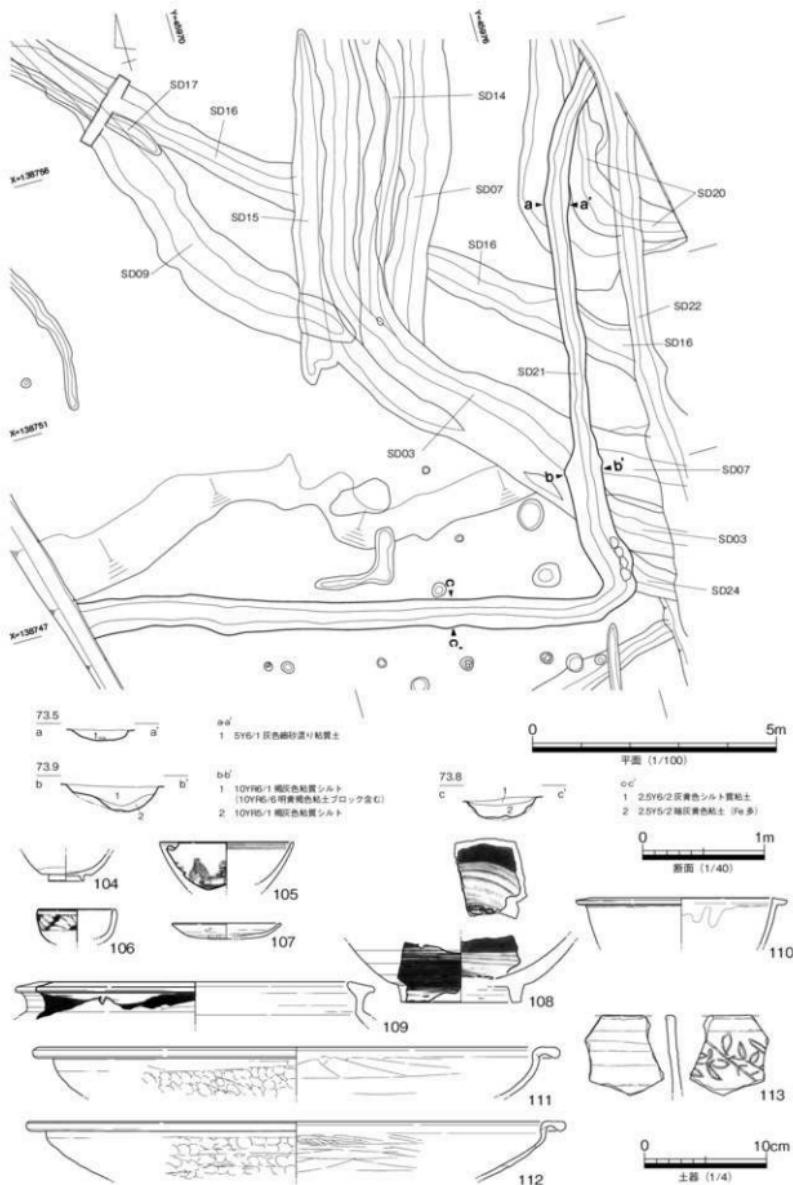
遺物は、土師質土器皿の小片1点が出土したのみで、詳細な時期を特定することは困難である。SD21と流路方向が近似することから、近接した時期の遺構と判断する。

SD21（第59・60図）

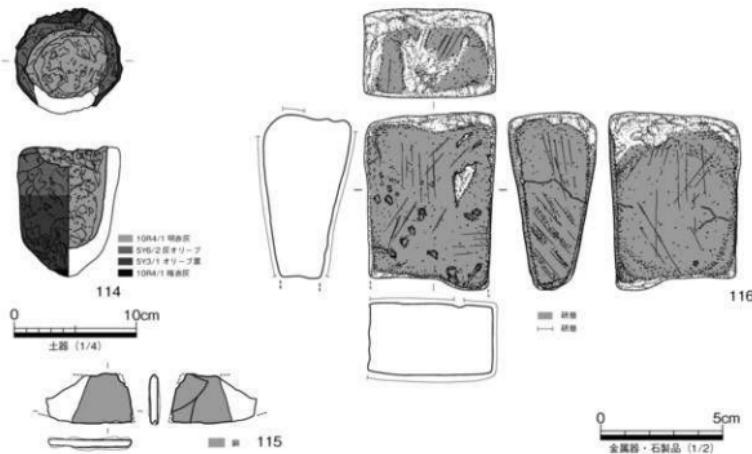
3区南半部を逆L字状に配された溝で、延長220mを調査した。旧耕作土層上面より掘り込まれる。流路方向東半南北溝は北端部でやや屈曲するものの概ねN 8.91° Eに、西半東西溝は流路方向N 74.69° Wにそれぞれ配される。重複関係より、SD22より先行し、SD03・SD07・SD16・SD20より後出する。屈曲部の南北溝東岸部に、溝中央部に面を揃えた護岸石列4石が残存する。石材の長さ20～25cm、厚さ15～20cmで、石材の種類や控積みの有無は不明。本来は、石組溝であった可能性が高いと思われる。検出面幅0.3～0.7m、残存深0.10～0.20mで、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。底面の標高は東西溝西端部で73.64m前後、南北溝北端部で73.30m前後をそれぞれ測り、北東方向へ流下していた可能性が高い。埋土は、1～2層に細分され灰色系粘土ないし褐色系粘質シルトが堆積していた。

遺物は、コンテナ1箱程度出土しており、図示した以外には器種不詳の土師質土器や軟質施釉陶器、焼締陶器擂鉢等の小片がある。

104は京・信楽系陶器の小杉碗。105は肥前系染付碗。直線的に開く碗で、外面に柳等を描く。106は肥前系色絵磁器の仮飯器。口縁部外面に赤絵で、格子地半菊文が描かれる。107は備前焼の灯明皿。



第59図 SD21 平・断面・出土遺物実測図1



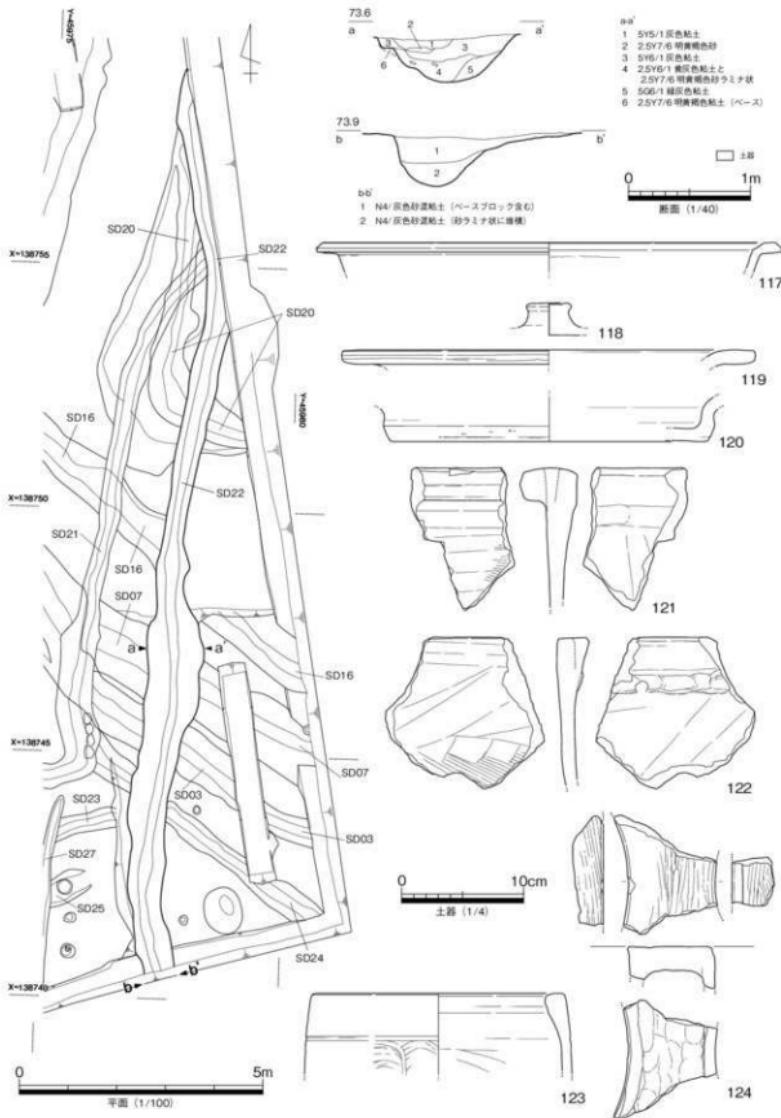
第 60 図 SD21 出土遺物実測図 2

108は、肥前系陶器鉢の底部片。内面見込みに、白土で螺旋状の模様を描く。見込みに砂目を認める。109は、肥前系陶器壺。口縁部から体部内面にかけ灰釉を、頸部外面の一部から体部にかけて鉄釉を施す。17世紀前半代に遡る可能性があり、混入資料であろう。110は大谷焼の鉢である。逆L字形状の口縁を呈し、内外面に鉄釉を施す。111・112は土師質土器焰烙で、御厨系の製品である。体部外面を中心に使用時の煤が付着する。113は瓦質土器羽釜の口縁部片。型成形により外面に草花文を陽刻する。114は高熱による熱変を受けて、肉眼により本来の焼成を特定することは困難だが、破断面に石英粒が観察できることから、土師質焼成の容器と考える。尖底円筒状の容器で、口縁部の一端を指先で押して窪ませて、小さな嘴状の片口を形成する。内面には、鉄錆が付着する。口縁部の一部を欠損する以外はほぼ完形。実測図から計測した内容量は、およそ23mlである。本遺構周辺から他の鋳造関係の遺物の出土はみられず、また鋳造遺構も確認されていないことから、鋳造関係の遺物の可能性を含め金属学的分析を実施した（第6章第4節参照）。分析の結果、内面表層には微細な磁鐵鉄鉱粒が多数付着していることが認められ、ベンガラを製造した容器であることが明らかとなった。県下でベンガラの製造が明らかとなった考古資料は本例が初出と考えられ、第7章に若干の検討を行った。115は用途不明の鉄器片。厚さ約3mmの板状の鉄片に、図左図の右半約2.5cmの幅に、薄い銅板を2~3重に巻き付けている。116は、細粒砂岩製の砥石。図下端を折損する。残存する5面を使用するが、うち1面は剥離等のため使用痕が不明瞭である。

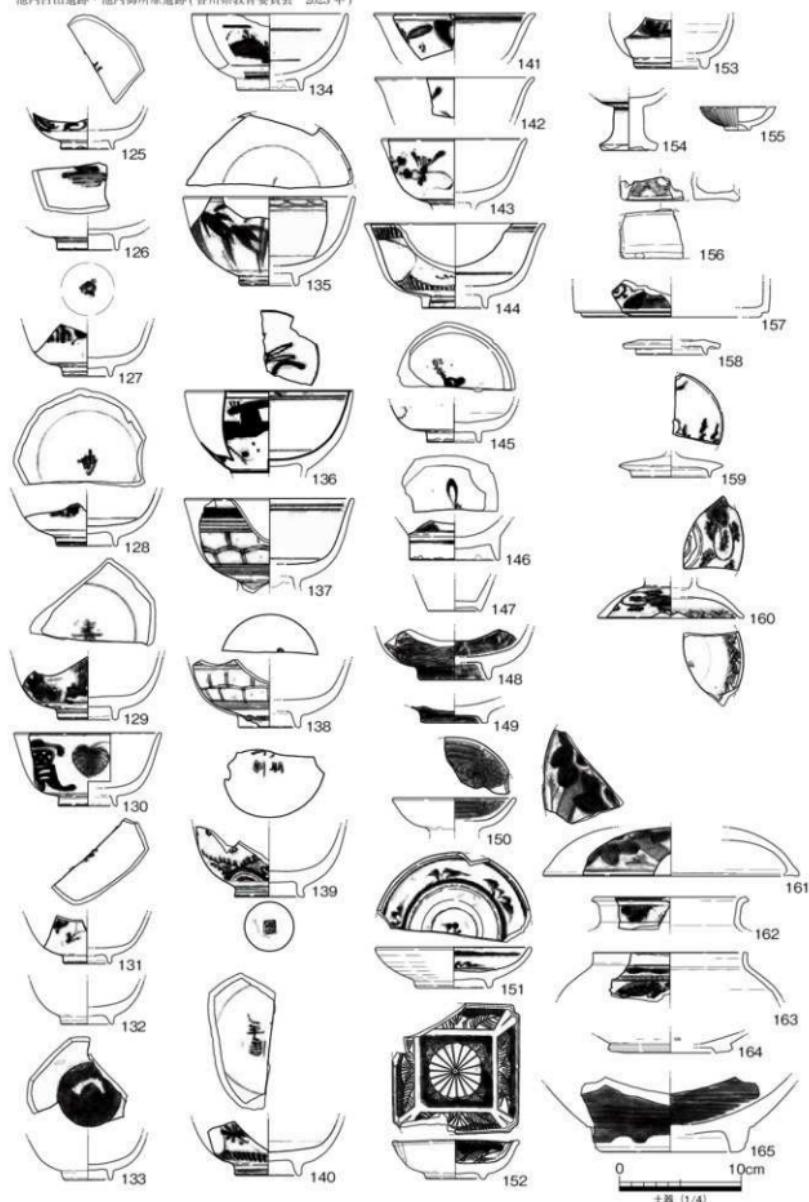
出土遺物にはやや時期幅が認められるが、混入とした資料を除けば概ね最終埋没時期は19世紀中葉以降に位置付けられると考える。

SD22 (第 61 ~ 63 図)

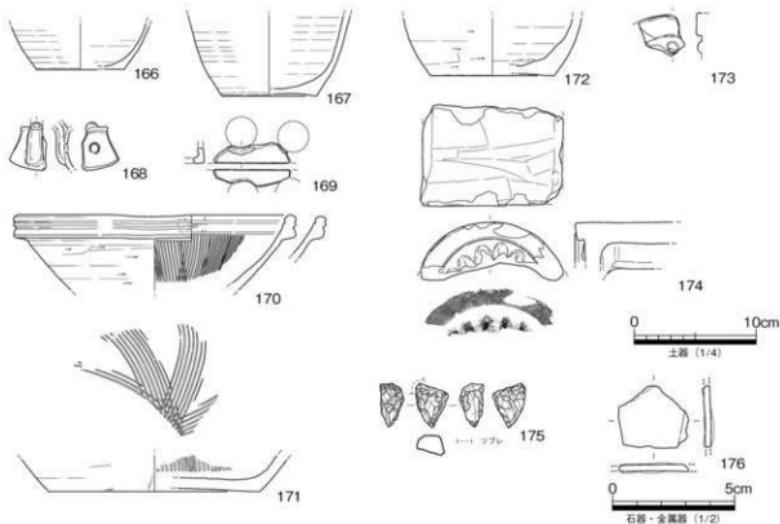
3区南東隅部、旧耕作土層上面で検出された南北溝で、北端は調査区外へ延長し、南端は4区のSD28かSD31へ連続する可能性が想定される。しかし、3区と4区の間がやや離れており、確証が得



第61図 SD22 平・断面・出土遺物実測図1



第62図 SD22出土遺物実測図2

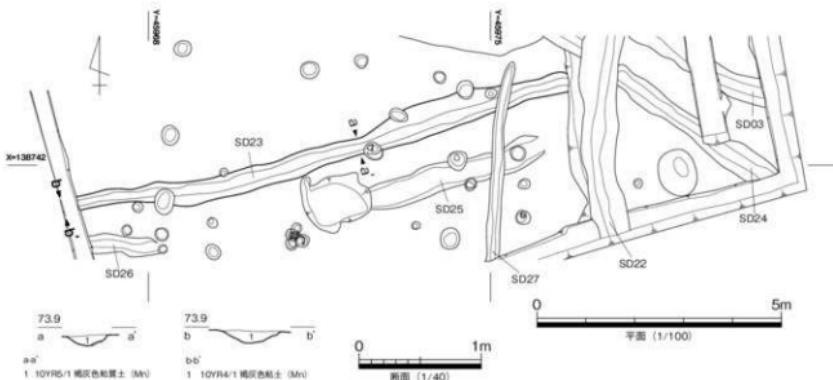


第63図 SD22出土遺物実測図3

られないため、可能性を指摘するにとどめる。延長18.7mを検出した。北端部で緩やかに屈曲して北西方向へ流路方向を変えるが、以南は概ねN 55.1°Eに配される。検出面幅0.38~1.06m、残存深0.40m前後で、断面形は碗底状を呈する。底面の標高は、北端で73.22m前後、南端で73.45m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は、上下2層に大別され、下位2層（第61図4・5層）は砂をラミナ状に含むことから溝機能時の堆積層、上位3層（同図1~3層）は溝廃絶後の自然堆積層と考えられる。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の須恵器、亀山焼壺、土師質土器足釜等中世以前の遺物が混入するほか、焼締陶器瓶、軟質施釉陶器、ガラス瓶、不明鉄器等の小片が出土しており、最終埋没は近代に降る。

117は瓦質土器焙烙の口縁部片。胎土中に多量の角閃石粒を含み、高松市御殿産の可能性が考えられる。118~120は、それぞれ土師質土器火消し壺の蓋である。118は底部上面に付す摘み、119は口縁部、120は口縁部から底部の屈曲部のそれぞれ破片である。いずれも胎土から御殿周辺の製品の可能性が高いが、同一個体ではないと思われる。121は、口縁端部外面に矩形の粘土を貼付して、逆し字状の口縁部となる土師質土器大甕の口縁部小片である。122は、口縁部下に突帯を貼付する土師質土器大甕の口縁部片である。突帯は低く、痕跡的なものとなっている。口縁部内外面の一部に煤が付着する。以上の資料は胎土より、御殿系の可能性が高い。123は瓦質土器焜炉の小片。口縁部下に一条の沈線を巡らせ、下位にハケ状工具を使用するが、模様なのか調整痕なのか判然としない。焼成はあまく、土師質に近い。124は、二連式竈の天井部の小片である。図の左右が円形の掛口となる。天井部にはミガキ調整後に炭素を吸着させている。

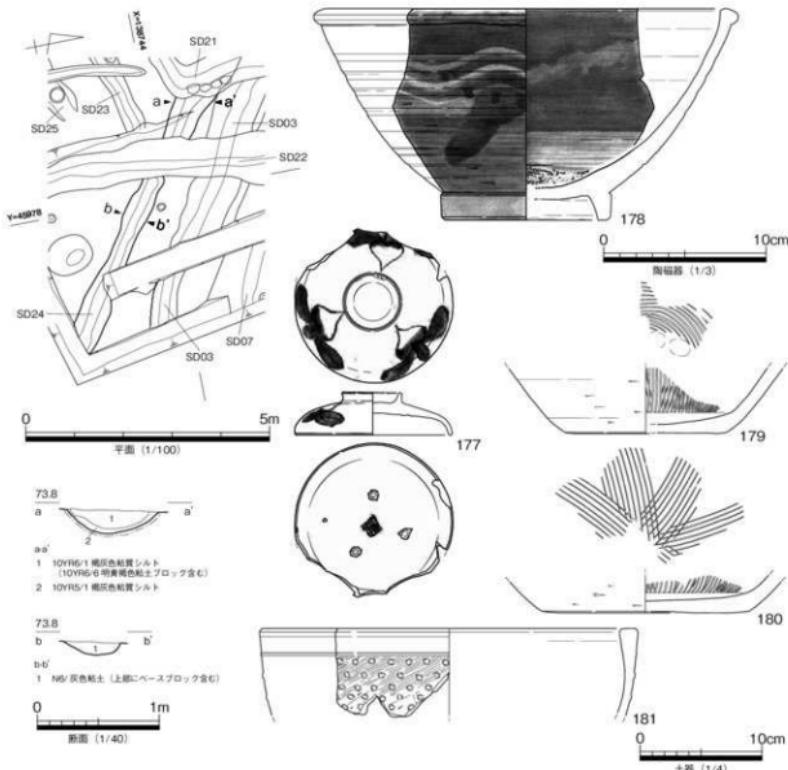


第64図 SD23 平・断面図

125は肥前系の色絵磁器の丸碗とみられる。赤を主体に一部に青が用いられる。また、二次的な被熱により、変色した部分がみられる。126～129は、瀬戸・美濃系染付磁器の腰の張った丸碗。127は見込みに簡略化された波千鳥文を、128と129は寿字をそれぞれ描く。128は内外面に貫入を顯著に認める。130は瀬戸・美濃系染付磁器碗で、草文に隸書体の「寶」字を描く。19世紀中葉。131～134は、染付磁器の小丸碗。131の見込みの模様は五弁花とみられる。132の施釉部分には貫入を認め、高台置付から高台内は、ケズリのまま施釉しない。また、SD21出土資料と接合した。133の見込み中央には、陰刻スタンプにより鳥と笛を線刻した後、濃みを施す。135～140は染付磁器碗である。134～136の呉須には、色の濃い瑠璃色の釉薬が用いられる。139は見込みに「□大光明□ヨウ制」を、高台内には方形枠内に「壽」を、140は見込みに「□□年製」をそれぞれ描く。141～145は、瀬戸・美濃系を中心とした染付磁器の端反碗である。145は底部片で、見込み中央に簡略化された波千鳥文?を描く。146は、肥前系染付の広東碗の底部片。見込みに模様を描くが、意匠は不明。147は肥前系白磁の猪口。置付を除いて透明釉がかかる。148は肥前系施釉陶器で、白化粧土を刷毛塗した刷毛目文碗である。149は瀬戸・美濃系の腰錆碗の底部片である。

150は、瀬戸・美濃系染付の型打輪花皿である。近代以降の製品であろう。151は肥前系染付皿。高台端無釉。見込みを蛇ノ目釉刺ぎし、アルミナ砂を薄く塗布する。152も瀬戸・美濃系染付の型打皿で、高台平面形は四角形を呈し、見込みに花文等を陽刻する。

153は肥前系染付鶴頸瓶の底部片で、お神酒德利として使用されたとされる。高台置付は無釉とし、砂が付着する。154は肥前系染付仏飯器。高台内の割り込みは浅く、無釉である。155は肥前系磁器の紅皿。貝殻状に型押し成形し、内面と口縁部外面の一部にのみ透明釉を施釉する。156は肥前系染付の水滴。小片のため不明な点が多いが、型押成形の方形を呈するとみられ、底面も施釉され布目痕を認める。157は肥前系染付の蓋付鉢(段重)の底部片とする。高台置付は施釉し、高台周りの底面を無釉とすることから、中・上位段の器と思われる。158は、施釉陶器の蓋で、おそらく土瓶等の蓋と思われる。摘みの部分を欠くが、口縁部から天井部にかけ透明釉が施される。159は蓋付鉢の蓋である。口縁部の釉を掻き取り、アルミナ砂を塗布する。160・161は肥前系染付の蓋。161は蓋付鉢の蓋であろう。内



第65図 SD24 平・断面・出土遺物実測図1

側に折り返した口縁部は無釉として、アルミニマ砂を塗布する。160は口縁部内面に粗化した四方擗文を、161は天井部に大きく松と花文を描く。162は色絵磁器の壺等の口縁部小片。赤色釉で圓線や線描の模様、輪郭を描き、輪郭内は青色の呉須で塗り潰している。

163は、肥前系陶器土瓶の口縁部片。外面は呉須で草花文を描き、内面は口縁部を除いて灰釉をかける。19世紀後葉以降に位置付けられる。164は施釉陶器行平鍋の底部片とした。底部は幅広の高台を削り出し、見込みに目跡を認める。165は肥前系施釉陶器鉢の底部片。内面にのみ螺旋状の刷毛目文を施し、体部外面には鉄釉をかける。高台疊付は顕著に磨滅しており、別の用途に利用された可能性がある。166・167は大谷焼徳利とした。体部外面にのみ鉄釉を施し、底部は同心円ヶゼリを施す。色調や焼成より別個体である。

168は施釉陶器汁次の小片。内外面灰釉をかける。169は軟質施釉陶器の小片で、形状より二連式竈のミニチュアの可能性を考え図示した。羽釜を掛ける掛口と火所が別なので、竈を模した可能性が高い。

型押成形で、外面に透明釉がかかる。170・171は堺・明石系擂鉢。170は片口を有し、体部は鉄クシ様の原体によるとみられる細いスリメが、5条/cmと密に施される。口縁部の形状から、稻原氏のII-3類に分類される。171のスリメはやや粗く、4条/cmのものが密に施される。内底面のスリメより同氏のII類に分類される。内面に煤が付着する。172は備前焼壺の底部片で、体部外面には自然釉がかかり、内面には塗土が施される。

173・174は軒丸瓦の瓦当部の小片。いずれも瓦当面にキラコが使用される。174の瓦当文様は、珠文としては梢円形状に密に施されており、通有の三巴文ではなく別の文様となる可能性が高い。

175は、チャート製の火打石の小片。素材から徳島県阿南市大田井産の可能性が高い。176は、厚さ3mmの板状の鉄器片。板状であることから、刃器の可能性が考えられるが、明確な刃部はなく断定は困難。

出土遺物には、148や165等の18世紀中葉前後の資料も少数認められるが、主体となるのは、137・138・144・151・152等の19世紀中葉以降の資料であり、おそらく最終埋没は近代と考えられる。

SD23（第64図）

3区南端部、包含層上面で検出した東西直線溝で、東端は遺構面が若干削奪されているため途切れ、延長10.2mを調査した。なお、削奪部以東では延長が確認できなかった。重複関係より、SB01とSB02、SD27より先行する。西端部で若干北へ振るが、流路方向は概ねN 73.08°Eに配される。検出面幅0.26～0.66m、残存深0.10m前後で、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、西端で73.84m前後、東端で73.72m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。埋土は、褐色粘質土の单層であった。

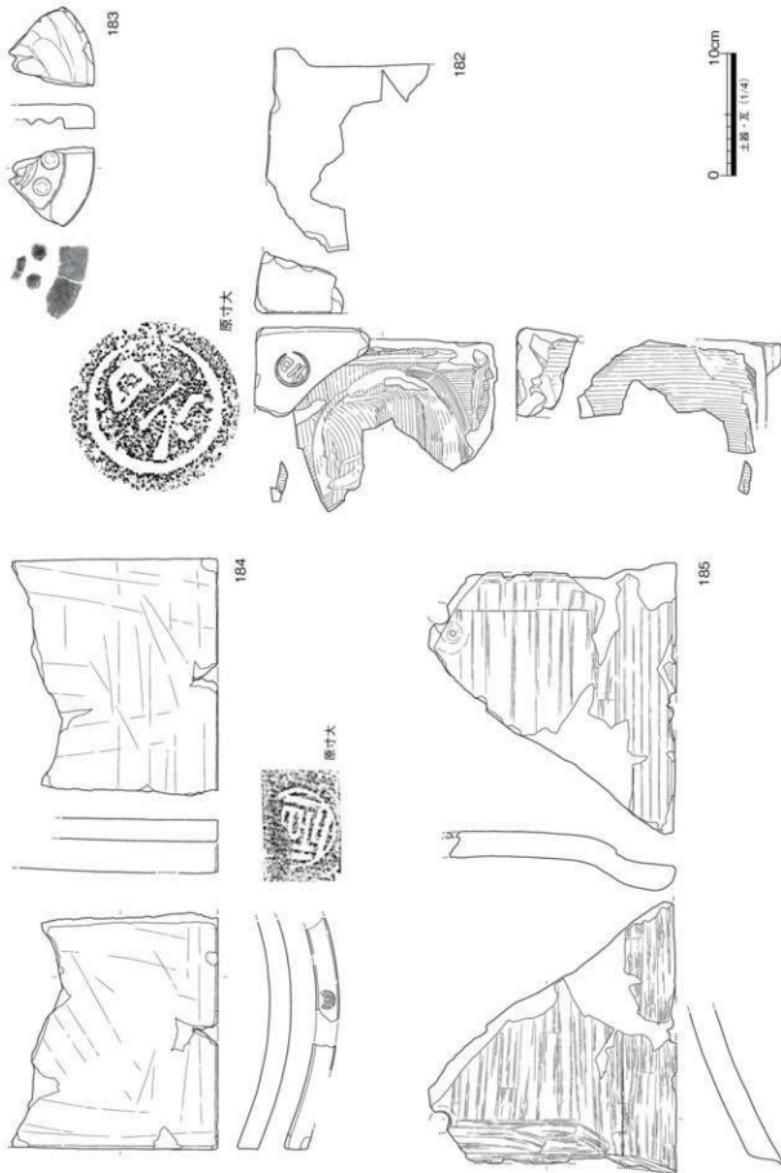
遺物は、土師質土器皿1点が出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。後述するSD29東西溝と流路方向が近似することから、近接した時期を想定する。

SD24（第65・66図）

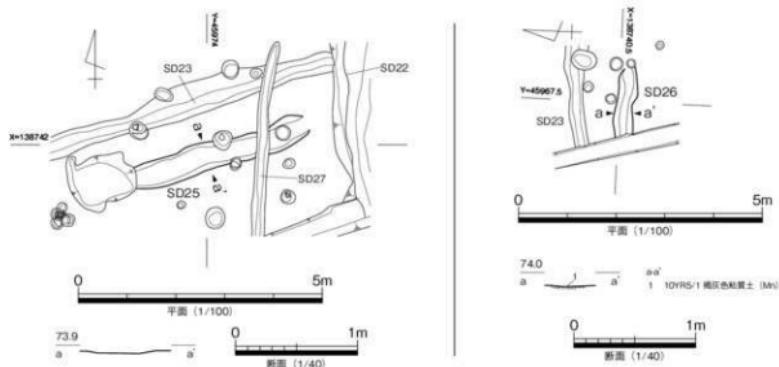
3区南東隅部、包含層上面で検出した南北直線溝で、北端はSD21に切られ、SD21以北では延長が確認されなかった。また、重複関係よりSD22より先行する。なお、SD22との重複部で、西へ屈曲してSD23へ連続する可能性も考えられたが、両溝の出土遺物の時期や量が大きく異なることから、別遺構として報告する。延長5.5mを調査した。流路方向はN 54.52°Wに配される。検出面幅0.35～0.60m、残存深0.10～0.20mで、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。底面の標高は、北端で73.50m前後、南端で73.60m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は、1～2層に細分され、層上位にブロック土を含むことから、埋没の最終段階には人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は、コンテナ1箱と溝の規模に比してやや多量に出土しており、図示した以外には器種不詳の土師質土器や瓦質土器羽釜等の小片がある。

177は肥前系染付の蓋。天井部外面に薙を3箇所配し、内面には福字を描く。また、内面に4か所の目跡を、摘み端部にアルミニウムの付着を認める。178は肥前系陶器鉢で、外面口縁部付近と内面見込みに白土を刷毛で塗り、波状や同心円状の模様を描く。見込みに砂目付着。肥前IV期か。179・180は堺・明石系擂鉢の底部片。179の体部内面のスリメは、鉄クシ様の原体によるとみられる細いものが、4条/cmと密に施される。また内面見込みにはウールマーク状のスリメを施す。180の内面見込みには放射



第66図 SD24出土遺物実測図2



第67図 SD25・SD26 平・断面図

状にスリメを施す。体部のスリメは粗く、3条／1cmのものを密に施す。また内底面は、よく使い込まれて磨滅する。**181**は土師質器火鉢の口縁部片。外型成型で、外面には断面蒲鉾型の細い突帯の下に、径5mm程の珠文を約1.6cm間隔に配し、千鳥状に5段以上重ねて飾り、内面は回転ナデ調整で仕上げる。外面の珠文間には、木范の木目痕を認める。**182**は、口縁部が箱形の土師質器七輪として図化した。口縁部と体・底部は直接接合しないが、胎土や調整等より同一個体と判断した。したがって器高は推定である。口縁部上面隅部に丸に「吉」字の刻印がある。日下氏の火鉢・焜炉類の分類のⅡ G類に相当する。胎土より御厩系の製品の可能性が高い。類例は、高松市高松城跡（丸の内地区）SK10出土資料（松本2003b）があり、出土遺構は18世紀第4四半期～19世紀前葉の年代が想定されている。**183**は、軒丸瓦の瓦当部小片。中心飾りはおそらく左巻きの三つ巴文となり、周間に8個？の珠文を配する。**184**は平瓦片である。端面に円形の刻印を認めるが、掠印後の調整により文字の判読は不能である。**185**は屋根の棟部に用いられた丸柱伏間瓦である。径約2cmの目釘穴が、端部より19cm程の凸面左端付近に穿たれている。なお、四面棟部右端部に剥離痕があり、京伏間瓦となる可能性もある。出土した瓦類からは、本瓦葺きの建物が近接して建てられていた可能性が考えられ、図示していないが棟瓦の小片も出土していることから、棟瓦葺きの建物も共存していたか、建て替えられた可能性も考えられる。いずれにしろ、既述した掘立柱建物以外に建物が存在したことは間違いない。

出土遺物より、18世紀後半～19世紀中葉の時期を想定する。

SD25（第67図）

3区南端部で検出した東西直線溝で、東西両端は調査区内で途切れ、延長3.6mを調査した。重複関係より、SB01とSB02、SD27より先行する。流路方向はN 72.75° Eに配され、上述したSD23とはほぼ平行する。検出面幅0.60m前後、残存深0.02～0.06mと浅く、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、西端で73.83m前後、東端で73.76m前後を測り、僅かだが東へ傾斜し流下していた可能性が考えられる。埋土に関する情報は、記録されていない。なお、西延長部にSD26が配され、一連の遺構の可能性が高いと考えるが、調査時には別遺構として記録されており、調査時の所見を尊重して別遺構として報告す

る。

遺物は出土していないが、上述したSD23と流路方向や規模等が近似することから、近接した時期の遺構と判断した。

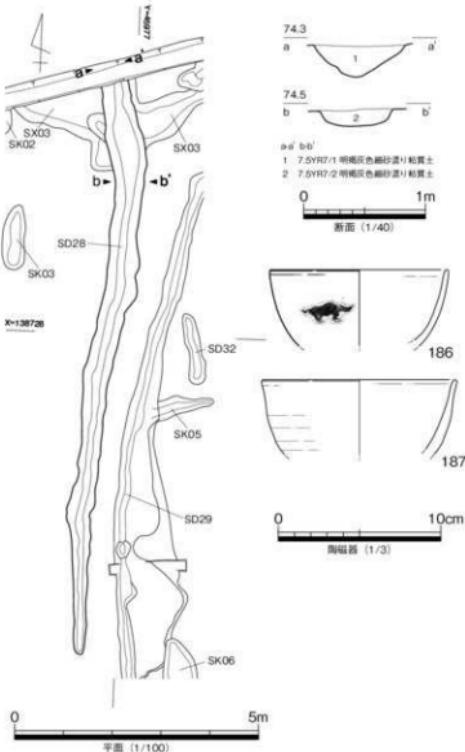
SD26（第67図）

3区南西隅部で検出した東西溝で、東端は調査区内で途切れるため、延長1.4mのみ調査を行った。検出面幅0.32m前後、残存深0.02mと浅く、断面形は皿状を呈する。流下方向は不明で、埋土は褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難である。上述したように、SD25と一連の遺構の可能性もあり、当該期の遺構の可能性を考える。

SD28（第68図）

4区北西部で検出した南北溝である。北端部で落ち込みSX03を切る。南端は調査区内で途切れるが、北端は調査区外へ延長し、3区SD22・SD27と一連の遺構となる可能性も考えられるが、確証に乏しく別の遺構として報告する。延長11.8mを調査した。流



第68図 SD28 平・断面・出土遺物実測図

路方向は、やや蛇行するものの、概ね正方位に近く配される。検出面幅0.23～0.60m、残存深0.03～0.25mで、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。底面の標高は、北端で74.0m前後、南端で74.25m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は、明褐灰色砂混り粘質土の単層であった。

遺物は、図示した以外には土師質土器足釜や備前焼窯等の中世の遺物の他、器種不詳の土師質土器や丸瓦等の小片が少量出土している。186は肥前系染付の丸碗。体部に雲文を描く。187は肥前系陶器の呉器手碗の小片。肥前Ⅲ期。

限られた出土遺物からの時期推定となるが、17世紀中葉を前後する時期の遺構と考える。

SD29（第69図）

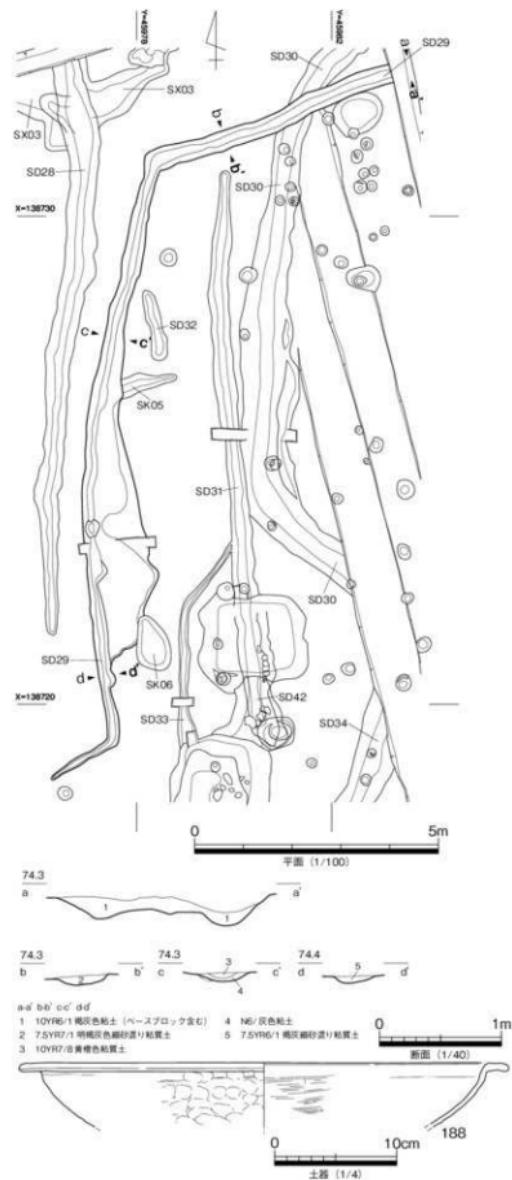
4区北半部で検出した逆L字状にクランクして配された溝である。延長18.6mを調査した。重複関係より、SK05、SD30より後出し、SK06より先行する。流路方向は、東西溝はN 69.28°E、南北溝は

中央部でやや湾曲し正方位に近く配される。検出面幅0.2~0.4mで、南北溝南半部でやや幅が広がり1.18mを測る。別の遺構と重複しているか、埋没の過程で溝東岸が侵食により崩落し、溝幅が拡大した可能性が考えられる。残存深0.07m前後と浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は、1~2層に細分され、南北溝中央部付近で底面にグライ化した灰色粘土が堆積し、滞水状況下にあった可能性が認められる以外は、黄色系粘質土で埋没していた。溝底面の標高は、南北溝南端で74.25m前後、東西溝西端で74.0m前後をそれぞれ測り、高低差より南北溝から東西溝へ流下していたと考えられる。また、本遺構に画された南東部には多数の柱穴が検出されており、複数棟の建物遺構が検出されていることから、これら建物と同時期かどうかは不明ながら、ある時期の屋敷地の区画溝として機能していた可能性は高いと考える。

遺物は、図示した以外には瓦質土器焙烙とみられる土器小片1点が出土したのみである。**188**は御殿系の土師質土器焙烙。本遺構も出土遺物に乏しいが、18世紀後半~19世紀初頭の時期を想定する。

SD31・SD33(第70図)

SD31は、4区中央部で検出した南北直線溝で、南北両端は調査区内で途切れ、延長約11.84mを調査した。北端部付近が僅かに

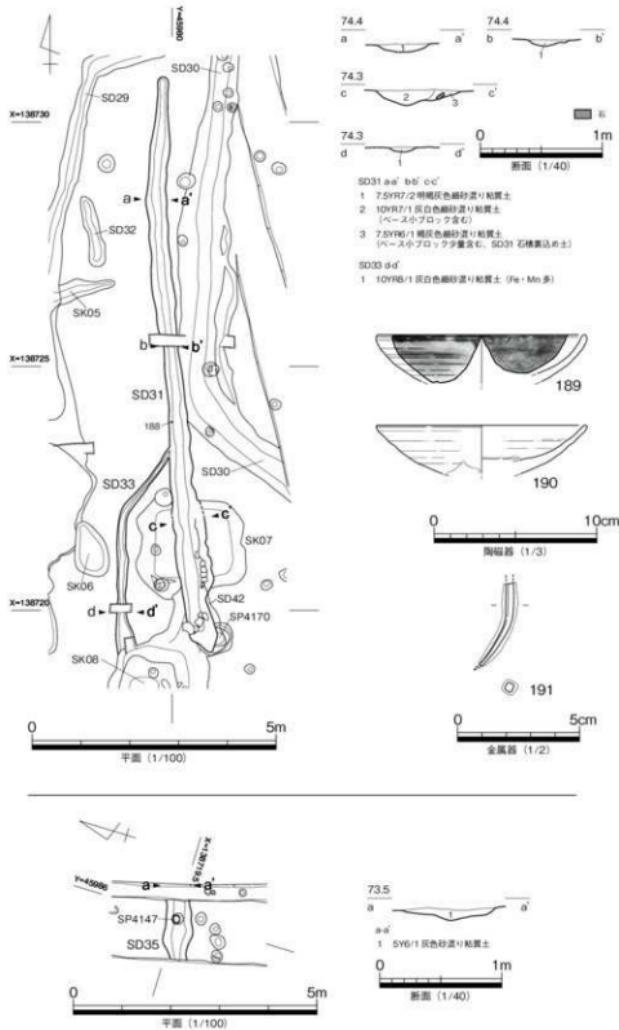


第69図 SD29 平・断面・出土遺物実測図

東に屈曲するが、流路方向はN52.5°Wと正方位に近く配される。また、南半部で小溝SD33が合流する。重複関係より、SK08より先行し、SK07・SD30・SD42より後出する。検出面幅0.3～0.45m、残存深0.05～0.10mで、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。溝底面の標高は、南端で74.2m前後、北端で74.1m前後をそれぞれ測り、僅かな高低差だが、北へ流下していたと考えられる。埋土は、灰色系粘質土の単層であった。また、SK07との重複部の東岸には、長さ10cm前後、幅0.08～0.10mの礫が主に小口面を流路中央に向て6石並べられており、南にはさらに大きな石が原位置から遊離した状態で出

土しており、護岸の石積が構築されていたと考えられる。

SD33は、検出面幅0.1m前後、残存深0.02m前後の小溝で、南半約2.7mは本溝と並走し、北部で東へ屈曲し合流する。



第70図 SD31・SD33・SD35 平・断面・出土遺物実測図

遺物は、図示した以外には土師質土器焼壙、備前焼甕、肥前系陶器刷毛目碗、平瓦、焼土塊、炭化材等の小片が少量出土した。**189**は、肥前系陶器の銅線釉皿である。外面は口縁部まで銅線釉を施し、体部は透明釉をかける。肥前三期。**190**は白磁碗で、大宰府分類(太宰府市教育委員会2000)のⅧ-2類とみられ、混入資料であろう。**191**は約4mm角の鉄釘である。上下端を折損する。

出土遺物より、17世紀末～18世紀後葉の時期を想定する。

SD35(第70図)

4区中央東端部、ベース層上面で検出した東西溝で、東端は調査区外へ延長し、西端は予備調査時のトレンチにより切られ、トレンチ以西で延長が検出されなかったことから、12mを調査したに過ぎない。検出面幅0.5m前後、残存深0.06m前後で、断面形は浅い皿状を呈する。流下方向は不明。埋土は灰色粘質土の単層であった。

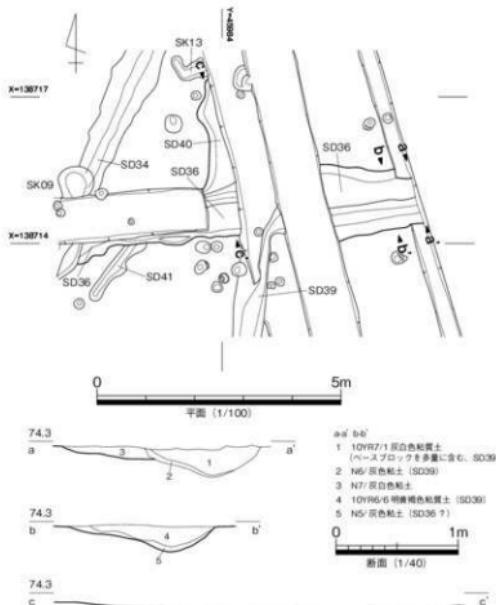
遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、後述するSD36と流路方向が概ね合致することから、近接した時期の遺構の可能性を想定する。

SD36・SD40(第71図)

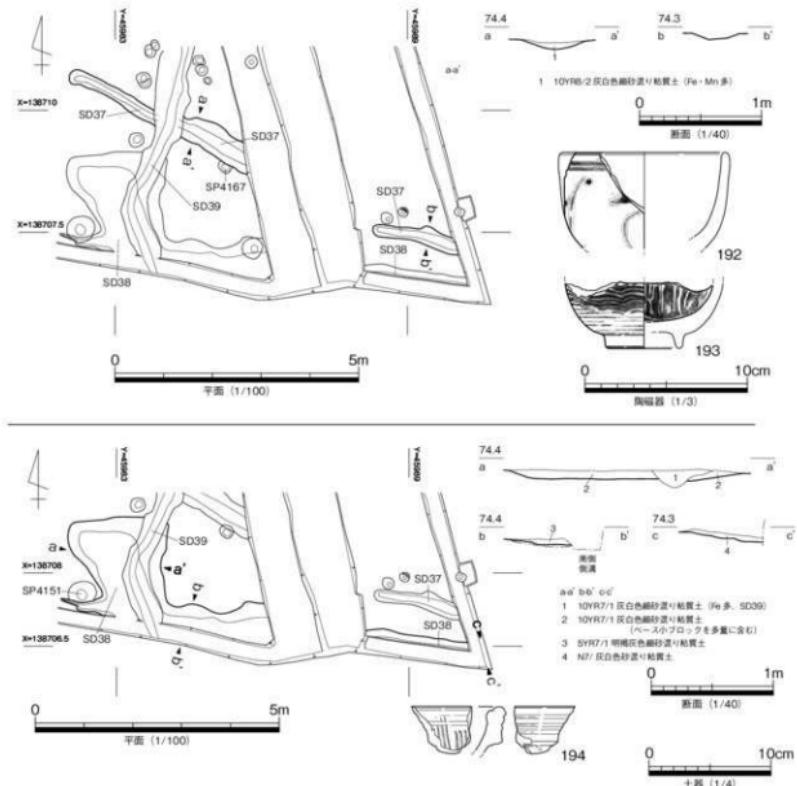
SD36は、4区南東部で検出した東西溝で、東端は調査区外へ延長し、西端はSD34に切られ、SD34より以西で延長部は確認されなかった。また、北には直交してSD40が接続する。SD36と明確な切り合い関係は認められないようであり、一連の遺構として報告する。重複関係より、SB05、SK09より先行する。

SD36は予備調査時のトレンチにより大きく擾乱を被り、調査範囲は限られるが、流路方向N 83.46°Wとはほぼ正方位に近く配され、延長約6.8mを確認した。埋土は2～3層に細分されるが、実測位置により評価が大きく異なるので、この点について以下に検討を試みる。

調査区東壁の土層図(a-a')では、埋土は3層に細分され、上位2層は最下層上面より掘り込まれ、土層より判断する限り、2条の溝が重複したものか、埋没後の改修の可能性が想定される。しかし、調査区東壁に隣接して実測された断面図(b-b')では、埋土は2層に細分され、上述した重複ないし改修



第71図 SD36・SD40 平・断面図

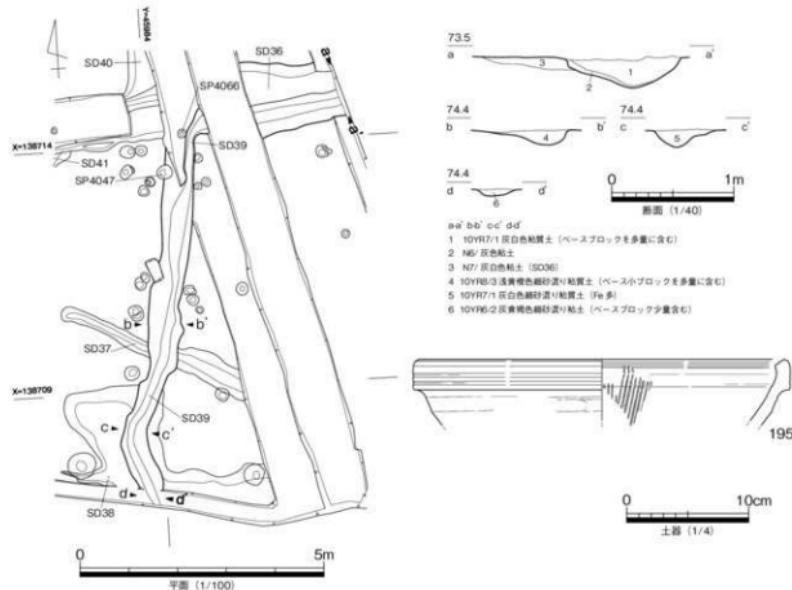


第72図 SD37・SD38 平・断面・出土遺物実測図

の痕跡は認められない。この差異は看過し難く、断面形状から判断する限り、調査区東壁の土層図 (a-a') が事實を記録したものと判断したい。つまり、SD36として調査された溝は、埋没後に溝幅を減じて改修されたか、別の溝が上面より掘り込まれた可能性が考えられる。

この点を解釈する上で重要なのが、後述する SD39 である。SD39 は 4 区南東部で検出された南北溝で、北端部は予備調査時の攪乱を被るが、明瞭に東へ屈曲する落ち込みが記録されている。後述するように、SD39 の底面の標高値は、北端部で 74.09 m 前後を測り、SD36 東西溝東端部の最深部の底面の標高値 74.06 ~ 74.07 m に近似する。また SD39 の埋土は単層だが、断面観察位置の 2箇所 (a-b'・d-d') で、埋土中にベース層ブロック土の混入が記録されており、1箇所 (c-c') の埋土の色調と共に、東壁部の SD36 埋土上位層と酷似する。つまり、SD36 の調査区東壁に記録された上層 2 層は、SD39 の延長溝である可能性が非常に高いと判断され、本書では以下そのように報告する。

SD36 は、検出面幅 1.05 m 前後、残存深 0.1 m 前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰白色粘土



第73図 SD39 平・断面・出土遺物実測図

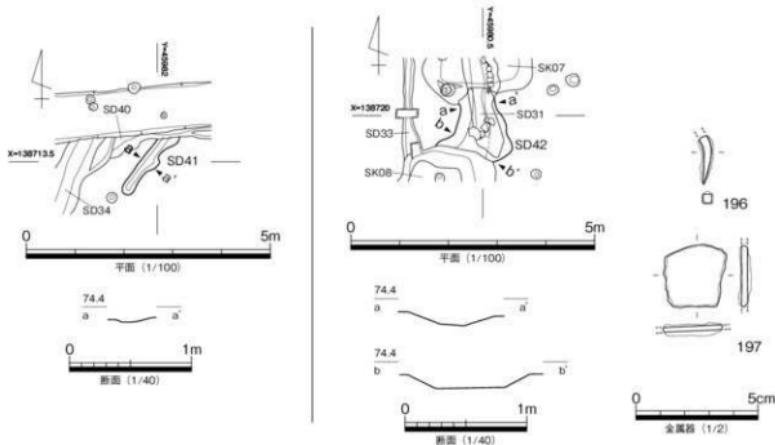
の単層である。

SD40は、SD36より北へ派生する南北溝だが、予備調査時のトレンチにより、東半部を削奪されており、全形は不明。北端部は調査区内で途切れ、延長2.18 mを調査した。検出面幅0.6 m以上、残存深0.03 m前後と浅く、断面形は皿状を呈するとみられる。埋土に関する情報は記録されていない。

遺物は、器種不詳の須恵器、土師質土器熔灰、肥前系陶胎染付碗、同刷毛目鉢、同染付磁器、瀬戸美濃系施釉陶器、平瓦等の小片が若干量出土している。中世溝SD34より先行する点と、既述した理由から、近世資料は全てSD39に帰属する可能性が高い。しかし、出土遺物の詳細な出土位置に関する記録は残されておらず、近世の資料が全てSD39に帰属するとする確証はない。SD34との重複位置も、大半が予備調査時のトレンチにより搅乱を被っており、重複関係を実証する記録は平面図しか残されていない。SD39より先行することは確実であるから、17世紀末～18世紀中葉に機能・埋没した可能性を想定し、上述した調査結果の解釈とその検証は、調査区東側延長部の将来的な調査に委ねたい。

SD37（第72図）

4区南東隅で検出した東西直線溝で、予備調査時のトレンチにより一部搅乱を被る。西端は調査区内で途切れ、東端は調査区外へ延長する。予備調査時のトレンチの東西でやや流路方向が異なること等より、調査時にはそれぞれ別遺構として調査されていた。しかし、両溝の規模や断面形状、底面標高値等に矛盾はなく、一連の遺構SD37として報告する。延長8.6 mを調査した。流路方向は概ね N 64.6° W



第74図 SD41・SD42 平・断面・出土遺物実測図

に配される。重複関係より、SD39より先行する。検出面幅0.2~0.5m前後、残存深0.08m前後と浅く、断面形は皿状を呈する。流路底面の標高は、西端で74.28m前後、東端で74.20m前後をそれぞれ測り、僅かだが高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は灰白色粘質土の単層であった。

遺物は、図示した以外には、土師質土器焰烙や平瓦等の小片が少量出土したのみである。192は肥前系の陶胎染付碗である。外面には唐草文を描いたとみられるが、釉の発色が悪く不明瞭である。193は肥前系陶器の刷毛目文碗。本遺構も出土資料が乏しいが、17世紀末~18世紀後葉の時期を想定する。

SD38（第72図）

4区南東隅で検出した東西溝で、西端は調査区内で途切れる。また、溝南半部の大半は調査区外にあり、全形は不明である。調査時には、予備調査時のトレンチの東西で、別遺構として記録されているが、位置関係を重視して、一連の遺構として報告する。ただし、記録された埋土の色調等は相違し、課題は残る。なお、遺構西端付近で、北に南北約1.7m、東西約1.5mの歪な閉九方形の土坑状に拡幅されるが、この部分の埋土中にはベースブロックが多く含まれ、遺構内の他の場所と埋土の特徴が明瞭に異なることから、別遺構を重複している可能性が高い。流路方向N 81.77°Wとは正方位に配される。重複関係より、後述するSD39より先行する。検出面幅0.6m以上、残存深0.08m前後と浅く、断面形は皿状を呈する。流下方向は不明。埋土は、灰色系粘質土の単層であった。

遺物は、図示した以外に、土師質土器焰烙や備前焼瓶、肥前系染付磁器碗、平瓦等の小片が少量出土したのみである。194は堺・明石系擂鉢の口縁部小片。稲原分類のI-1a類とみられる。体部内面には、鉄クシ様の原体によるとみられる細いスリメが、4条/cmと密に施される。本遺構も出土遺物に乏しいが、周辺の遺構との関係を踏まえ、18世紀後葉に機能・埋没した可能性を想定する。

SD39 (第 73 図)

SD39 は、4 区南東隅で検出した溝で、SD36 において既述したように、SD36 の一部が本溝と一連の遺構である可能性を想定し、調査区南東隅部を逆 L 字状に配された溝として報告する。南端は調査区外へ延長し、隣接する 5 区で本溝の延長は確認されておらず、東端は調査区外へ延長する。調査区内で、11.0 m を調査した。検出面幅 0.6 m 前後、残存深 0.1 ~ 0.2 m 前後、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。南北溝は南端部でやや蛇行するが、流路方向は概ね N 10.2° E に配される。埋土は 1 ~ 2 層に細分され、灰色系粘土ないし粘質土が堆積し、北半部の上位層を中心にベース層ブロック土が多量に含まれることから、最終的には人為的に埋め戻された可能性が考えられる。底面の標高は、南端部で 74.20 m 前後、東端部で 74.05 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北東方向へ流下していたと考えられる。

遺物は図示した以外に、器種不詳の須恵器や土師質土器焰、肥前系陶胎染付碗、同刷毛目鉢、平瓦等の小片が少量出土した。

195 は壠・明石系擂鉢で、稻原分類の I -1a 類か。鉄クシ様の原体によるとみられる細いスリメが、4 条/cm に施される。本遺構も出土遺物に乏しいが、周辺の遺構との関係を踏まえ、19 世紀前葉に機能・埋没した可能性を想定する。

SD41 (第 74 図)

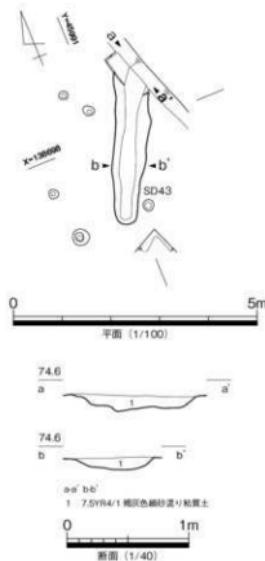
4 区中央南部で検出した南北溝で、北端は SD40 に切られ、その北側で延長は確認されず、南端は調査区内で途切れ、約 1.4 m を調査したに過ぎない。検出面幅 0.3 m 前後、残存深 0.03 m 前後と浅く、断面形は皿状を呈するとみられる。流下方向は不明。埋土に関する記録は残されていない。

遺物は煙瓦の小片 1 点が出土したのみである。重複関係より SD40 より先行することは確実で、出土遺物より近世の遺構と考えられるが、それ以上の詳細な時期を特定することは困難である。

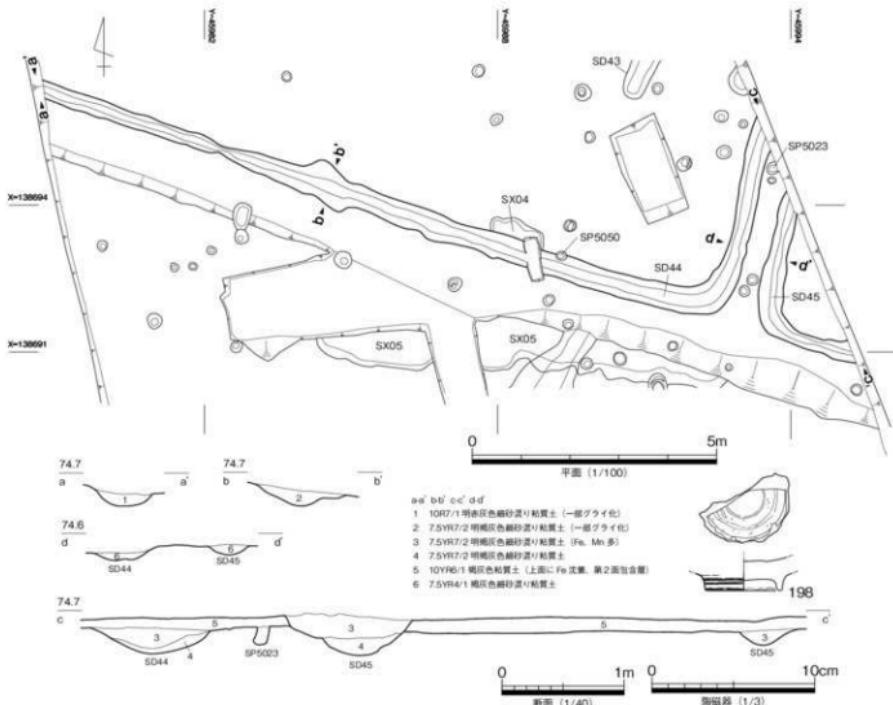
SD42 (第 74 図)

4 区中央部、SK07 と SK08 の間で検出した南北溝で、南北両端は両土坑に切られ、両土坑の北及び南で延長が確認できなかったことから、別の性格の遺構の可能性も考えられる。延長約 1.3 m を確認した。また、SD31、SP4170 と重複し、そのいずれよりも先行する。検出面幅 0.7 ~ 1.2 m、残存深 0.12 m 前後、断面形は皿状を呈するとみられる。流路方向は緩やかに屈曲しており一定しない。埋土に関する記録は残されていない。

遺物は、土師質土器皿・足釜等の小片のはか、肥前系陶器片等が少量出土した。**196** は約 4 mm 角の鉄釘。上部を折損する。**197** は厚さ約 2 mm の薄い板状の鉄製品である。周縁は折損しているとみられ、用途は不明である。



第 75 図 SD43 平・断面図



第76図 SD44・SD45 平・断面・出土遺物実測図

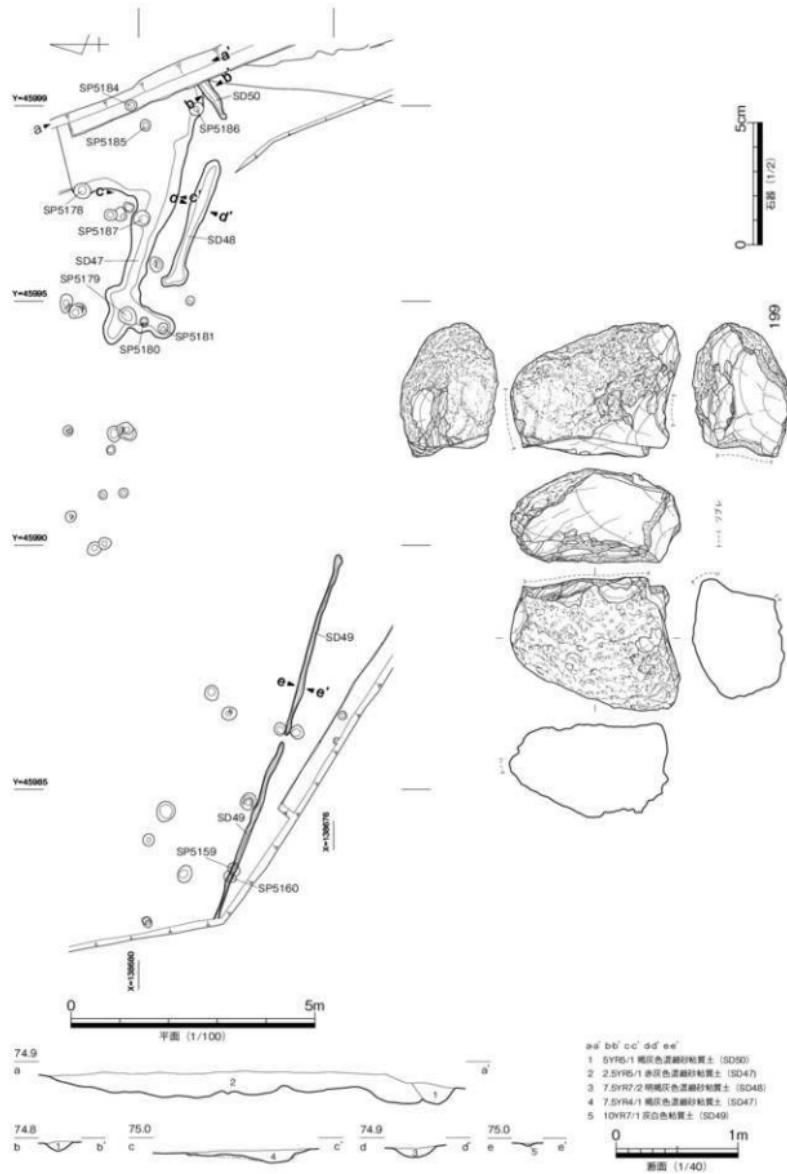
SD43 (第75図)

5区北東部、ベース層上面で検出した南北直線溝。南端は調査区内で途切れ、延長3.1mを調査した。流路方向N 25.13° Eに配される。検出面幅0.6m前後、残存深0.10m前後で、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、南端で74.45m前後、北端で74.32m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していく可能性が考えられる。埋土は、褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は土師質土器皿のほかサスカイト剝片1点が出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、後述するSD44・SD45南北溝と流路方向が概ね合致することから、近接した時期の遺構の可能性を想定する。

SD44・SD45 (第76図)

5区北半部で検出したL字状を呈する溝群で、両溝の東西溝を基準に左右に対称的に配されていることから、同時期に併存し機能していたものと考える。前節で述べた通り、掘り込み面は両溝で異なるが、平面的な位置関係から同時期併存の可能性を指摘する。旧耕作土上面より掘り込まれる。南北溝間



第77図 SD47～SD50 平・断面・出土遺物実測図

の掘方上面での距離は 0.45 m 前後であり、里道等として利用された可能性が考えられる。東西溝の方向は N 72.27° W で、南北溝はほぼ直交して配される。各溝の検出面幅 0.45 m 前後、残存深 0.06 ~ 0.08 m、断面形は浅い皿状を呈する。西側溝の東西溝西端の底面の標高 74.47 m 前後、同溝南北溝の北端の底面の標高 74.40 m 前後を、東側溝東西溝の東端の底面の標高 74.42 m 前後、同溝の南北溝の北端の標高 74.37 m 前後をそれぞれ測り、高低差よりいずれも北へ流下していた可能性が考えられる。埋土はいずれも明褐色粘質土の単層であった。

遺物は、図示した以外に、SD44 からは器種不詳の須恵器や土師質土器の小片が、SD45 からは土師質土器羽釜、肥前系陶器刷毛目碗・瓶等の小片が、それぞれ数点出土している。198 は SD44 より出土した肥前系磁器碗の底部片。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎし、アルミニナ砂を置く。体部周縁と高台の一部は意図的に打ち欠いており、円盤状土製品として転用した可能性が高い。肥前 IV 期。出土遺物より、17 世紀末～18 世紀後葉に機能・埋没したものと考える。

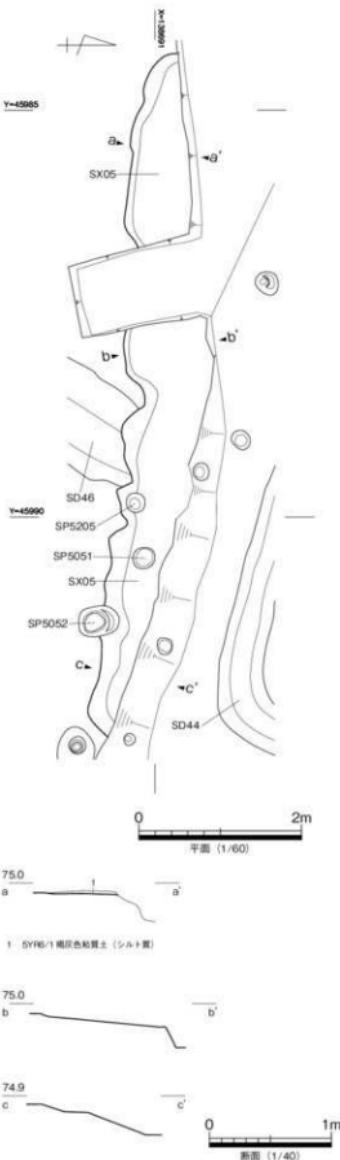
耕作痕

SD47・SD48・SD49・SD50（第 77 図）

5 区南部、包含層上面で検出した東西方向の小溝群である。溝の規模や流路方向に若干の相違を認めるが、いずれも明確な流下方向は不明で、SD50 を除いて一定方向にはほぼ平行して配されることから、鋤溝等の耕作痕の可能性を想定する。SD50 も、溝の規模から時期の異なる同様の遺構と判断した。

SD47 は歪な矩形の土坑状の落ち込みの南西隅部が溝状に北西に突出し、その南約 0.3 m に同方向に延びる溝 SD48 が配されること、土坑状の落ち込み部分の底面に緩やかな起伏が認められることから、これら遺構は鋤溝群とそれを覆う耕土層が堆積したものと理解した。SD47 の溝状部分の延長 5.4 m 以上、幅 0.37 m、流路方向 N 72.64° W、残存深 0.1 m 前後で、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の単層であった。

SD48 は、幅 0.33 m、残存深 0.08 m で、断面皿状を



第 78 図 SX05 平・断面図

呈し、埋土はSD47と酷似した粘質土が堆積していた。流路方向はN 71.1°Wで、上述したように概ねSD47と平行する。

SD49は、一部途切れるが延長約7.9mをベース層上面で検出した。検出面幅0.1m前後、残存深0.03m前後で、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向はN 71.46°Wに配され、上述したようにSD47等と平行する。埋土は灰白色粘質土の单層であった。底面の標高は79.44m前後で一定し、流下方向は特定できない。

SD50も、延長0.8mほどをベース層上面で検出した。検出面幅0.2m前後、残存深0.16mで、断面形は碗底状を呈する。調査区東壁面での重複関係より、SX07より先行し、SD47より後出する。埋土は褐灰色粘質土の单層であった。

遺物は、いずれの遺構からも土師質土器足釜等や焼土塊の小片が少量出土したのみで、時期を特定することは困難ながら、SD50を除いて流路方向はいずれも、前節で既述した圃場整備前の土地区画の方向と概ね合致し、近世以降の時期が想定される。

199はSD47から出土した。サヌカイトの自然礫の一部を打ち欠き、火打石としたもので、各部棱線に顕著な敲打痕を認める。握り拳大の自然礫の一部を打ち欠いたものを火打石として商品化し、一般に流通していた可能性を示す。

性格不明遺構

SX05（第78図）

5区中央部で検出した浅い落ち込みで、北半部は地境の段差により削奪され全形は不詳である。重複関係より、SD46より後出する。東西8.3m以上、南北約1.0m以上で、平面形は不定形な東西に長い溝状を呈する。残存深は0.02mと浅く、南北断面は皿状を呈し、埋土は褐灰色粘質土の单層であった。

遺物は、中世に位置付けられる土師質土器皿小片1点のほか、器種不詳の土師質土器小片10点程度と肥前系磁器皿とみられる小片1点が出土した。肥前系磁器を本遺構に伴うものとすれば、17世紀代以降の埋没の可能性が考えられる。

SX07（第79図）

5区南東隅部で検出した落ち込みで、調査区内で遺構掘方の西縁の一部を検出したのみで、遺構の大半は調査区外にあるため、全形は不詳である。調査区東壁での土層記録（第27図）から、SD47より後出する。埋土は3層に細分される。しかし、調査区南壁では1層（第79図、明褐灰色砂混り粘質土）を本遺構の埋土と理解したが、東壁で同層（第27図7層）を本遺構埋土とすると、遺構の範囲が北側の旧筆境の段落ちの部分まで延長し、平面図での同遺構の検出範囲と合致しない。ちなみに、東壁での土層の範囲と平面プランが合致するのは、第27図に記録された9層（第79図2層）である。また、平面図に記録された本遺構の土層断面記録位置は、遺構範囲の一部のみ（第79図c-c'断面）に限られる。調査記録より、おそらく本来的には明褐灰色砂混り粘質土は本遺構の埋土と考えられ、緩やかに東に傾斜する斜面部に、各層が概ね水平堆積を繰り返していることから、旧耕作土層であった可能性が高いものと考えられる。また、図に示された平面的な検出範囲は、最上層の埋土の一部（第79図1層）を削奪した上で図化したもので、本来的な本堆積層の範囲を表現したものではない可能性が高い。なお、本遺構の最深部の残存深は0.50m前後を測る。

遺物は、図示した以外には、器種不詳の土師質土器小片5点が出土したのみである。200は白磁碗の底部片。小片のためどの型式に帰属するかはやや判断が難しいが、大宰府分類の碗XII類の可能性を想定する。本遺構の時期は、SX06やSD47、SP5056等の近世の可能性が想定される遺構の上面に堆積していることから、近世以降の時期が想定され、図示した遺物は混入の可能性が高いと判断した。

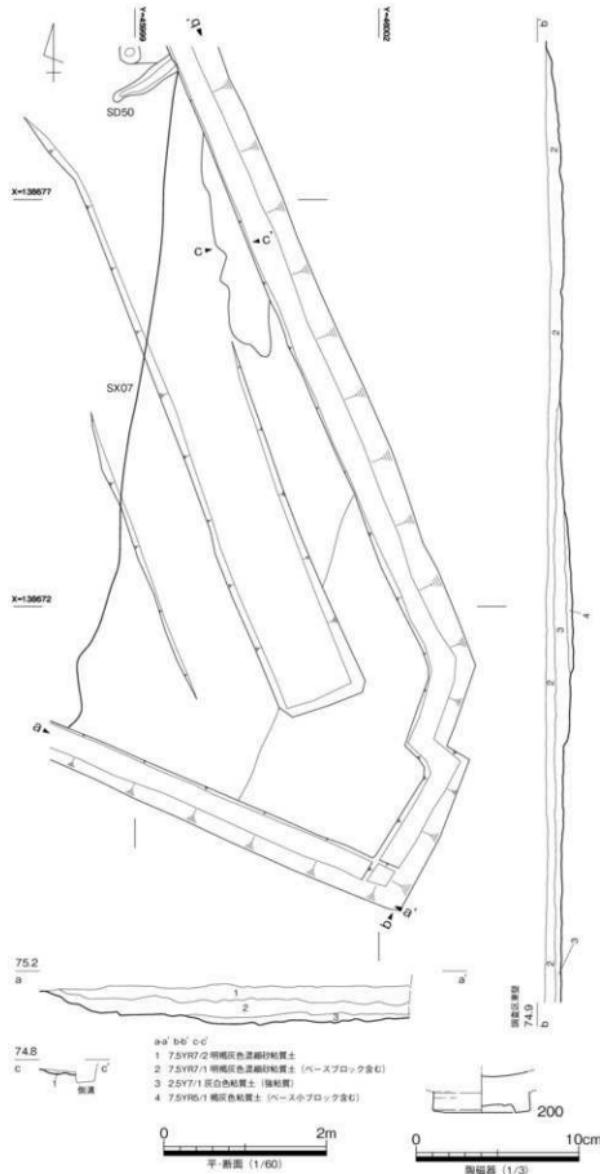
時期不明の遺構

土坑

SK01（第80図）

3区南東隅部で検出した土坑である。長軸0.96m、短軸0.75m、主軸方向はN 15.8° W前後で、平面形は南北に長い整った楕円形状を呈する。残存深は0.20mで、断面形は歪な皿状を呈する。埋土は、灰黄褐色粘質土の単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を



第79図 SX07 平・断面・出土遺物実測図

特定することは困難である。

SK04（第80図）

4区北東部で検出した土坑である。重複関係よりSP4156より先行する。SD29と接するが、先後関係は不明である。長軸1.02m、短軸0.79mを測り、主軸方向はN 57.68°Eで、東西に長い楕円形状を呈する。残存深は0.08mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は明褐色細砂混り粘質土の単層であった。

遺物は出土していない。埋土の特徴から、古代以前に遡る可能性も想定されるが、同様な埋土を有する遺構で、遺物が出土したものは皆無のため、詳細な時期は不明である。

SK09（第80図）

4区中央南で検出した土坑である。南北半部は試掘トレンチにより削奪を蒙る。重複関係より中世溝SD34より後出する。南北0.63m以上、東西0.68mを測り、平面形は楕円形を呈するとみられる。残存深は0.22mで、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は、浅黄橙色細砂混り粘質土の単層であった。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片2点が出土したのみである。SD34より後出することから、16世紀から17世紀前葉以降であることは確実だが、詳細な時期を特定することは困難である。

SK11（第80図）

4区南西隅部で検出した土坑である。遺構の東半部を検出したのみで、全形は不明である。調査区西壁に本遺構埋土は確認されないことから、側溝内で遺構西掘り方が存在したものと考える。南北0.96m以上、東西0.44m以上を測り、平面形はやや歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は0.07mと浅く、断面形は底面の平坦な浅い逆台形状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。

SK13（第80図）

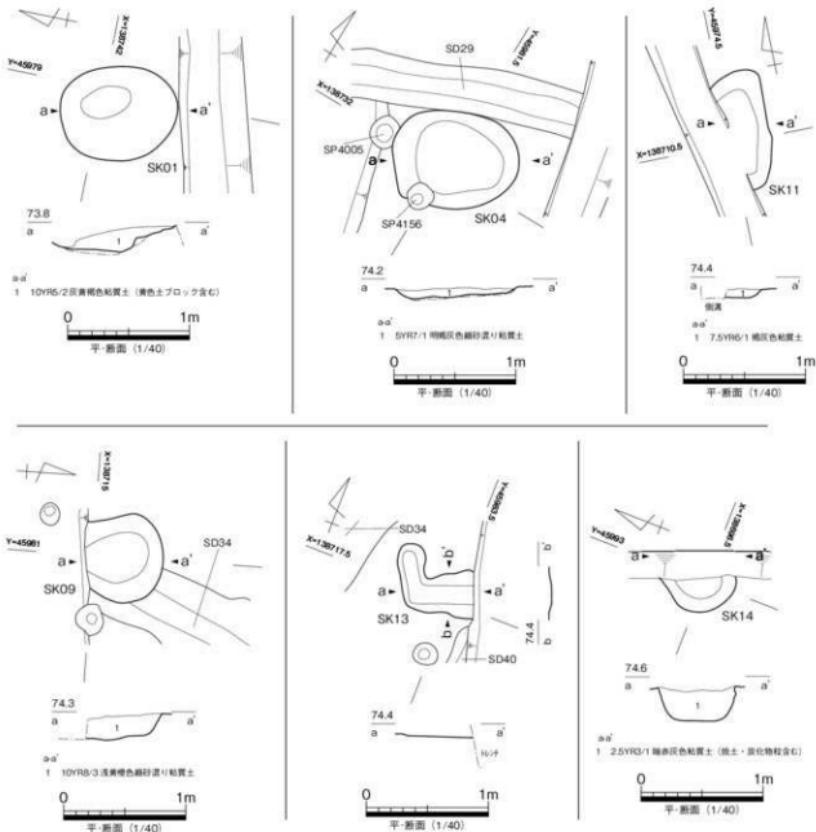
4区中央部で検出した土坑である。東半部は試掘トレンチにより削奪され、全形は不明。南北0.53m、東西0.57m以上を測り、現状で平面形はL字状を呈する。平面形状より、溝である可能性も考えられる。残存深は0.03mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土に関する記録は残されていない。

遺物は出土しておらず、詳細な時期や遺構の性格等は不詳である。

SK14（第80図）

5区北東部、ベース層上面で検出した土坑である。東半部は調査区外へ延長し、全形は不明。南北0.58m以上、東西0.46m以上を測り、主軸方向はN 45.19°Eで、平面隅丸長方形を呈するとみられる。残存深は0.27mで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、暗赤灰色粘質土の単層であった。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片3点が出土したのみで、詳細な時期は不詳である。



第80図 SK01・SK04・SK09・SK11・SK13・SK14 平・断面図

溝

SD01（第81図）

1区東部で検出した直線溝で、ベース層上面より掘り込まれる。遺構の東半部は試掘トレンチにより削奪され、全形は不詳。検出部分で、延長 6.32 m を調査した。流路方向は N 138.7°W に配される。調査区北端部で、検出面幅 0.56 m、残存深 0.02 m を確認し、断面形状は浅い皿状を呈するとみられる。溝の大半が試掘トレンチにより削奪されているため、流下方向は不詳である。埋土に関する記録はなく不明である。

遺物は出土しておらず、埋土も不詳なため、詳細な時期を特定することは困難である。

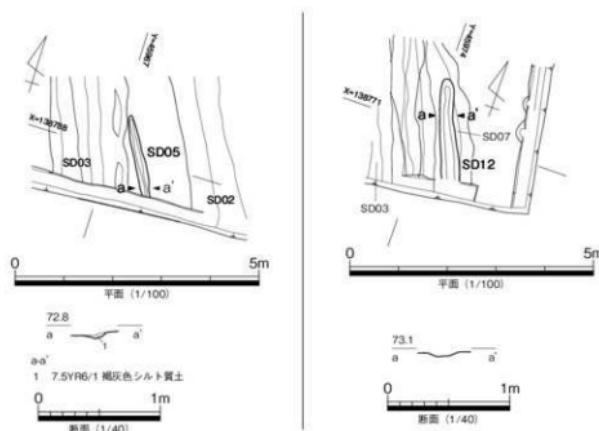
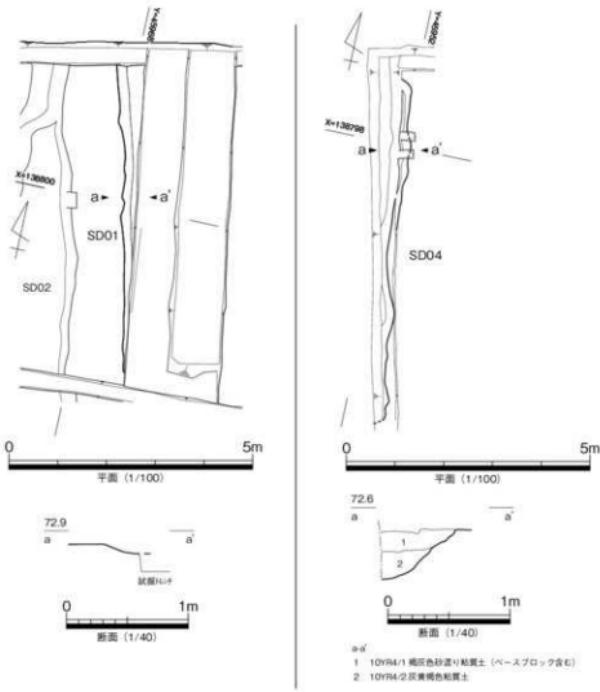
SD04 (第81図)

1区北西隅部、包含層上面で検出した南北溝で、溝の西半と南北両端は調査区外にあるため、全形は不詳である。延長6.9mを調査した。検出面幅0.40m以上、残存深0.20m以上を測り、断面形は碗底状を呈するとみられる。流下方向は不明。埋土は2層に細分され、上位層中にはベース層のブロック土が含まれることから、溝廃絶後一定期間放置された後、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

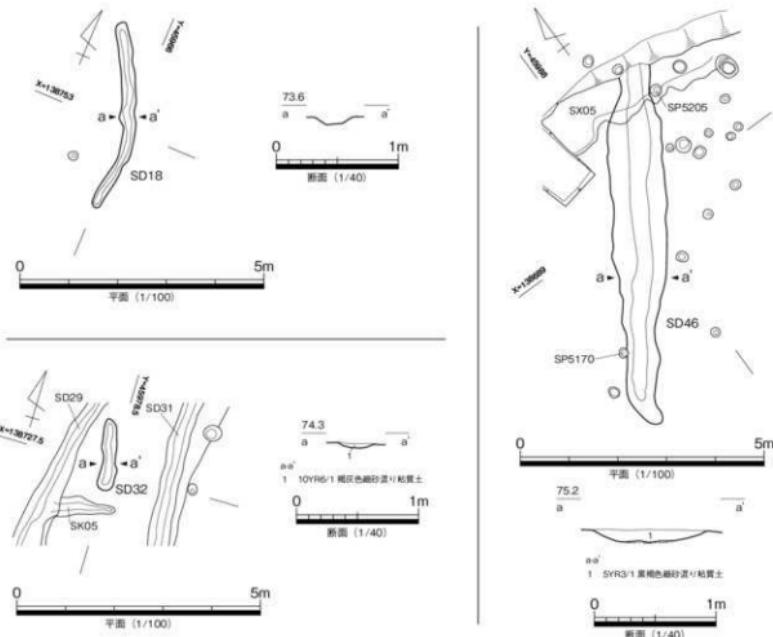
遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定しがたい。また、溝の一部を検出したのみであるため、性格も不明である。

SD05 (第81図)

1区南端部で検出した南北直線溝である。北端は調査区内で途切れ、



第81図 SD01・SD04・SD05・SD12 平・断面図



第82図 SD18・SD32・SD46 平・断面図

南端は延長が2区で検出されなかったため、検出長1.65 mをのみ調査した。流路方向N 28.34°Wに配される。検出面幅0.17 m前後、残存深0.05 m前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、北端で72.66 m、南端で72.68 mをそれぞれ測り、僅かだが高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土は、褐灰色シルト質土の単層であった。

遺物は出土しておらず、時期を特定する根拠に乏しい。形状より鉤溝等の可能性も考えられるが、調査区内で類似した遺構は確認されておらず、用途も不明である。

SD12（第81図）

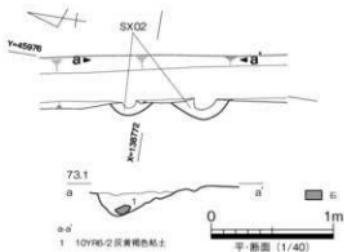
2区南東隅部で検出した南北溝で、北端は調査区内で途切れ、南端は3区で延長部が確認されなかつたため、2.1 mを調査したに過ぎない。重複関係から、中世溝SD07より後出する。流路方向は、N 21.22°Wである。検出面幅0.33 m前後、残存深0.05 m前後で、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は、北端で73.02 m前後、南端で73.05 m前後をそれぞれ測り、僅かだが高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土に関する情報は記録されていない。

遺物は出土しておらず、SD07より後出することは確実だが、詳細な時期を特定することは困難である。

SD18 (第82図)

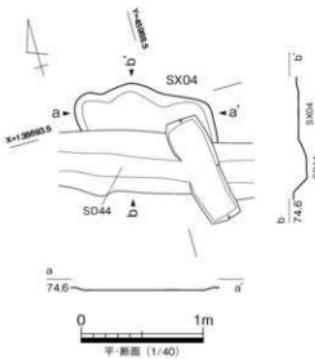
3区中央西半部で検出した、緩やかに西に湾曲して弧を描いて南北走する小溝である。南北両端は調査区内で途切れ、延長約39mを検出した。検出面幅0.25m前後、残存深0.05m前後で、断面形は浅いU字状を呈する。埋土に関する記録は残されていない。底面の標高は、北端部で73.43m前後、南端部で73.47m前後をそれぞれ測り、僅かだが高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、埋土等の記録も残されていないことから、時期・性格とも明らかにできない。

**SD32 (第82図)**

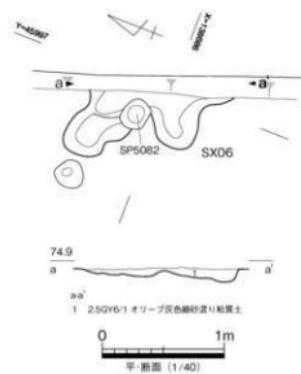
4区中央北半で検出した南北溝である。両端は調査区内で途切れ、延長約1.5mを調査した。流路方向N 13.17°Wに配される。検出面幅0.28m前後、残存深0.05m前後で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難である。また、形状より鋸溝等の遺構の可能性も考えられるが、調査区内で他に類似した遺構は確認できず、性格も不明である。

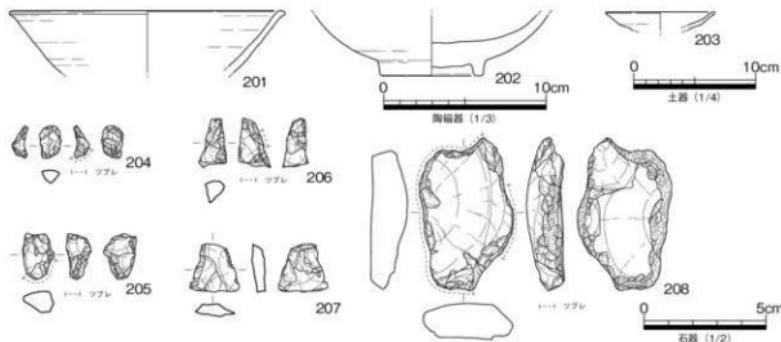
**SD46 (第82図)**

5区中央部で検出した南北直線溝。南端は調査区内で途切れ、北端は地境による段差により削奪される。検出長7.1mを調査した。流路方向N 35.13°Eに配される。検出面幅1.1m前後、残存深0.08m前後と浅く、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、南端で74.88m前後、北端で74.74m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、黒褐色粘質土の単層であった。

遺物は、器種不詳の土器小片が1点出土したのみである。埋土の特徴から、古代以前に遡る可能性も考えられるが、他に類似した埋土を有する遺構は確認されず、詳細な時期を特定するには至らなかった。



第83図 SX02・SX04・SX06 平・断面図



第84図 包含層等出土遺物実測図

性格不明遺構

SX02（第83図）

2区南東隅部で検出した平面不定形な落ち込みである。平面的に調査されたのは、西肩部のごく一部にとどまり、全形は不詳。調査区東壁の調査記録（第22図）で、南北0.62m以上、残存深0.2m以上を測り、断面形は碗底状を呈する。埋土は灰黄褐色粘土の単層であった。既述したように、SD02の上面から掘り込まれるが、平面図とは整合しない。また、遺構底面で1辺15cm程の板石がほぼ水平に検出されており、柱穴根石の可能性が高い。平面プランが不定形な点は、複数の遺構の重複を誤認した可能性も考えられる。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難である。SD02より後出することは確実だが、詳細な時期を特定するには至らない。

SX04（第83図）

5区中央部下段で検出した落ち込みである。南半部を近世溝SD44に切られ、溝の南側で延長部は確認されず、全形は不詳である。平面形は、東西1.13m以上、南北0.37m以上の東西に長いやや歪な隅丸方形形状を呈する。残存深は0.03m前後と浅く、断面形は皿状を呈するとみられる。埋土に関する記録は残されていない。

遺物は出土しておらず、SD44に先行することは確実だが、詳細な年代的位置付けの根拠は乏しい。

SX06（第83図）

5区中央東端部、第2面包含層（第27図18層）上面で検出した不定形な落ち込みである。調査区内で南北1.1m以上、東西0.5m以上を測る。残存深は0.1m前後で、底面には顕著な起伏を認める。平面・断面形状より複数の遺構の重複の可能性も考えられるが断定は困難である。埋土はオリーブ灰色粘質土の単層であった。

遺物出土しておらず、時期を特定することは困難であり、遺構の性格についても明らかにし難い。

包含層等出土の遺物（第84図）

201は、5区機械掘削時に出土した中国産白磁碗皿類の口縁部片である。202は、2区表土掘削時に出土した龍泉窯系青磁碗I類の底部片。高台壘付け及び高台内は露胎で、体部内外面無文である。203は、1区包含層出土の土師質土器皿である。12世紀代に位置付けられる。204・206は3区造構検出時に、205は2区壁面精査時に、207は1区造構検出時に、それぞれ出土したチャート製の火打石である。石材より、いずれも徳島県大田井産の火打石とみられる。周縁部に敲打痕が乏しい小片であり、稜角を再生するために打ち欠いた剥片と考えられる。208は、3区機械掘削時に出土した、サスカイト製の火打石である。弥生時代以前の石器とするには、剥離面が新鮮なことから、中世以降の火打石の可能性を考える。周間に敲打痕が強く認められる。

引用文献

- 福原昭嘉 2000 「明石鐵鉢の編年について」『近世の実年代資料』、関西近世考古学研究会
日下正剛 2002 「徳島城下町出土の土製火鉢・焜炉類」『論集・徳島の考古学』、徳島考古学論集刊行会
日下正剛 2003 「問題提起・徳島」『四国と周辺の土器II -火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態-』、四国城下町研究会
藏本晋司 2019 「香川県周辺地域における火花式発火法の導入と展開」『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 上林遺跡』、香川県教育委員会
松本和彦 2003b 「香川県における火鉢・焜炉類の動向」『四国と周辺の土器II -火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態-』、四国城下町研究会

報告書

- 佐藤竜馬 2002 「サンボート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）II」、香川県教育委員会
松本和彦 2003a 「高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（丸の内地区）」、香川県教育委員会
信里芳紀 2004 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第49冊 中間東井坪遺跡・正箱道路・八幡道路」、香川県教育委員会
太宰府市教育委員会 2000 「太宰府条坊跡XV -陶磁器分類編-」